
羽と言葉が示す場所

山神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽と言葉が示す場所

【Nコード】

N8070N

【作者名】

山神

【あらすじ】

文字を紡ぎ、言葉を紡ぐ。二十四の文字。

紡いだその先にある特異な力、それが魔術。

魔術師とその研究者を育成するアルフィン魔術師・魔技師育成学校に、エリアと幼馴染であるリフェウルは通っていた。

二人の住むアルフィンの町、そこで行われる一大イベントである中立加盟記念日。町は全体がお祭の喧騒に包まれていた。

しかし、その町にとある魔術師が訪れてから、エリアの笑顔に包まれた日常は焼き払われる。

序章

どこに存在するのかすら不明。離島かはたまた大都市の地下か、皆目見当もつかない孤独な独房を髣髴させる放棄された研究所。

電気系統は全て壊れ、部屋の面積のわりに不釣り合いな数の照明は、その多さの余りガラスの破片が床に幾重にも重なってしまっている。そんな破壊と混沌の狂気が埋め尽くすこの場で、唯一壊れるどころか傷一つ無い巨大な水槽があった。

破壊から生れる美。

天地を引っくり返したような荒れ様。研究資料や機材がせめぎ合うようなこの場所に存在する、一つの巨大な水槽。それはあまりに綺麗。否、周りの状況が水槽の汚点の無さを引き立てていた。

部屋の亀裂から生れる、体の芯までねっとり絡みつくような温風。その不快な感覚に、ただ一つ、反応する生物が水槽の中に居た。白銀の鱗、両翼、頭部の角。全長は裕に水槽の大きさを超えているが、尾を丸め込んでうまくしまっている。

伝説上の生物、竜。竜は水が溢れ出ることも気にせず、自らの体をくねらせた。

「今日は……見えるのか」

背丈に見合わない、明らかに大きすぎるコートを頭から深くかぶり、まるで最初からそれが目的だとも言うつのか、顔すらも見えない。そんな人間が、突如として水槽の前に現れた。声音から察するに、男性だ。

そんな、男が発した謎めいた言葉に、竜は女声ソプラノ高音域を部屋に響かせた。

『……誰です……ここはもう、放棄されたのでは』

そして竜は狼狽することも無く、淡々とした応対を。誰も居ないはずのこの場に人が現れたのは意外だったが、彼女の優先すべきことは他にある。何よりも、そんなことにいちいち反応する好奇心というものが、この竜には欠如しているのだ。

「報告だ。……まあ、密告のようなものだがな」

愉快そうにロングゴートの男は笑う。だがその時すらも、男は細心の注意を払って顔だけは見せないようにしていた。

やがて男は、竜がまったくの無反応であると気付くと、「やれやれ、つれんな……」などと呟き、例の報告とやらを話し始める。

「蒼のボウズが動き出したぞ。火を消しに……な」

「……それは、二番目も同行しているのですか？」

「二番目……。ああ、あのうるさいのも一緒だ。相変わらずヘラヘラとした態度だったな」

「……そうですか……。それで、何故ここへ？ まさか、それだけのためにここへ来たわけでもないでしょう？ そうであれば、今すぐここから出て行ってください。人間は嫌いです」

「ふん、元人間のお前が人間不信か？ 笑えるな。そして愚かだ。

その力に気付かず永遠と水に漬かるつもりか」

その男が竜を罵倒し、水槽に近づこうとした寸前、男の声は部屋に響かなくなった。

「人は嫌いだといったでしょう。……それに、自分の力は……分かっていないつもりです」

ガラスの破片でできた床に這い蹲る男は、返す言葉が聞こえてくるどころか言葉を考えているという反応すらも伺えない。

「……………」

先程まで生命活動を維持してきた男の体は、血管の各所から臓器の隅々までに渡り、まるで蜂の巣となっていた。それも外部からの攻撃ではない、体内の何かが固まり、内側から串刺しにしたのだ。

がしかし、そんな悲惨な状況にありながらも、男からは血液の一滴すらも零れない。それどころか

『スウウ　　ッ』

そう、それどころか、男の骸はじわじわと消えていくのだ。まるで水溜りが蒸発して気化するように。男の体も、それと非常によく似た消滅の仕方をしていた。

やがて男の肉体は完全に消え、代わりに円状の平たい、表面に幾重も文字が列記されている小石が一つ、骸のあった場所に置かれている。

『相変わらずだな』

突如、床の小石　その表面の文字が発光し、再び部屋の中に声が響いた。先程の男の声と同じものだ。恐らくさっきのものは偽者。こちらが本物なのだろう。

そんな事象を竜は見詰め、ふと嘆息をした。不思議とこの行動が、今までの彼女の中で、最も生物めいたものを感じさせた。

『貴方です。こんな姑息な魔術手段を使ってまで私に接触を試みるとは……。一体貴方たちは何が目的で私たちに関わるのですか』

『七対の翼オーダコラスが砕けた日』

『……………』

『また再び、あれが起きようとしている。　　エリア・フィーリン
ッを巻き込んで……………な』

『……………それはどういうことです。答えなさい』

その言葉だけに、竜はやけに焦った口調で、発光する石に　　男
に問いました。

『もうお喋りはおしまいだ。大人しくしているよ』

しかし男はこちらの質問に答えようとせず、その言葉を残して音
声は途切れる。

やがて竜は、再び体を丸め込み、水槽の水に漬かり始めた。

竜の鼓膜に、男の言葉が残響する。

それは、普通の人間には到底理解できない謎の単語の方なのか。

それとも。

『ごめんなさい……』

白銀の鱗、両翼、頭部の角。見るものを畏怖させる体躯を持った竜。だが、その瞳は全てを見守る聖母の様に、恋人を見詰める女性の様に、我が子をあやす母親の様に、慈愛に満ちた優しさを灯していた。

『……………ごめんなさい』

自らの運命を呪い、白銀の竜はただ、今日も水槽の中で眠り続ける。

世界はまだ知らない。もうこの時から既に、カウントダウンは始まっているのだということ。

眠りの中で、貴方を待ちましょう。

序章（後書き）

文章力が無く読みにくいかもしれませんが、読んでくださった方、ありがとうございます。

第一話 魔術学校

魔術師の住まう大陸 アウエイルプ。

そこには、魔術文字と呼ばれる言語以外の目的で使われる専用の文字を使い、異常な現象を行使できる者がいる。

二十四の魔術文字を組み合わせ、単語を作り、文章を作る。

紡がれた言葉達の力を受け支配するのが すなわち、魔術師である。

魔術のその多種多様に富んだ利便性（火を起こしたり空中に浮いたりなど、ありとあらゆる現象を起こす）から、魔術師の地位は瞬く間に磐石のものとなり、そしてまた魔術を専修する学習機関も生れたことから爆発的な勢いで浸透していった。 少なくとも、それまで重視とされていた科学技術による研究が蔑ろにされるほどには、だ。

円形（そう見えないことも無いというレベルだが）の大陸であるアウエイルプ、魔術大国であるアクデイ中央から北東に三十キロ

沿岸部からのほうが近いだろうか に、アルフィンのという町が存在する。

中立連合国と呼ばれる国の一部に、この土地は含まれていた。

技術的な面ではお世辞にも良いとは言えないが、広大な敷地面積と温暖な気候から自然に恵まれており、またその土地の大きさを活かした家畜の放牧は、目下この地を訪れる者の観光対象だ。

そんな田舎と称して良いはずのアルフィンの町にも、魔術専修学校は建てられており、また生徒数は 年々増加の傾向にあった。

アルフィンの町はずれ、ちょっとした丘の上の家に住むエリア・フィーリンツとリフェウル・ハウもまた、この魔術専修学校 アルフィン魔術師・魔術師育成学校の生徒だった。

まだ朝の五時も過ぎていない時間、少年エリア・フィーリンツの意識を覚醒させたのは、小鳥たちの囀りでも朝日の眩い光でも、そ

もそもそんな爽やかな目覚めの括りでは当然なく、爆弾魔(?)の早朝にしては随分エキサイティングなものとなった。

つまり。

「……なんか、僕の部屋がまるまる吹き飛んでるんだけど……。
リフェウル?」

「ん、おはよう。アンタもさっさと着替えてアタシの朝食作りなさいよ」

「清々しいくらいのふてぶてしさだ!？」

「って、そんなことよりリフェウル、君また僕の家壊したの?」

「いや、違うよ。ここはアタシの家だよ」

「家主が知らないうちに追い出された!？」

「まったく、部屋がむき出しのせいでちょっと体が冷えちゃったじゃない。どうしてくれんのよ?」

「僕のせいなの!？」

今日もエリア・フィーリンツの家は、同居人の手によって狼煙を上げていた。

魔術の高等学校（魔術のとは、魔術を一切学ばない高等学校もあるということだ）というのとは基本、個人でいることのほうが多い。

これは、魔術の授業の殆どが実技であるためだ。

初等学校入学から中等学校卒業までの間は、文学・数学・科学・歴史・亜人語と呼ばれる五教科 + 魔術についての知識の収拾に努める。魔術以外の道も考えてのカリキュラムだろう。

そして高等学校に上がると、実技が待っている。

魔術は精神的な面も多大に重要視されるため、本人が一番落ち着ける環境で練習するのが一番効率がいいのだ。そのためエリアたちの通う学校には教師が殆どおらず、また中等学校までの概念である、四十人近くが一つの学級となり同じ部屋で勉強をする『教室』と言

うシステムは魔術学校には無く、かわりに魔術の実技練習専用のスペースなる個室が無数に設けられている。

アルフィン魔術師・魔技師育成学校は四階建て、別棟に食堂と資料館を備えるその場所の校舎三階、大きく分けて自然型・移動型・造形型・干渉型に部類される魔術の干渉型専用の実技練習個室にて、エリア・ファイリンツは大きく息を整えていた。

制服に身を包む少年、十六歳にしては小さめの身長と、決して筋肉質ではなくむしろその逆。綺麗な白い肌と童顔、コンプレックスホワイト白銀色の髪をもう少し伸ばし、女性特有の二つ膨らみが胸部にあればまず女性と間違えるであろう容姿だ。

幾度となく試みた異常なほどの集中のせいで精神は磨耗し、空調はちゃんと効いているにも拘らず汗のせいで白銀色の髪がしっとり濡れる。

「……………よし、もう一回…………！」

エリアはもうかれこれ三時間、この部屋にこもっていた。

幼馴染であり同居人である少女、リフェウル・ハウも同じ学校の生徒だが、学ぶ魔術の種類が異なるので別の専用部屋にいる。

ドンツ！

『ゲホっ！？ コホっコホっ！？ また失敗したかあ……………』

はずだった。

「なんで造形型の部屋が今日に限って使用中止で干渉型の部屋を使うことになるんだ……………」

隣の個室から響く爆音（原因は幼馴染）に、エリアはいつも以上に集中しなければいけなかった。

もう一度、深く長く、深呼吸。

魔術は特殊な文字によって作られた文章により成り立つ。

魔術文字にはとても強力な言語魔力と言うものが宿っており、これを第一魔力と言う。その言語魔力は魔術文章（魔術を発動させる文章のこと）によって体内に取り込むことが可能で、取り込んだ言語魔力は、体内の一種の生命エネルギーのようなものと混合し別の

力に変換される。この時の一種の生命エネルギーのことを、第二魔力と呼んでいる。

そしてその第二魔力が体外に放射され、本物の魔力となった時、魔術文章に全く違う力として戻ったとき、魔術は完成する。

いわば人間の体は変圧器のようなもので、強すぎる力を自身の体に宿す第二魔力と混合することで弱め、魔術に適した力とするのだ。

今、エリア・フィーリンツの体は魔力の混合と変換の準備が行われている。巫人と呼ばれるものが見れば、エリアの周りには色鮮やかな『色彩』として見えただろう。

眼前に配置された机の上の紙　　に記されている文章を見詰め、
そして

エリアの第二魔力の流れが、止まった。

《束縛嫌う翼を羽ばたかせよう》

エリアは押し寄せる第一魔力の波を、自身の精神でただただ抑える。

《その色白銀にして、万物を抱擁する空を象る》

第一魔力を抑えながら、第二魔力で薄い膜のように、次第に分厚い壁のように囲んでゆく。

圧を掛けるように一気に握りつぶし（あくまで感覚的なものだ）、しかしある時点で第二魔力の戒めの力をふっと気が抜けたように力を下げる。

《紡がれた言葉達よ》

エリアの体に何度やっても慣れない違和感が駆け抜けた時　　魔力が完成した。

《悲しみに暮れた者たちへの贈り物を》

吐き出すように、違和感の塊を眼前の紙に　　魔術文章に注ぎ込

む。

カッと閃光が走り、眩しさが和らぐほうが速いか手元に濃霧のようなぼやけた空間が現れた。エリアは目を瞑って意識を飛ばすような感覚を思い描き、すると部屋の奥にあった何かの実験用の鉄球、そこにも 濃霧のような空間ができた。

突如として生れた二つの空間。

鉄球側に現れた空間が一瞬歪むと、濃霧のような現象は消え、そして鉄球もまた消えた。

どこに行っただらうとエリアが訝しむ暇も無く（そもそも訝しむ必要はないが）、今度は手元の濃霧が歪みだした。

渦巻く濃霧は可視光線までも歪め、歪みに歪んだ光景に、いい加減不快感を覚え始めたエリアは視線を外し、そして再び戻すと、そこには先程消えたものと同じ大きさ 何もかもが同じ鉄球が、手元で転がっていた。

第一話 魔術学校（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第二話 客人

「あーお腹減ったあ……。さ、とつとと食べるわよ」

「リフェウル、なにも屋上まで来なくても……」

「いいじゃん、別に。ここの方が風が当たって気持ち良いし、陽の光も当たって寝れそうよ?」

絶対君は後者の方が目当てだろう、というエリアの静かなる反抗心が生んだ（しかし心中だけに収まった）的確な指摘に気付くはずもなく、リフェウルは精製型の部屋に置いてあった敷物を拝借、それを広げながら、同じく食堂にあったパンを適当に選ぶ。

エリアは、これは犯罪なのではないかと嫌な汗をかき、後でお金を払ってこの敷物をこっそり返しておこうと心に誓った。

あれからエリアは午前中の練習を切り上げ、リフェウルを昼食に誘った。一応付記しておく、これは恋愛感情云々が関与しているというより、単に誘わなければリフェウルの機嫌が悪くなって余計な被害（主に金銭的な意味での）を被るからだ。

「ねえ、午後からどうする?」

この質問は、決して午後の授業を抜け出そうという意味合いではない。そのままの意味で、今日は午後から学校での実技練習が全面的にいかなる場合でも禁止されるのだ。

その理由と言うのが。

「明日は中立加盟記念日ちゅうりつがめいきねんびだったつけ。それと、調印式ちやういんしきも。たしかアクデイの姫様直属の配下 兵士の人も来るんだよね」

「そうそう。午後から色々と準備あるみたいだし。とは言っても前日の午後から用意するぐらいだから、余裕はあるんでしょうけどね。とまあそれはさて置き、どうする? おばさんのところに行く?」

ここに出た“おばさん”とは、二人の育て親のこと。

二人の両親は魔技師まぎし 平たく言えば魔術の研究者。仕事で大陸

の都心部にいるためユノ・アレイジ（二人はユノおばさんと慕っている）がエリアとリフェウルを預かっていた。

早朝家の一部が爆破されたあの家は元々エリア家の物で、しかし両親と離れてからはエリアもユノのもとに住んでるため、今では二人のプライベート用魔術練習場所と成り果てている。朝あそこにしたのは、昨日夜遅くまで魔術の練習をしていたためだ。

得にすることもやるべきことも無かったので、エリアは軽く首肯し、それから口で再び肯定の意を唱えた。

「いいよ。今日はかなりこもってたし、正直疲れてるからね」

「……なんかアンタ、妙に機嫌良いわね」

「まあね。久しぶりにまともな発動が出来たから、少しは興奮してるよ」

少年の笑みは嘘ではなかった。

元々エリアは頭こそ優等生だが実技になると劣等性のため、魔術に関しては失敗の方が圧倒的に多かった。今日あの成功まで、既にエリアは両の手の指で数え切れないほどの失敗をしている。そのため、成功の喜びも一際大きかった。

そんな微笑ましい光景に、リフェウルの唇が綻んだ。

「ふうん……。じゃあ、見せてもらおっかな。100グラムまでの物質しか運べない魔術師さんの魔術をさ」

完全におちよくっていた。

基本彼女はエリアの恥ずかしがる顔、驚く顔、困る顔などを見るのが大好きなとっても良い（？）性格の持ち主なので、今回もまたそんな感じなのだろう、言われた本人はどんな反応をするのだろうか。と子悪魔的（エリアからすれば十分悪魔だが）な笑みを浮かべながら待機である。

「……いいよ」

が、今回は少々　というか、かなり意外な答えが返ってきた。

「僕もいつまで経ってもこのままじゃいけないと思つてたから。せめてもつと重いものを動かせるようにしたいとは考えてたんだ」

「え、いや、冗談で言っただけ……」

「早く、リフェウルが言い出したんでしょ」

一人黙々と準備に取り掛かる（とはいっても屋上に置いてあつたバケツに水一キロを入れていただけだ）エリアは、彼女の悪意に全く気付かず、むしろ自分の背を押してくれた友人に対しての感謝の気持ちで一杯だつた。

「……なにこの妙な罪悪感」

パターンからしてこの少年はまず間違ひなく失敗するだろう。そうなる、この男の子は、かなりの期間へこむ。そうなるといくらリフェウルでも罪悪感を感じるわけで……。

《束縛嫌う翼を羽ばたかせよう》

そうこうしているうちに、エリアは一人で準備を済ませ、一人で失敗へと突っ込んでゆく。

そして案の定、一旦消えたと思つた水入りバケツは彼とバケツの初期位置の丁度中間地点の辺りに現れ たと思えばかなり速めのスピードでこちらへ向かつてきている。

しかし魔術の実技練習においてはそう珍しいことでもないのだから回避、すぐに二人はいつものようにふざけあうだろうと思われた光景。 それは、バケツの進路方向の先に一人の人間が立っていたことで現実には成りえなかつた。

重量一キロとはいえ頭部に当たれば危険だし、それ以外の箇所でも怪我はしてしまうだろう。

エリアは、危ないと声を張り上げようとし

そしてその時にはもう、事態の收拾はついていた。

バケツが、塵になるといふ結果で。

「本当にすみませんでした……」

「だからもう大丈夫だよ。ボクもあんなところにいたのが悪いんだし」

「あ、いや、でもやっぱり……」

謝罪するたびに思考が後ろ向きになるエリアに気を遣ってか、バケツを塵にした男　カイフィールド・ランス　はやや強引に会話の軌道を変更した。

「それにしてもさ。君、面白い魔術使ってたね」

「あれ？　見てたんですか？」

リフェウルは猫を被り敬語だ。一応、一般常識は兼ね備えているらしい、エリアは安堵の息を静かにこぼした。

「直感的な見解だけだね。」

あれって、干渉型の中でもかなりの難易度を誇る、『空間に干渉する』魔術　空間を作り出してしまおうくうかんまじゅつ空間魔術と、

同じく干渉型の、呼びたい物を条件指定で設定して自分の下まで移動させる召喚しょうかんまじゅつ魔術。

君がやったのは、その二つともだとボクは思うんだけど……

ハズレかな？」

『……………』

無言。

それは、見当はずれの答えに呆れて声も出ないという類のものでは当然無く。その逆、あまりに中心を抉ってくる答えに、術者であるエリアだけではなくリフェウルすらも啞然、呆然、愕然としていた。

こんな間抜けな光景が指し示すことは決まっている。

大正解だった。

空間移動というものがある。これは、点と点の移動のことで、空間魔術は、その『点』を作り出す魔術だ。あの時は、部屋と言う空間の中に繋がっている二つの別の空間を生み出した。濃霧のようにぼやけていたのは、部屋と言う空間と新しく生れた空間が境界面で混ざり合っていたせいだ。つまり、力不足。

そしてもう一つの召喚魔術だが。

生物、物質問わず、条件指定として設定したものを、慣性を無視して自分のもとへ引き寄せる魔術だ。生物の場合は意思を操り、物質の場合は力で呼び寄せる。勿論、距離による制限はある。

エリアが使うのは、この二つを組み合わせ改良したもの。

空間移動は自分が移動するためのもので、大概、点は自分の体と行きたい場所に作り、発動するのが普通だ。そして空間魔術は、その点を自分の体以外に作る。ただこの二つは有視界内になければ当然作れないわけで、その弱点を補ったのが召喚魔術だ。

召喚魔術の条件指定により場所を理解し、有視界内でなくとも点を作り、呼び寄せる。それも、点と点の移動なので、距離に関係なく一瞬で、だ。

それが、エリアの使う『空間呼応魔術』くわんかんとおこしまじゅつである。

たとえ空間移動の点が壊れても、それは消えずに必ず現れる。しかしそれは点が壊れたのであって、召喚魔術の線移動があるので『移動』という行動は引き続き取られるし、空間の移動だからといって慣性がなくなるわけではない。さきほどバケツが急に現れカイフイルドの身に迫ったのは、その所為だ。

この辺りの季節はとうに春だが、偶然吹き荒んだ、突くような冷たい風によって、エリアとリフェウルの思考は驚きから解放され、やがて二つの反応に分かれた。

エリアは尊敬の眼差しを向け、

リフェウルは不機嫌そうに怪訝の視線をぶつける。

優等生といっても、エリアは普通の^{ハイスクール}高等学校の普通の生徒。見ただけで魔術の種類を当ててしまったカイフィルドに、明らかに普通じゃないだろうという訝しむ気持ちよりも、「凄い」という漠然とした感情が勝った。

反面リフェウルは、蚊帳の外にされた気分で心中穏やかではなかった。

元々彼女は対人関係がうまい方ではなく、エリアやユノといった身近にいる人間としか会話をしようとしなない（それでも事務的なことで学校の生徒と時たま会話はするが）。

馴れ馴れしい、とあからさまに不機嫌そうな表情を浮かべ、さらに一般人ではないだろうとご尤もな見解を抱き、それでもリフェウルは猫を被ることを選択した。

「ところで、この学校に何か用でも？ 午後からは実技練習も禁止ですし 失礼ですけど、見たところ生徒には見えませんし……」
流石にこれは直球過ぎただろうか。

不安に思うもじつと答えを待つリフェウルに、カイフィルドは苦笑した。

強ち、間違いではないからだ。

染色による、麻で作られた鳶色のロングコートに身を包んだ、カイフィルド・ランスという名の青年。

煌く炎を髭髯させる緋色の双眸、風で揺れる茶髪。大人びた雰囲気纏いながらもどこか少年のような笑みを浮かべる彼からは、悪いイメージは受けない。

高身長で二人とも見上げる形になったためか、双方の彼に対する第一印象は「不思議なお兄さん」で落ち着いた。

「まあ、実際ボクは十九だからね。ここの生徒でもないし。」

あのさ、君たち。ここの学校の校長室ってどこにあるか知らない？」

カイフィルドの申し出は、そこまで不思議なことではなかった。この学校は貴重な文献書物が少なからずあるため警備が厳重だ。

人間的なものではなく魔術的な警備だが、信用性に長けている。そんな場所、安易に進入できるはずもなく、エリアもリフェウルも何らかの関係者（エリアは明日の調印式ではないかと憶測を立てている）だと考えていた。

「明日の行事の関係者の方ですか？」

「う、うん、まあね……」

妙に歯切れが悪かった、と思ったのは気のせいだろうとエリアは判断する。

簡単な道順の説明を受け、彼は苦にすることもなく覚えたのかありがとうと礼を述べた。

「じゃあ、アタシたちはもう行きますね」

「うん、ありがとう。助かったよ。」

もし良かったら、名前を教えてくださいませんか？」

「エリアです。エリア・フィーリンツ」

「リフェウル・ハウです」

「ボクはカイフィールド・ランス。明日、もしかしたらまた会えるかもね」

彼に対する警戒心は皆無となっていたため、三人は軽く自己紹介を交わし。そしてやはり行事の関係者なんだと自己完結した二人は、敷物を片付けて屋上を出た。

「また会えるかもしれない、か。我ながら、中々の好青年っぷりだったね」

『ふふ。随分丸くなりましたね、カイフィールド』

「まあ、我俣でお喋り好きでしかも珍しすぎる生物の君の相棒をやっていたら、嫌でもそうなるよ」

『可愛くないですね。そんなことじゃ、女性に好かれませんか？』

「そもそも女性に興味ないんだけど……」

『え、もしかしてソツチ系ですか？』

「考えが両極端すぎない？」

『まあそれは良いとして』

「……自分から始めたんじゃないか」

『……………』

結局、明日は予定通りに行動するんですか？』

「……………」

『アクデイと中立連合の同盟条約の調印式。確かにこれは、理想の形でしょう。』

アクデイは元々穏和な国風です。アウェイルブの大地がアクデイ、ウィクジブス、その他の町、集落、あしん亜人などが集まって出来た中立連合の三国に別れてから、アクデイだけは内戦も起きませんでしたからね。

でも、実際ウィクジブスとは冷戦状態みたいなものじゃないですか。

向こうは話し合いの機会を設けようとしません。

アクデイは同盟により戦力を拡大しようとしている。

そしてその戦力拡大のために 大のために小を犠牲にしようとしている。このままでは、誤解が戦火を巻き起こしますよ？』

「……………」

『それでも貴方は、国に言われた通りに行動するのですか？』

「……関係ないよ」

『カイフィルド？』

「ボクはボクのするべきことをするだけだ。

ボクに言ってくれと頼んだのは、腹の立つ上司とか弱い女の子。

だったら、従うべき人は決まっているじゃないか」

『……………じゃあ……………！？』

「ああ。

もう二度と、あんな涙は見たくないんだ」

第二話 客人（後書き）

エリアの使う魔術は、自分で考えたものです。

なので、矛盾している点や訳が分からない点があるかもしれません。

その時は、指摘していただけると助かります。

読んでくださった方、ありがとうございます。

自分で確認はしていますが、誤字脱字があるかもしれません。もしありましたら、報告してくださると助かります。

こんな作品、駄文ですが、読んで下さる方、どうもありがとうございます。

第三話 パレード前夜

アウエイルブ大陸は昔、領土の取り合いによって小勢力が無数にぶつかり合っていた。気候、その場所で採れる食物の種類。小勢力はそれぞれ自分達に適した地へと渡り、そして同じくして渡ったものと戦火を交えていた。

戦火は収まることを知らず、植物を焼き払い、血肉を撒き散らし、食べ物すらも満足に手に入らなくなる。

やがて、大陸は人の住まうものではなくなった。

餓死寸前の人間は死体を食らい、生き延びる。体はそれに順応していき、亜人と呼ばれる人種も生れた。

そして。

魔術師が生れたのも、そんな時代だ。

二人の魔術師、片方をアクデイ、もう片方をウイクジブスと言う。アクデイは東西南北の平和を望む、戦意を消失した小勢力を救い。ウイクジブスは地方を転々とし、大陸が荒れても尚暴走に拍車をかける人間達を圧倒的な力で屈させた。

そして小勢力は二つの強大な勢力に変わり、魔術大国が生れる。

東西南北、大陸の中央に領土をもつ国、アクデイ。

大陸の各地に領土を広げる国、ウイクジブス。

そして、その後魔術が復旧したことにより生れた国、中立連合国。世界はこの三国。

その内の二つ、アクデイと中立連合は、明日の中立加盟記念日に同盟を結ぶ。

アルフィンは、その前日の夜にも拘らず観光客や報道関係の人間で賑わっていた。

アルフィンの町、民家よりも多くの飲食店が軒を連ねる大通り。その一角、エリア・フィーリンツとリフェウル・ハウが住むユノ・

アレイジの家はパン屋を営んでいた。現在、二人は明日の早朝、観光客に売る予定のパンの仕込を手伝っている。

ユノは表にまわって接客をしていたので、二人は無駄話に華を咲かせていた。

「それにしても、記念日だって調印式だって、ましてやパレードだって明日なのに。よくもまあこんな人が集まるわよね。記念日だけでも毎年大変だっていうのに、ありがたいのかわからないのか分かったもんじゃない」

「たしかにパレードは明日だけど……」。

それでも、記念日のアルフィン随分賑やかだからね。やっぱりこれを楽しみにしている人はいるんだよ」

アルフィンの町はたしかに田舎といつて良いものだが、町の大きさゆえか記念日などの一大行事となるとそれなりに規模が大きくなる。普段は人数がお世辞にも多いとはいえない大通りだって、もう三日程前から人ばかりで一杯だ。それほど記念日は知名度が高かった。

だが、この町に来る者の目当ては記念日ではない。その後の日の入りから開始されるパレードこそが、アルフィンの名物である。

「そんなもんかねえ……」

リフェウルは既に辟易した様子。

反面、エリアは上機嫌でパンの仕込みに勤しんでいた。

テンションよりも心身の疲れに正直な人間と、心身の疲れよりもイベントを優先させる人間。

当然、リフェウルが前者で、エリアが後者だ。

頭は優等生でもまだまだ子供ねえ、とリフェウルが笑んだのはここだけの秘密。

「出店も色々とお出るらしいからね。おばさんも、今年はお出らしいよ。パン大量に焼いて、学校の部屋使わせてもらうんだって」

「気合入ってるわね……」

「そりゃあ、去年は体調崩しちゃっていけなかったからね。おばさ

ん、張り切ってるよ」

苦笑にも似た笑みをこぼしたエリアは、仕込みの終わったパンを容器に移し、冷蔵庫に入れた。

さあ次はどの作業をやるうかと考えながらキッチンの周りを見渡している、カーテンのような仕切りで遮られていた表からユノが現れた。

「客は少なくなったし、どうせ明日はパレードだからあんた達行けないだろ。だから、いまの内に楽しんで行つといで。仕込みの続きは帰ってきてからでもいいから」

「ありがとう、ユノおばさん。」

じゃあ、お言葉に甘えて行ってこよ、リフェウル」

リフェウルは明日のパレードを楽しみにしていた人間なので、「明日手伝うのか……」とシヨックを受けていたが。もう十六である。どうせ明日行けないんだつたらせめて今日楽しまないと損だ、と気持ちを切り替えて、出かける仕度を始めた。

パレードと言っても、千を越える花火（魔術を使った鳴き声有動物花火が最近の流行である）みたいな、風情ある物では無く、単なるお祭によるドンちゃん騒ぎと表した方がいいだろう。

パレードの日だけ開店しても大した稼ぎにはならないので、出店を開く者たちは皆、三、四日前ほどから場所を取り商売をしている。エリアとリフェウルは着替えると、早速、出店が集合している広場に足を運んでいた。

隣の少女。幼馴染のリフェウル・ハウは、十六歳とは思えないラフな格好で佇んでいる。

黄金色の髪ゴールドの毛、常にどこか悪戯っぽい笑みを浮かべている。端正な顔立ちにエリアよりもちょっと高めの身長で、発育も順調。だ

からか、エリアはリフェウルに、歳相応の女の子らしさをそれはもう切実に願った。

二人の視線は、広場の中心へ引き込まれるように向かった。

香ばしい匂いを送風機で撒き散らす、金欠の人間には少々酷な出店もあれば、魔術を使用して標的を落とすというちよつとした遊戯まで。

パレード前夜というわけか、待ちきれなくなったように今夜は賑やかだった。

「どうする？ リフェウル」

「まあ適当に歩いて、気に入ったのがあったら寄ってみるってのが良いんじゃない？」

「だね。」

お金はユノおばさんから貰ったのもあるし、少しだけなら使っても良いよ

「じゃあ、行こうか」

街灯に照らされた広場。人だかりの中へ、二人は入っていった。

「ねえ、リフェウル」

「ん？ どうかしたエリイ、そんな顔して」

「僕さ、最初に言ったよね？ 『お金は少ししかないって』」

「うん、言ったわね。だから、ありったけのお金を使って、出来るだけ多くのものを買ったわね」

「その思想に対して僕は複雑な心情を抱くところだけど、まあいいよ。」

それでリフェウル、少ししかお金がないのに、どうして僕はこんな、持っていた金額とあからさまに合っていない物を持っているんだろう」

エリアの手元には、ほとんどの出店の食べ物およびお土産品。牛を引っ張るための綱（当然のように牛付き）と、鶏が三羽。後ろからは、豚がとてと可愛らしく歩いてきていた。

いやこれはないだろう、だって、あれだよ。牛だろ。鶏だろ。豚だろ。売ってないだろう、売ってたとしても買えないだろう。なのに何故僕は、牧場有名三種を引き連れているんだろうか。

そんな、エリアの内心がとても乱れているのを知ってか知らずか、リフェウルは何食わぬ顔で応えた。

「んーっとね。」

店の主人に、『この前のことだけどさあ』と低い声音で言つと、あらとつても不思議、値段が安くなるのよ。まるで魔法の言葉よね」

「悪魔の言葉だと思つよ！」

「神から授かった交渉術、とても言っておくわ」

「魔神から授かった脅迫術だよ！」

「便利な世の中よね。」

「魔術で録音も出来るんだから」

「君、この町に何をした!？」

エリアがひとしきり叫ぶと、リフェウルは「じ、冗談よ。そうに決まってるじゃない」と苦笑し、「どんだけ信用ないのよ……」と落ち込んだ。

「単に安くしてくれたり、なんかタダでくれたのよ」

「それはそれで凄いいんじゃない……」

「まあ、アタシもなんでかよく分かんないんだけどね。」

頻繁に店に顔出す人なら分からないでもないけど、それでもちよつと多すぎよね。これは。

だって、中にはアタシすらも覚えていない人もいたのよ。町で道案内して、愛想笑い浮かべただけなのに……」

リフェウルは納得のいかない表情を浮かべながらも、次の瞬間にはまるでそんなことは考えていなかったとても言わんばかりの表情で笑んだ。

「リフェウルってさ、自分では対人関係は苦手とか言っておきながら、異様に人に好かれるよね」

「それは まあ、一概に否定は出来ないわね」

「この間も学校で告白されたしね」

「あー、それは言わないで。あんまりいい思い出じゃないのよ、それ」

告白した人間が聞けば余りにショックで立ち直れなさそうな言葉に、エリアは少しその男子生徒に同情した。

「そんなに悪い人には思えなかつただけどなあ……」

「別に、悪いとか良いじゃないわよ。」

ただ、なんか信じられないのよね、アンタとおばさん以外の人間が。

それに、別に信じたいとも思わないし、仲良くしたいだなんて言語道断よ。現状維持で十分だわ

人と関わることを苦痛に思う人間もいるって、覚えておきなさい」「リフェウルって、捻くれてるね」

そう茶化したエリアの目に、楽しげな感情は混ざってはいなかった。

長い幼馴染関係の中で、いまだ分からないリフェウルの、あの人を頑なに拒む姿勢。

これまでも何回か訊いてみたが、決まってリフェウルは黙り、その空気を芳しく思わない質問者エリア自らが茶化すという経緯に終わっている。

そしてまた、今回も。

祭の喧騒に掻き消えてしまいそうなほどの素朴な疑問。エリア自身は信用されているようなので気にすることではないのだが。それでもエリアは、納得がいかなかった。

辺りは、まだ騒がしい。町の人々の笑い声がけたたましく響き、それよりも大きな声で出店の店主が声を張り上げる。それは、一年

に一度を祝う人々の、心からの気持ちであつて。勿論それは、エリアにも分かつてはいた。

こういう楽しい場所に来れば、自然と胸が高鳴ることを、エリアは知っていた。

自分は子供で、やっぱりこういう事に参加するのは素直に嬉しいと、エリアは認めていた。

一度消えた感情の灯は、そうそう燃えることはない。

結局その日は、それ以降、渦巻く疑問に心を満たされ、心の底から祭を楽しむことを、エリアは出来なかつた。

第三話 パレード前夜（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第四話 密談

早朝よりも深夜と称した方がしっくりくる時間帯。

アルフィン魔術師・魔技師育成学校、無数の練習部屋の一つ。干渉型の部屋に、カイフィルドは佇立していた。耳元に当てている金属は、通信機の類。

科学技術が蔑ろにされたと言っても、それはまだ生きている。

カイフィルドは魔術師でありながら科学技術を使うことに躊躇わないため、頭の固い上司からの小言が目下悩みの種だ。少数ながらいる、魔術師という社会的地位は絶対と思っている魔術主義の人間たちを、彼は好きになれない。

断続的に続いていた機械音が途切れ、そしていつ聞いても好きになれない威圧的な声音が、通信機越しに、カイフィルドを不快にさせた。

「アイマン、計画通りで良いんだな？」

「ああ、構わない。」

開会式でお前が、今回の中立加盟記念日と調印式について向こう側から何か求めてくるだろう。例えば 英雄のお言葉、だとかな

「……………」
英雄という言葉に皮肉めいたニュアンスを感じたが、彼は黙殺した。

「そこで、我々は動き出す。」

なあに、難しいことじゃない。

開会式に現れた謎の集団が町民を襲い、それをお前が撃退する。単純で子供騙しみたいだが、感謝すべき対象が分かり易いだろう？

「………… アイマン。」
別に、その段取りで支持を得なくても、姫が直々にお話をして下されば……………」

「たかが田舎の住民のために、アクデイ様の手を煩わせるのか？」

様、という敬称を強めて言った気がしたのは、自分の気の所為ではないだろうと、カイフィールドは確かな確信を持っていた。

『調印式など形だけだ。そのために姫様を動かすなど、戯言もいい加減にしろ。』

いいか、我々が必要としているのは確かに中立連合国だが、全部ではない。中立国連合に加盟している亜人の集落を手中に収めることだ。

亜人は先の戦争で生れた、醜悪が生んだ結晶でもある。奴らは体の器官が進化していて、魔術の進歩に繋がるのだぞ。

第一魔力と称されている言語魔力だつて、第二魔力と称されている生命エネルギーだつて、そもそも魔力と言うエネルギー自体が謎なのだ。それを明かすためなら、小の犠牲は仕方の無いことだ。アクデイが頂点に上り詰めるためには、必要なことなのだ。

「頂点に君臨することがそんなに大事か？……」
カイフィールドの声音に、怒りが顕となる。

『少なくとも、お前にとって“頂点に君臨する”ということは最も大切なことだと思っていたのだが？ 違うか？』
「くっ！？」

苦虫を噛み潰したような、少なくともカイフィールドにとっては相手に絶対見せたくない表情を浮かべる。

弱みと言うより、必殺に等しかった。

カイフィールドにとってそれは、大事なものであり枷でもある。

本当は今すぐ怒鳴り散らして、どこかに潜んでいるアイマンを叩きのめしたい彼も、彼女と言う枷のせいで思うように動けない。

だが、それと同時に、彼女がいなければ、カイフィールドはそもそもここまで必死にならなかつただろう。

だから、彼は決まって自分を責める。弱い自分を。浅はかな自分を。

大事なものを守るために、今、彼は、耐えなければならぬ。

一人の人間の野望のために、彼はその駒と化せねばならない。

『少数の人間が死ぬことになっても、お前は言われたことをただやり通せば良い。他には何もするな。』

まあ、少数で済めば良いがな』

「っ！ お前！！」

怒声を放ったその時にはもう、通信は切断されていた。

「くそっ！」

力任せに投げた通信機は、ボールのように床を跳ね、部屋の隅に置いてあった机の角にぶつかり、派手な音を立てながら細かな部品を撒き散らす。

スカーレット
緋色の双眸は、あの爽やかさを微塵も感じさせない、確かな怒りを宿していた。

リフェウルの件は、実際、微かに疑問に思っていたぐらいの感覚であって、そう何度も思い悩むレベルではない。それは、エリアのいつもと違わぬ生活リズムが語っていた。

つまり、エリアは今日もリフェウルによって最悪の寝起き記録を更新したのである。

「リフェウル、今度は何やったのさ！？」

起床と同時に犯人を問い詰めるところ、慣れと言うのは恐ろしいもので、エリアは見事なまでに順応していた（これが彼にとって褒め言葉になるのかはさておき）。

「あー、うっさいわねえ。こっちは今大変なのよ。」

折角新しい精製型魔術試してみたのに、また爆発で終わっちゃうんだもん。

もういいわ。ねえエリイ、今度はどんな爆発が見たい？」

「なんか魔術の主旨変ってない！？ 開き直ればいいってものじゃないよ！」

エリイと言うのは、エリア・フィーリンツのあだ名。彼女いわく、

そちらの方が可愛げがあるらしい。本人が嫌っているところを除けば、（良いあだ名の基準は不明だが）中々良いあだ名だろう。

「大体、リフェウルの魔術文章は適当すぎ！ あんなちぐはぐな単語列記して、何がしたいのか全然分からないんだもん！」

「別に。何もしたくないわよ」

「じゃありフェウルは何やってんの！？」

「失敗」

「故意的にやってたの！？」

「いや、違う。爆発ね」

「なんで悪く言い直したんだ！」

朝にしては随分騒がしいものだが、二人と家主にとっては当たり前。

近隣住民も慣れたもので、今や苦情を言いに来る者もないくらい。むしろ、これを楽しみにしている輩が増加中だ。

二人の口論は次第に魔術を交えたものとなり（尤も、エリアは魔術が苦手なので、リフェウルの一方的攻撃となったが）。

結局、部屋中に穴が空きユノの逆鱗に触れ、二人が長々と説教を喰らうという形で口論は止められた。

エリアがオリジナルの魔術を使っていることから分かるように、既存の魔術文章以外で魔術を発動させることはそう難しいことではない（尤も、彼の魔術は両親から授かったものだが）。

リフェウルもまた、似たような境遇だった。

魔術は多様な代物で、種類も様々だ。

そんな魔術を大きく纏めると、四つの型に分かれる。

しぜんがた自然型 火・水・土・風の四大元素に空を加えた、五大元素を

主軸とする魔術。これは術者の数が多く、また扱いやすいことから、実技経験が皆無に等しい学生などに好まれている、汎用性が高

い魔術。

移動型 いどうがた 加速、減速、停止。ただ「動く」だけでなく、生物の血液のスピードを加速させることも減速させることも可能。全ての意味においての加速、減速だ。

干渉型 かんしょうがた 催眠や相手の頭の中を覗くことができる、この部類に入る魔術は殆どが高レベルの魔術。自然型 例えば火など、無生物であっても支配することが可能で、それを活かした魔術も含まれている。

造形型 ぞうけいがた 魔技師を目指すものが多く学ぶ魔術型。物質同士を合わせる化合物や、化合された物質を純物質に変える精製。時に全く新しい物質を作れることから、重宝されている。

リフェウル・ハウは、造形型の生徒だ。

魔術学校はクラスこそ無いが、教師は存在する。そして、造形型のように、括りも存在する。

今日は中立加盟記念日であり、調印式でもある。記念日は数少ない、型別の生徒が集い教師と一緒にいるという珍しい日だった。

実技用の個室は使い物にならないので、記念日兼調印式の会場である校庭、その横に聳え立つ資料館に、造形型魔術の生徒は雑務的作業をこなしていた。

尤も、雑務感覚でこなしていたのはリフェウルぐらいなのだが。

自然型の生徒は、今夜のパレードで使う花火の点火作業の最終確認。移動型と干渉型は会場の用意。造形型は、校庭入り口と会場の所々に設置するアーチ、その装飾品を魔術で作成していた。

男子生徒はアーチの取り付け作業で、女子生徒は装飾品の作成。

リフェウルは朝の騒動やエリア宅での出来事から、造形魔術が苦手と思いきや、あれはオリジナル魔術の場合のみで、以外にも既存魔術文章の扱いには慣れていた。

先程から一人で、華の形をした装飾品を大量生産中だ。

「すごいわね、リフェウル。私なんかまだ二桁も行っていないのに…」

貴方のそれ、もう花弁だけで花束出来ちゃうじゃない」

ふと、同じ造形型の女子生徒、サリナ・フェイ・ローザが話しかけてきた。

本人にその気が無くても、やはりリフェウルは何気に人気だったりする。端正な顔立ちで、まあ当たり前と言えばそうなのだが。それでも彼女の性格上、他人には冷たいので、喋りかけてくるのは彼女みたいな珍しい人種ぐらいだ。

と、リフェウルは思っていたりする。

それは花束とは言わないんじゃないか、と彼女は考えたが、指摘して微妙な空気になるのはそこはかたなく嫌だったので、愛想笑いを浮かべる。

「そう？ 適当にやってるから、案外近くで見ると綺麗じゃないよ」

「適当に、って……。」

リフェウルさ、今日が何の日か分かってる？」

「記念日と調印式」

「普通さ、念入りに作業しない？ 中には相当偉い人が来るんだし、それに今年はある有名な『英雄』がくるんだよ？ 細かい作業でもキッチリこなさなきゃっ！」

サリナはそのまま、その英雄とやらの武勇伝語りに夢中になってしまい、そしてとうとう全く関係無い自分語り、将来は玉の輿になってアクデイに移民するんだと将来設計を一人掲げていた辺りで、リフェウルは彼女の話を遮った。

「ねえ、あれって……。」

「なにさりフェウル……今から私が有意義な時間を貴方に与えようとしてたのに……。」

話の腰を折られて多少不機嫌だったが、サリナは律儀にリフェウルの指差す方を伺った。

二人の視線の先には、数人の男と、ロングコートの青年。

（あれって、昨日のカイフィールドって言う人よね……）

「ねえ、なんであの人いんの？　どういう関係者？」

「あ、貴方ねえ！」

魔術師の中でも特に有名な英雄がいて、それはもう凄くて、カッコ良くて！

でねでね！

「サリナはリフェウルの疑問そっちのけで、再び英雄がどうとか一人語り始めてしまう。リフェウルはもう当てにならないなと右耳から入る情報を左に垂れ流す。視線は、ロングコート青年に釘付けだ。」

（なんか面白そう。）

「……お、なんか資料室の奥に進んでくし、なんかありそうね……」
リフェウルはカイフィールドの、待ってましたといわんばかりのスピードで追跡を開始した。

残されたのは、サリナ一人。ようやく話が終点に近付いたのか、それともリフェウルが何も言わなかったことを不思議に思ったのか、気付いた時には、リフェウルの姿は見当たらない。

「あれえ。折角人が、英雄　カイフィールド・ランスについて語ってあげたのに。どこいつちゃったのかしら？」

第四話 密談（後書き）

魔術の種類についての説明におかしな点がありましたら、申し訳ございません。

読んでくださった方々、どうもありがとうございました。

第五話 英雄

エリアは春の日差しに心地の良さを覚えながら、アルフィンー大イベントである記念日と調印式の会場のセッティングに勤しんでいた。

学生が用意するのは伝統みたいなもので、それに対しては彼も文句は言わない。

ただ、こんなに慌てるのなら余裕を持って準備期間を用意しておけば良いのに、と不満は募らせておく。

これに関しては、事前に決めていた会場が急遽使えなくなり仕方なく学校の校庭になったという割とちゃんとした理由があるのだが、彼が、他の生徒が、それを知る由も無い。

エリアも他の生徒も、ただ決まって愚痴をこぼしながら作業を続けるだけだった。

「ささ、こちらへ。」

本日はわざわざ、英雄と呼ばれる貴方様が来たと町の皆が知れば、さぞかし喜ぶことでしょう」

「そんな言い方はよしてください。ボクはただの魔術師ですよ」

謙遜するカイフィールドに、それでも態度を変えない、アルフィン魔術学校の学長。二人は先程までいた資料館を抜け、校舎にある学長室に足を運んでいた。

偶然通りかかった校医にお茶を出すように催促すると、学長グラムス・リマ・カーネルはカイフィールドに向き直った。

そんな、立場の違いが如実に分かる風景を、一人の少女が盗み見していた。

リフェウル・ハウは、校医が学長室から出て廊下を進んでいったのを見届けると、学長室の扉に耳をくつつける。特に防音処置をされているわけでもなく、意外にも中の音はクリアに聞こえた。

カイフィルドもグラムスも全く気付かず、淡々と会話は進んでいく。

「今回の調印式ですが……その、私の身の安全については……」

「その事でしたらご安心下さい。」

町長や中立連合の著名な人間は勿論、貴方のような魔法学校の学長は、全員我々アクデイが保護します。それは、以前送らせてもらった書類に記述されているはずですよ。

アクデイはあなた方の国　　亜人である魔力視^{サイ}や魔人^{メル}を欲しているのです」

カイフィルドは、その容姿の爽やかさからは連想されない、抑揚の無い冷たい声音で返す。

「それならお任せ下さい。既に容易は出来ているようですので」

グラムスは怯えたような、うつすらと気味の悪い笑みを浮かべて、どうにかカイフィルドの機嫌を損なわないよう努力していた。

（うちの学長がそこまで下手に回るって、どどういう人間なの、アイツ……）

リフェウルは盗聴しながら、そんなことを考える。幸い、準備時間だったので今のところ廊下を通りかかる人はいなかった。

グラムスは生徒に好かれているわけでもなく、むしろその逆。無駄にプライドが高く、頑固親父、というのがリフェウルの抱く印象である。そんな男があんな態度。彼女の好奇心は一気に高まっていた。

彼女は耳に意識を集中させ、壁に耳を押し付ける。

「それにしても、何故わざわざここへ？　調印式どころか、記念日すらまだ時間がありますよ。午後からの予定のはずでしたが……」

「少しこちらにも事情がありますよ。少々お邪魔させてもらったのですよ」

「用事……とは？」

カイフィルドは妙に深く息を吸うと、スツとグラムスの顔を見据えた。リフェウルにも雰囲気が伝わったのか、思わず息を呑んでしまふ。

「今回の芝居　もとい茶番は、止めにしませんか？」

「は？」（は？）

二人の発した（正確には、発したと、思った、だが）言葉の意味は、ニュアンスが違った。

（茶番？　何のことよ。なんか企んでんのは分かったけど、それと調印式にどういう関係が……）

唐突に部屋の中で、バンツと威圧的に物を叩く音が広がった。グラムスが憤慨した様子でカイフィルドに詰め寄ったのである。

「どういうことですかっ！　貴方は我々の身の安全を守ってくれるのではっ？　これでは約束が違いますせんか！」

「約束は守ります。ただ、アクデイの保護対象に重要人以外の民間人も含ませて欲しいのです。

ボクは上の判断に未だ納得できかねません。

この町を焼き払うなんて、ボクはしたくないんです。出来ることなら、こんな芝居じみたことをせずにアクデイと中立連合の関係を築きたいんです」

「っ！？……」

この狼狽は、リフェウルのものだ。瞬時に手で口元を押さええていなかったら、驚愕の声を上げていただろう。彼女は、自分でもそれが出来たのが不思議なくらい驚いていた。

引き続き盗聴に専念するが、何故か部屋の中は静まり返っている。「そ、それはアクデイの方の許可を得ているのですか？」

「いえ。今朝連絡をしましたが、断られました」

「な、なら無理です！」

貴方は何も分かっていないんだ！　今この町は　アルフィンの町は中立連合の間で最も使えないと切り捨てられそうなのです！

町長は勿論、学長である私だつて大変なことになる！

だが、アクデイとの関係を築けば、我々だけは国に置いてくれると約束してくれた！ それを貴方はっ！

確実性だけを求めてください！ 問題を起こしたくないのです。

もし予定通りに事が進まず、今回の調印式が両国の国民の意思を動かすものにならなければ、我々は切り捨てられるのです！」

「そのために町の人間が焼かれても知らない、グラムスさんはそう仰られるのですね」

「ぐっ！

……そうだ！ 私はまだ終わりたくない！ お願いですから……お願いですから予定通りにやってください！ カイフィルド・ランス様！」

グラムスは、プライドなど知ったことかと言わんばかりに頭を下げた。地面に膝を付き、土下座をしたのだ。

リフェウルはその場を目撃したわけではないが、既に空気に呑まれていた。

否、それよりも別の言葉が、彼女の頭を埋め尽くしていたのだった。

（町が……無くなるの？ それに、今聞いたことが本当なら……。

恐らくアタシたち、殺される）

足が、震えた。

鼓動が早くなり、血液が通常の何倍もの速さで駆けてゆくのが自分でも分かる。空気は吸っても吸っても満たされず、息苦しい。リフェウルは、軽いパニック状態に陥っていた。

とにかく、ここから離れないと。万が一見つかったら……。

その時、カイフィルドが席を立った。

「分かりました。変なことを言つてすみません、計画は予定通り実行します。どうか、ご安心下さい」

「そ、そうですか……。

どうです？ ゆっくりしていかれては。まだ部屋について五分も経っていません。すぐにお茶も来ますし……。」

「いえ、折角ですが遠慮しておきます。

では」

グラムスは途中まで着いていくと言ったが、カイフィールドがそれを頑なに拒んだため渋々引き下がる。

彼はそのまま、扉のノブに手をかける。

リフェウルはそこまできて、初めて自身に迫る危機を自覚した。手に入れた情報があまりに想定外だったので、今の今まで頭が真っ白だったのだ。

慌てて扉から離れようと、もう間に合わない。学長室の近くに部屋は無いし、隠れられる場所も無い。

万事休す。リフェウルは恐怖が募り募ってやや逃避気味に目を瞑る。

(リフェウル・ハウだね。ついて来て)

「え　んぐつ!？」

想定外の出来事の想定外の結末に声が漏れる寸前で、カイフィールドはリフェウルの口を塞ぐ。

そのまま、彼女の手首を乱暴に引っ張ると、カイフィールドは無言で歩き出した。

この地方は湿気が少なく温暖、吹く春風は周りの野花の香りを包み町中に運ぶという役割を担っていた。

そんな、陽気な雰囲気似合うアルフィンの町の中、魔法学校の裏庭では、圧縮した空気のような雰囲気形成されていた。リフェウルは、今にも押しつぶされてしまいそうな緊張感の中にいる。

「話は、聞いていたんだよね？」

「……………」

問いかける魔法師に、少女は口を開こうとはしない。

「この事は、できる限り黙っておいて欲しい」

「……………」

「リフェウル・ハウ、お願いだからボクの話聞いてくれ」

「………… エリイだけでも、ダメなの…………？」

「え？」

草木が生い茂る、静寂に包まれた裏庭に、カイフィルドの戸惑いの声が響いた。

「エリイだけでも………… エリア・フィーリンツだけでも助けられないの？」

「………… 残念だけど、それは出来ない。今、一人でもこの町を出れば不信がられるんだ。だから、それはできない」

「なんでよ!? アンタ英雄とか呼ばれてんでしょ、それぐらいなんで出来ないのよ!?!」

「………… ごめん。これは、完全にボクの力不足だ。」

でも必ず、そんなことにならせやしないから。リフェウル・ハウ、ボクを信じてくれ。必ず守ってみせる。ボクはそのために来たんだ。………… だから頼む。ボクを信じて、混乱が起きないように黙っていてくれ」

カイフィルドは懇願し、リフェウルの両の肩をつかんでその双眸を見詰めた。祈るように瞑った目は、彼女に頼りないといわれても仕方の無いものだと、自分でも分かった。

彼が言葉を発してから数分か、数十秒か、そもそも数秒しか経っていないのか。ギョツと瞑った目は相変わらず、しかし、リフェウルの表情には確かな変化があった。

「い………… や。」

嫌よ! 信じられない! アンタは勝手にやって! アタシは………… アタシは、一人でアイツを守る! だからアンタは関わらないで!」

その表情は、確かな拒絶の証だった。

信じない。自分が信じる者に値しない。刷り込まれたように完璧な他者の拒絶は、リフェウル・ハウの心の奥深くに根差していた。

信じる者は、あれで十分だ。もう必要ない。他者は、怖い。それがアタシの考えなんだ。

リフェウルはいつの間にかカイフィールドの手から抜け出すと、廊下を駆けていった。

駆け行く先は、唯一つ。

(町から離れているあの家なら……！)

少女は、校庭で未だ尚作業を続ける少年のもとへと進む。

第五話 英雄（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第六話 誰が為の祝砲

十二時半から果たして、著名な人間のスピーチが始まっていた。大体は記念日に沿った、例えば中立連合を作り上げた一人の偉人の言葉と教訓や、なんの捻りも無く祝いの言葉など、様々な言葉が送られる。

そしてそんな言葉が会場に響き終わると、一時丁度、毎年恒例記念日の始まりとされる祝砲が上がるのだ。

祝砲とは普通、空砲を使うことが多いが、アルフィンで行われる記念日には特注の花火を使っていた。自然型の生徒の見せ所。空中に火柱を発生させ、それをさらに氷付けにするという幻想的な魔術による芸術を見せてくれるのも、人が集まる一因である。

生徒達の席は生憎用意されていないので、エリアは適当な日陰を見つけるとそこに座り、遠くに設置されている拡声器から響く演説に耳を傾けていた。ちなみに他の生徒は、魔術練習用の個室に同じく設置されている拡声器を使っている。魔術師が科学技術を忌み嫌う事無く使うのは、中立連合国ぐらいだろう。

隙あらば眠らそうと企むそよ風にエリアは心地の良さを見出し、そのすぐ後には、フツと意識が遠のくような感覚を彼の体は覚えた。記憶があつたのは、そこまでだ。

“お母さん、お父さん。また仕事？”

“ああ、ちよつとな。今度は、しばらく帰ってこれないかもしれないんだ。仕事先の人から禁止されているから、手紙も出せないかもしれない”

白銀色の髪ホワイトの少年の頭を、ニッコリと微笑む男は撫でた。

“お母さんも行くの？”

次に少年は、彼のすぐ側で柔らかな微笑を浮かべる女性に顔を向けた。風に流される艶やかな白銀色の髪。少年の髪の色が、彼女から受け継がれたものだとすぐに分かる。

“ええ。でも安心して、仕事が終わったら、すぐに戻ってくるからお土産も買ってくるわ”

“じゃあ、お父さん達、行ってくるな。ユノおばさんに頼んであるから、迷惑掛けないようにな”

“リフェウルちゃんとも仲良くするのよ?”

“……………うん”

家を出る声に応じたのは、少年のか細い声。消え入りそうで、悲しい、そんな声音だった。

“うっ……………ひっく……………ぐす、うっ……………”

少年の瞳から、雫が零れた。涙を塞ぎ止めていた理性が、感情に負ける。

嗚咽を漏らして、けれどもそれを二人に見られるのはどうしても嫌だったから。彼は二人に、笑って行って欲しかったから。溢れ出す液体を押さえつけようと、両の手で目を擦り続ける。

“もう、いいわよ”

見兼ねた訳ではない。呆れたわけでも、苛立ったわけでも、甘やかすつもりもない。彼女はただ、理解した。

“よく頑張ったわね。よく我慢しようとしたわ”

“ごめんなさい。……………ぼく、泣き虫で……………ごめんなさい”

“うっん、良いのよ。貴方は我慢しようとしたじゃない。いつもみたいに、すぐ泣かなかったわ。

泣き虫でも、我慢しようとした。それは立派な成長よ。　まあ、

泣かないのが一番良いのだけれどね”

“えへ……………”

少年は、泣き顔で女性に向かってはにかんだ。涙は止まらなかつたけど、それでも彼は、笑った。

“いい? 涙は別に、流しても良いの。ただ、流しても良い「種類」

があるわ。

貴方が今流したのは、冷たい涙。これは流しちゃ駄目。温かい涙を流しなさい。人のために、人を想って流せる涙を……。それは流しても、泣き虫じゃないから。

流せることが出来れば、それは強さだから”

“それでも泣いちゃった時は？”

“そういう時は、良いおまじないと言葉があるわ”

“おまじない？”

少年が復唱するよりも早く、女性は彼の手を握り自分の人差し指で何かの文字のようなものを一つ、小さな手の平の上に描く。ペンを使っていないので、当然目には見えない。だが、少年には確かな存在感を感じ取れていた。

“ ”

そして、続け様に女性の口から、言葉が紡がれる。

赤子が子守唄で寝入るように、彼もまた、安心しきったような表情を浮かべる。女性はその顔だけを見ると、満足したとでも言いたげな面持ちで自らの夫のもと 玄関の前で佇む男の側に戻った。

“じゃあ、行ってくるな”

“行ってらっしゃい！”

“じゃあね、エリア”

“うん、行ってらっしゃい、お母さん！”

そして二人の影は、夕陽が沈むと共に見えなくなった。

「……………ん？」

髪に掛かっていた若葉を払い、エリアはのっそりと体を起こした。いつの間に寝てしまったんだろう。

体の芯から温まる熱を発する日輪の位置は、寝る以前からさほど変わりは見えない。ほんの数分間目を瞑っていたようなものだった。

ただ、それにしても

「あれから十年ちよつとか……」

頭に残る鮮明な夢の跡を、エリアはなぞるようにして思い返していた。

母の教えてくれたおまじない。

それは、エリアの使う空間呼应魔術の魔術文章。

今も尚受け継がれる、文字の力。

「これが終わつたら、また練習しよつかな……！」

エリアは、誰かに話すわけでもなく、自分に言い聞かせるようにして小さな決意を固めた。すでに一時 十分前。もうすぐアクデイの英雄と呼ばれている人が来るらしい。自分も噂は聞いたことがあるが、名前までは知らない。歳だって、そもそも男の人か女の人かだつて知らない。

エリアは自らの知的欲求を満たすために、木陰を抜け、制服に付いた草を払いながら、燦々と輝く陽の下を駆けた。

会場は校庭。今自分が居る位置は校舎裏に近い、まず人が寄らないような陰湿な雰囲気が漂う場所だ。校舎の東側、資料館との間にあるちよつとした小道。木々を縫つて出た先に、一人の男性が立っていた。

煌く炎を髣髴させる双眸。どこか大人びた雰囲気に、しかし今は少年のような笑みは浮かべていない。ロングコートを羽織った青年
カイフィルド・ランスがそこにいた。

「カイフィルドさん？」

「？ ああ、君か」

あれ、さっきまでの何か悩んでいそうな雰囲気は……？

少年が訝しむよりも速く、青年は口を開く。

「君は会場に行かなくても良いのかい？ あと少してアクデイの英雄が来るんだらう？」

妙に自嘲じみた笑みを浮かべて、彼は問いかける。

「僕、校舎裏の木陰で少し寝ちゃって。急いで会場に向かつてたん

です」

「ん？ そうなんだ。」

「……悪かったね、わざわざ引き止めてしまつて」

「あ、い、いえ！ 全然、そんなことはありませんよ。十分間に合いますし。」

「じゃあ、僕もう行きますね」

「そういつてまた駆け出そうとしたとき、不意に自分の背中から声が掛かった。」

振り返るとそこには、とつさの事故にも毅然とした態度で対処した魔術師でもなく、大人びた雰囲気纏う人間でもなく、ただの子供の眼をした青年がいた。一瞬別の誰かと見間違ふほどカイフィルドの表情は頼りなく、あの爽やかな笑みは嘲笑に思える。

「……リフェウル・ハウと会つたかい？」

「え？ あ、いえ。今日は作業があつたから、リフェウルとは朝別れてそのままですよ」

「ああ、そうなんだ……道理でまだいるはずだ」

「？ カイフィルドさん？」

納得したような表情を浮かべた後になにやら言葉を発したようだが、生憎その肉声は偶然吹きつけた風に浚われ、エリアの耳には届かなかつた。

カイフィルドはなにやら逡巡した後、苦笑するとまた口を開く。

「ただ、今回のそれはやけに暗い面持ちだ。」

「君は、なんのためにこの学校に入ったの？」

「え？」

何の脈絡も無く出てきた質問と言う話題に、少年は如実に驚いて見せた。

「ボクは、成り行きで魔術師をやっている。自分からやりたいと思つたわけじゃないんだ。」

「そりゃあ学生の頃は、勉強や練習に打ち込んだりしたさ。でもそれは、『魔術師になりたい』っていう目標の元じゃなくて、ただ友

人がその道に進んだからボクもついていただけ。つまるところ、ボクは魔術師になりたかった訳じゃないのさ」

「そんなことないですよ。だって、カイフィルドさんの昨日の魔術、すごかったですもん！」

「あれは違うんだ……。あれは、借りものの力。ボクの本当の実力じゃあないんだ。だから、ボクは別に 凄くなんか無い。

ねえ。さっきも聞いたけど、君は何のために、何がたくて魔術を学ぶの？ 君にとって、魔術は何をするためのものなの？」

「え、えーっと……」

特に困った様子も見せず、少年は答えを模索する。この時点でカイフィルドに、エリアから自分が望む答えは帰ってこないなど、やや確信めいた思いを抱かせていた。尤も、現在に至るまで様々な人間に問いかけてきた質問であり、そして自身が納得のいく回答が帰ってこなかった質問でもある。一介の魔術学校の生徒、しかも十六歳の少年がそれを知っているはずもない。

そう。ある意味では、高を括っていた。

だからこそ、少年の言葉は深く突き刺さる。

「僕、親が残してくれた独創型オリジナル以外の魔術文章を殆ど扱えないんです。元々の体質的な問題もあってか、魔力だって普通の人みたいに作れなくて、どこかきこちない感じになっちゃうんです。だから、いつつも失敗ばかり……」

「じゃあ、尚更のこと、何で君は……？」

「だって、素適じゃないですか」

「魔術が……素適？」

理解できないとでも言いたげな表情の青年に、少年は思ったことをそのまま吐露した。

「少なくとも、今まで僕が見た限り、魔術マジックの周りには笑顔がありませんでしたから。リフェウルが自分の魔術文章で爆発オリジナルを起こしても周りの人は皆笑っています。

昔、父さんと母さんが言っていました。魔術の文字は二十四あって、

どれも意味は違うけれど。一つだけ、共通していることがあるって。言葉の中には、必ず笑顔が生れるって。

だから僕は、魔術がうまく使えない体でも、それをやってみたくんです。自分の言葉で、笑顔を作ってみたくんです」

「……………」

「……………えーっと、あのー……………」

「ご、ごめんなさい！ 僕、一人で変なこと喋っちゃって！……………あの、僕、もう行きますね。本当に、ごめんなさい！」

「……………待って」

不味い事でも言ってしまったのだらうかと、ビクビクしながら慌てて駆けて行くエリアに、カイフィルドは穏やかな声音でそれを制止させる。

「話を聞いてくれて、ありがとう。しばらく悩んでいたから、とても助かるよ」

「あ、いえ、そんな……………」

「これでボクのやるべきことが決まった。やっぱり君達は、死なせちゃ駄目だ」

「え？」

死ぬって、どういうこと？

理解が追いつかない言葉に、エリアはその顔に戸惑いを顕にした。「さあ、ボクと一緒に来て。リフェウル・ハウを探そう。すぐここから離れるんだ」

「え！？ でも、もうすぐスピーチがつ！」

「そのスピーチをする人間がいなければ始まらないだろ？」

あっちは、一応正式な魔術師もいるだらうから、やっぱりボクはこっち」

「え？ あの、それってどういう……………」

いよいよ混乱してきた彼の脳に、トドメの一発がはいる。

「ボク、カイフィルド・ランスは アクデイを収める姫直属の兵。その最年少兵士で、今回の記念日の主役である英雄と呼ばれている

人間だよ」

我が耳を疑う告白。

刹那。

会場まで百メートル以上離れているここからでも聞こえる、来賓者の声。スピーカーに微細に含まれる雑音^{ノイズ}。そよ風に葉が擦れあう音。小鳥たちの戯れ。それに混じって、一つの音。

そして記念日の祝砲が、打ち上げられる。

少年はそれを、平和と祝福の始まりの鐘と解して、

青年はそれを、戦争と混沌の始まりの合図と解す。

「アス、あとは君に頼んだよ……！」

第六話 誰が為の祝砲（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第七話 炎翼×少女

空に炎の柱が舞い、陽炎が踊る。

炎の妖精たちはその姿を眩ます前に、自然型魔術 水の文字が凍りの息吹を吹きかけた。

さながらそれは、絶対零度のよう。だがしかし、それは満点のようで零点。

魔術文章とは、言語魔力を人体へ注ぎ込むと同時に、大まかな魔術内容を構成するという役目がある。何をいまさらと言う話だが、案外これを軽視する人間が多いのもまた事実なのだ。

体内を経由して体外へ、再び魔術文章内に注ぎ込まれた本物の魔力は、魔術文章によってその存在の内容を変換される。

例えば、魔術文章が火を起こすものなら、魔術文章に注ぎ込まれた魔力は魔術文章^{それ}によって魔力と言うエネルギーから別のエネルギーへ 熱を撒き散らすエネルギーへと改変され、形態も火のそれに合わせられる。それが、あたかも火を生成しているように見えるのだ。

祝砲は、今のように作られた炎を空に打ち上げ円柱状に。それを、特殊な魔術文章で出す沸点を低くした水による氷雪系魔術文章で凍らせたものだ。

そんな風に作られた氷柱は、少々表面が粗い。それもそのはず、轟々と燃えていた火柱がそのまま彫刻のようになったのだ。だがしかし、その表面はアウェイルブでも滅多に見られない生物である竜の体表に類似しており、竜鱗の彫刻と言ったところだろうか。

そんな氷の風景に、来賓者たちが感嘆の声を漏らしている頃、記念日の会場であるここ、魔術学校の生徒であるリフェウル・ハウは人の合間を縫うようにして進んでいた。

そして、そんな彼女の上に、影が一つ。

『アイマン様、今回の作戦はあくまで無差別なのですね？』

通信機越しに、確認の問い。

『ああ、それで構わん。少々わざとらしくやってもかまわんぞ』

品の欠片もない笑いを含み、実質アクデイの政権を握っている男でありカイフィールドの唯一の上司であるアイマンは、そう部下に告げた。

『ランス様のことはよろしいのでしょうか？』

『……貴様には関係ない。とっとと殺して、とっとと殺やられる』

『……はっ』

今回の作戦　と称するほど計画性のある物では全く無いが。事実、この人間も、この上司の浅はかさには辟易している　に選ばれたのは、アクデイでも選りすぐりの兵士達だ。

魔技師が開発しつつ先日運用開始されたばかりの魔術武装　正しくは科学技術七割、魔術三割だが　Dinn　デインと名づけられた、甲冑型の兵器である。鋭角なフォルムが目立ち、シルバのボディは日光を拒絶する。脚部には科学技術の塊である銃器装備が、両腕の内装には魔術文字が記されており、それによる攻撃も可能。頭部には、重火器、魔術、魔力の使用を感知するセンサー付の、完璧なる軍事目的の甲冑型機械だった。

唯一つ、この兵器に適合する人間が中に乗らなければならないという問題を除けば優秀な兵器だろう。

この甲冑の動力源は完成版魔力であり、魔術文字から放出されている言語魔力では使い物にならない。そこで、生命エネルギーを宿す人間が操縦しなければいけなかった。もとは人工知能　といっても眼前のもの全てを壊す簡単で単純なものだが　による完全機械化を前提に開発されたものだが、急ピッチで仕上げられたのでアイマンも文句は言わない。

甲冑は　甲冑の中の人間は、常に生命エネルギーを供給しながら、さらに魔力を甲冑へ回し、移動型魔術の停止により空中に佇立していた。彼の体は今、全ての力から解放たれているような状況だ。ただそこに固定するという魔術の内容に、魔力たちは自身の存

在を変えてそれを具現化する。

『標的確認……女性・子供・危険度0 駆逐する』

甲冑の中の人間の双眸が、金髪の少女を捉えた。移動型魔術を、「停止」から「加速」へ変更。腕の内装に描かれた二十四の魔術文字が発光。それらのうち、コンピューターが公式文章内に記録されている既存の魔術文章を検索し、必要な魔術文字を選べると、やがて選ばれた文字だけが発光を続けた。

公式文章七十四番。発動します

機械的音声が中の人間の耳に入ったときにはもう、体は百八十度傾いていた。足があつた方向に頭が、頭があつた方向に足が。つまるところ、体が逆さまになっていたのだ。叩き落されたかのような唐突な加速に、しかし甲冑の中の人間は狼狽することも無く左脚部から両刃のコンバットナイフを取り出す。そして同時、地面に拳をたたきつけるが如くの体勢で、甲冑は大地に降り立った。フシューっと、余剰稼働による熱を放出する音が広がった。

(なによ……あれ……!?)

困惑を通り越して狼狽。狼狽を通り越して、最早どうという言葉を使えば良いのかが分からない心境。唯一つ、自分の心臓が、その状況の異常さに警笛を鳴らしていた。

白銀の鎧？ 足には科学技術銃器で腕部には魔術？ なによこれ……!?

うるたえる彼女に、正体不明の甲冑は歩を進める。彼女にとってこの甲冑は正体不明、突如として現れた自身の身の危険を脅かす存在である。今すぐにでもここから走り逃れたかったが、どうにも腰が抜けてしまって動けない。リフェウルはただ、「嫌、止めて」と連呼するしかなかった。

カチャツと、輝く白い腕部が足元へ向かう。その手は、脚部裏側、

人間で言う脛脛部分に装着されていた散弾銃^{ショットガン}。先の戦争に使われていたものを更に改良し魔術で補強したものだ。を掴んだ。中には既に、弾は装填されている。リロードも必要ない。標的^{ポイント}を定めて、あとは引き金を引くだけ。

カチャツ、と引き金に指を当てる音。

が、その銃口の先にリフェウル・ハウはいなかった。彼女と同じ色の髪で、長さはこちらよりも短い。この辺で見たことが無いから、恐らく観光客だろう。凶器の先に、一人の少女が立っていた。

嘘っ！ あの子を狙ってるの！？

甲冑は、狙いを定める。この重装備は何よりも衝撃に強く、腕部は小規模の爆発ごときならビクともしない設計だ。散弾銃の発砲時ぐらいの衝撃なら、片手撃ちも可能だった。

が、それでも尚、確実に狙いを定めた。場所^{ポイント}は頭^{ヘッド}。恐怖を与える為ではなく、痛みを覚えずに眠らせる為。

聖者^{死神}が、小さな灯を掻き消そうと引き金を引く時。その時、聖者に断罪の言葉が放たれた。

《 》

でたらめな文字列。それは、世界に、神に認められず、言葉にならない。ただそこに在るのは、魔力の渦。力だけ。

リク라마現象。魔術文章を作るのは簡単なことではない。失敗すると、何故か書き記した文字が消えてしまう。文章がちゃんとしていなければ、言葉にもならない。そして、魔術文章に宿る事無く放出した。魔力は一点に集中し、異常な速さで膨張を始める。爆発が、起きるのだ。

「止めるって……言ってるでしょ。人を無視してんじゃないわよ……！」

熱も蒸気も、粉塵も必要としない。力だけあれば十分相手を吹き飛ばすだけのエネルギーを得られる現象。

いつもは失敗ばかりでウザったいだけだけど、今だけは感謝してくか……。

「逃げるわよ！」

恐怖の感情が垣間見える、汗の滲んだ幼い手を握り、彼女は銃口に背を向けた。庇おうと思っただけで、体が無意識にその場から逃れようと、運悪く銃口に背を向ける形になってしまったのだ。

その瞬間、リフェウルの世界が狂った。巨大なホールの中みたく、少女の声が反響したかのように鼓膜で鳴る。地に落ちた空の葉の音が、弾の装填を意味する音が、引き金に触れる微細な音が、自分の中の鐘を高速で鳴り響かせてゆくのが分かる。

ああ、こんなところでアタシは終わるのか

日輪が昇る空を仰ぐ事も無く、恐怖に眼を瞑る事無く、頭では理解しているが体が逃れようと抗う中で。リフェウル・ハウはただ、やがて背中に突き刺さるだろう弾丸の破片を待つだけだった。

パアアアンツ！

いつまでも耳にまとわり付く、延びた轟音。

空気を裂いて、散弾は前方の空間に対して牙を向く。衝撃で芝生の大地は捲られ、土が晒されている。彼女の背中もまた、地面のような結末を迎えようと、背部に向かって弾丸が走り、そして、キンツと高い音を立てた。

血肉が飛び散る訳でもなく、断末魔の叫び声が聞こえる訳でもない。ただ単純に、物質と物質が弾け合う音がしたのだ。

『可愛い女の子二人を虐めるなんて、随分と良い趣味してますね』
そして、聴覚の次は視覚からの情報が。そのあまりの光景に、状況処理が追いつかない自分の脳がその活動をやや不貞腐れ気味に放棄した。

最初に眼が捉えたのは、紅く、鈍く、光沢を放つ全身重装備並みの硬度を持つていそうな鱗。そんな鱗に表面を覆われた翼の翼膜は、仄かな明かりを燈したように淡い赤だ。宝石を原石のまま嵌め込んだような眼球はルビーそのもの。それに加えて、眼前の生物の正体はこの大陸でもかなり珍しい竜なのだ。風貌が影響してか唐突が招

き起こしたのか、金髪無愛想な二人の少女達は黙り込んでいる。

『向こうが心配だから早く。』

それと、ずっと背中に乗せて行くと、流石にそっちの子が可哀想だから、途中で貴方達の好きな場所に降ろしてあげます。』

吐く吐息が、塵気楼のようにその空間を揺らめかせる。

「え、ちよ、何!? 何なの、あなた!? 何でこんな場所に竜が!? 大体、何でアタシ達を助けたりなんか……」

『何、何、何って……。とりあえず、落ち着いてください。別に、とって食おうなんて気じゃありませんから。』

それに、竜だからって、そんなあからさまに拒絶されると、少しへこみます。』

竜は、上に大きく「ずん」と書きたくなるような挙動で、少々オーバーな感情表現。あからさまなのはどっちよとは、リフェウルの心のツツコミだ。

そんな、言動が全く威圧的でも何でも無い、妙に人間っぽい、声で判断した恐らくは雌の竜。

パンツ！ パンツ！

唐突に、先の銃声とは違う乾いた音が、竜の体越しに　ここでようやく、自分と甲冑の間に、盾になるように竜がいるのだと理解した　聞こえた。

ぐるっと首を回し、その眼は甲冑へ向けられる。一瞬だけだが、それでも向けられたくない類の視線を相手に向けていたのを、彼女は見逃さなかった。

この竜は、信じていいのだろうか

再び、自分の中に疑いの感情が生れ始める。

『私の体は絶対に傷付きませんよ。私の機嫌を損なわぬ内に逃げた方が得策かと』

余裕綽々の態度で、飛んでくる弾丸を翼で薙ぎ払う竜。その隣で、訝しむ気持ちを塞き止めることができない自分。そして、その彼女の手を痛くなるほど握り締めて目の前に恐怖に耐える少女。

ふと、何かの拍子にリフェウルは、自分によく似た名も知らない少女の顔を一瞥してしまう。

誰かが意図しての事なのか、少女と目が合った。

「……っ！」

アタシは、自分の事情で、この子を危険に晒すのだろうか。こんなに小さい女の子を。あれほど無表情だった顔を恐怖に歪ませているこの子を。アタシは……アタシは……っ！

罪悪感と称していいほど、高尚なものではない。ただ、こんな小さな葛藤でも、リフェウルは迷うだけの原因があった。

そして、二人の少女の間に似通ったところがあるというのもまた、いけなかった。

この女の子の態度が、雰囲気、幼い頃の自分を髣髴させてしまう。彼女の記憶の中で、一番暗く、深く、恐ろしく、醜く、浅ましく、愚かしい頃の自分。眼前の小さな女の子は、その一歩手前。道を完全に違えるか、それとも、抗うことで別の道を探すか。一種の停滞期に、この子は来ていた。善にも悪にもなれる、二択の前に立たされている。

（分かっているけど。こういう時に望むものなんて、分かっているけど……！）

……けど、だけどアタシはっ！）

面倒なやつだな

「えっ!？」

不意に聞こえた、やや乱暴な口調の声。戸惑いを表すと、一匹と一人は不思議なものでも見るような目を向けた。

『貴方達、早く乗ってください。そっち側からじゃ見れないと思いますけど、相手、魔術を使うつもりです。いくら私の体でも、痛いんですから』

「どう……するの?」

「いや、それよりもこの声が」

聞こえてねえよ。話が進まねえから、もうこれ以上訊くんじ

やねえ。

おい、クソガキ。テメエいい加減にしるよ。ったく、こついうタイプが一番ムカツク。気付いてんのに受け入れようとしないう奴は、クソだ

お前は馬鹿なんだよ。んのクセにうじうじ考えやがって。そんなことやってつからいつまで経っても記録係きろくがかりなんていう立場に甘んじることになるんだよ

アンタ、それどこで知ったの！？ アンタは一体何者なの！ アタシにとってアンタは何者なのよ！

ああん？ お前にとってオレが？ 違うな。

逆なんだよ。オレにとって、お前は何者かであるんだから、それは何なのよ！

問題に正解したら、教えてやるよ

プツンと、今まで、微弱で脆い、しかし確かな繋がりがあるように思えた感覚が、途切れた。

「ねえ、いこ」

自分の手を、幼い手が導く。持っていていかれた片方の手は、温かい、炎のような命の手触りを覚えた。段々と、意識が内側から外側へ向いてくる。音も匂いも、クリアに伝わって、今まで自分がどれだけ集中していたのかと少し驚く。

『不味いです！ かなり大きめの魔術ですよ！』

「気付いてんのに受け入れようとしないう奴は、クソだ」

（うるさいわね……）

“問題に正解したら、教えてやるよ”

（それに、生意気……）

まず少女を竜の翼の付け根辺りにしがみ付かせ、更に上へ登らせる。少女が首の辺りへ腕を回したところで自分もよじ登り、まだ完全に登り切ってはいないものこのこから飛び立つよう声を掛けた。

甲冑が魔術文章に魔力を注ぎ込んでいたのを、偶然、視界が捉えたのだ。

瞬間。

純然たる筋肉の力だけで、校舎三階辺りまで飛んでいた。甲冑の魔術は当然のようにはずれ、それどころか跳躍時のあまりの勢いに吹き飛ばされ、頭でも強打したのか、すっかりのびてしまっていた。そんな、やっと過ぎ去った恐怖に安堵の表情を浮かべながらも、やや気だるそうに彼女は口を開く。

「アタシ、リフェウル・ハウ。アナタ、名前は？」

『アスです。どんな呼び方でも構いませんよ、敬語は遠慮しておきたいですが』

「そう……。アス、アタシはとりあえず、少しの間だけアナタを信頼するわ」

『それが永遠になるよう、頑張ってみましょうか？』

「……好きにすれば」

なんか、本当に人を相手にしているみたい。不思議ね。

ふと、殺される瞬間の、あの緊張感を味わったせいか、強張った手足と心を落ち着かせるため、空の景色に目を向ける。

よく分かってんじゃねえか。よし、正解だ。ご褒美やるよ

なによ、偉そうに。アタシに何の用があるのよ。

オレにとってお前は、ただの候補なんだよ

「……………」

何なのよ、あの会話する気皆無な生意気ヤローは……………」

『?』『?』

リフェウル・ハウの苛立ちは、現状を一番理解しているはずのアスにも、彼女に似通ったところがある少女にも。

恐らく、誰一人として理解できるものはいないだろう。

第七話 炎翼×少女（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

更新が遅くてすみません。気長に待ってくださると助かります。

第八話 炎舞×少年

時刻は一時半。エリア・フィーリンツの身には、暴風雨のように次々と災い 人災なのだが、まだ彼は知らない が降りかかっていた。

そんな中を十六歳の少年が生き残っていたのは、カイフィルドが一流の魔術師であり、場慣れした青年であったためだ。集束し、変化した魔力エネルギーを両手に燈すその姿は、エリアには頼もしく見えた。

現在二人は、校庭の隅、西側の草木生い茂る雑草の茂みに身を隠していた。

この騒ぎは一体……。

自分自身、よく分かっていたいなかった。祝砲が上がったと思ったら、突然訳の分からない集団が現れて、その内の一人が僕達の前にも来て。でも、目の前のこの人が一撃で倒してしまった。

何かを知ろうと足掻くも、手にしている情報はあまりに拙く、真実へと迫る糸口にはとてもなりえないことを悟ると、諦めて頭の隅に追いやった。

「ねえ、君ともう一人いた女の子。リフェウル・ハウの身の安全の確かめたいんだけど、どこにいるか見当付く？」

「それはちよつと……。リフェウルも一応逃げてるとは思いますが……。多分、一人だとは思いますが。彼女、普段からあまり人を信用しない性質なんで、こういう非常時のときはもつと……。」

「そうか……。」

少し表情を曇らせた後、「分かった、じゃあ探しに行こう」と茂みから身を起こした。

余談だが、彼の手には魔術で作られた炎のようなエネルギー体が燈っている。触れても草木が燃えていないのは、それが魔力と言うエネルギーであり、炎そのものではないからだ。エリアの空間呼応

魔術にある点と点の道も、魔力と言うエネルギー体が生み出した空間の歪みのようなものであって。空間を作るといつても、空間そのものを1から作り出しているわけではない。もしそうなら、それを使っている彼は、今頃大陸中の有名人だ。

陰湿な空気が鬱陶しかつた茂みから出ると、太陽がこれでもかとジリジリ攻撃を仕掛けてくる。目を瞑っても、目蓋に焼きついた残光が、しばらくの間エリアを苦しめた。

「とりあえず注意だけしておくね。まず、あの甲冑が現れたら、君は真っ先にどこかの茂みに隠れること。近くに隠れるところが無かつたら、あまりお勧めはしないけれど建物の中へ。敵の攻撃で崩れる心配があるからね。それと、もしも本当に、周りに何も無かつたら、君はとにかくボクの周りから離れるといい、後は僕に任せてくれれば良いから。むしろ魔術師同士の戦闘に巻き込まれる方が危ないからね」

「わ、分かりました。」

えーっと。あの、カイフィールドさん。一つ、聞いても構わないですか？

「ん？ 何だい？」

「あの、銃器や魔術で攻撃してきた甲冑って一体
グシャツツ！！」

「っ！？」

脊髄反射でエリアは振り向き、カイフィールドにいたっては流石ブクの魔術師、既に防御の姿勢 肉体そのもので防御するのではなく、拳に燈した炎もどきを広範囲に展開させている を取っていた。

「なっ！？」

それが功を奏したのか、何かがひしゃげたような音とほぼ同時に発砲された銃弾は、彼の拳に燈った炎により、標的に命中する前にその役目を終えた。残ったのは、未だ煌々と燃える、高速で飛来した弾丸を一瞬でただのゴミに変えた炎、もとい文章によって内容を

書き換えられた魔力だった。どうやらこの炎、術者が途中で介入することが出来る第三世代の魔術構造みたいだ、そうエリアは勝手に結論付ける。

スヘルエディション

第三世代　魔術は強力だが、決定的な短所が一つだけある。いちいち魔術文章を読まなければそもそも魔力を作れないという“時間”の問題。魔術は最初から現在の状態で生れた訳ではなく、日々の研究と実験の成果により強化され、三つの世代に分かれている。第三世代は一番新しい世代の魔術で。例えば石の上に飛ばす魔術を使ったとして、それを今度は左右に動かしたいとしよう。第三世代は、追加詠唱ついかえいしやうと呼ばれる技術で別の魔力が働いている物に同じく魔力で干渉し、動きを『たとえ最初の魔術内容が完遂されていなくても変換する』ことが出来るのだ。

閑話休題。

カイフィールドは追加詠唱で、今まで熱などを帯びていなかった手中のエネルギーに命令を下し、改変され本物の炎になったものでワールドを作っていた。弾丸は、溶けている。余談だが、今まで彼の手に燈っていた魔術の文章内容は、“留まる”だ。

「君、早く！」

「え、あ　はは、はい！」

思い出したように　あるいはちよつとした気絶から目を覚ましたように？　ハツとすると、自分でも「こんなに早く走れるんだ」と、驚くほどの脚力で彼は駆けていった。茂みの方には甲冑がいるので、しょうがない校舎のほうだ。

いつもと違って随分と重く感じられた、校舎に入るため存在する多数の扉の一つを開けると、すかさずその闇の中に身を置いた。

扉を閉める直前、目に入ったのは、鋭角なフォルムをした影と一人の影が交差した瞬間だった。

無事中に入ったか。

「まったく、一体全体、何人居るんだか……」

駄上司、アホ上司の用意した奇襲部隊の人数は相当のものだ。あの少年と行動を共にしてから三十分で、もう五回ほど甲冑と遭遇している。小さい疲労も、積み重なれば馬鹿にはならない。

「それにしても……」

この騒動が始まってまだ五回しか敵と遭遇していない。

(これはどう考えてもおかしいぞ)

突きつけられた銃口の上下部分を拳の炎で溶接し、フルオートで発砲された突撃銃の弾丸は銃身の中を傷つけ、ただの金属の塊に。

次に、自分に魔術を当てようと突き出した右手は空を切り、その先にあった樹木の幹を消し飛ばす。カイフィルドはすぐに体勢を整えると、右の拳に力を込め甲冑の腹部に突き刺した。

《轉りを聞かせる》

刹那、先の弾道のような、小さくも鋭い炎の軌道が甲冑を襲った。直径二十センチの穴を開ける、ドリルの直撃にも平気で耐えられる構造の重装備。だが炎は決るようにその表面を削ぎ落とし、嘲るように無に帰した。そうして出来た僅かな弱所に、カイフィルドはすかさず炎が纏った左の拳を放つ。

『ああああッああッ！?』

断末魔の叫び声上がり、そしてその音源はガクンと膝を付く。あまりの激痛に、意識が途切れた。辺りには、肉が焦げたような、異質な臭いが漂う。ただ、それすらも燃やし尽くすかのように、彼の手の手では煌々とした炎　存在を改変した魔力の塊　が辺り一面火の粉を撒き散らしていた。

殺した訳ではない。ただ痛みに耐え切れず気絶してしまった甲冑から左手を離すと、銀色の金属に包まれた人間は重力に従って地面に倒れこんだ。

(エリア君とは、はぐれた。リフェウル・ハウの居場所は分からない。アスとはこの騒動のせいでもともに連絡が取れない。　かな

り不味いぞ……)

この騒動の首謀者であるアイマンは、頭がキレる人間なわけでは決して無い。家柄と、コネと、権力と、金で今の地位に付いた男だ。普通の知識ならまだしも、こと戦術や策略などの“知識”となると彼はカイフィルドよりも劣る。そんな人間が、こんな思い付きのためにこんな作戦を用意してくることがおかしかった。

アイマンは馬鹿だ。まずこんな作戦を思いつくこと事態が馬鹿馬鹿しいし、こんな愚行に走るなんて流石世間知らずといったところか。

だが、だからこそ、自分が不利に感じるこの状況を作りだすことが、彼に出来るはずがなかった。

「大人数ではなく、あくまで一人ずつの襲撃。今の叫び声もそうだが、とつくにボクの所在は分かっているはず。だとすると」

ボクの知らない第三者が、アイマンに命令をしている。もしくは、全く別の目的がここにはある。

あの男が指揮を取っていたなら、まず間違いなく、ボクに何かされまいとこの甲冑を集団で送りつけてくるはず。数で押し切ろうとするのがありありと想像できた。

だが今回のは何だ。一人ずつがある程度の時間間隔で襲撃、大した反撃も見せず敗北。これではまるで、時間稼ぎをしているようにしか思えない。だとしたらやはり、謎の第三者が関わっている可能性が大だ。あいつが時間稼ぎをして何のメリットになる？ 低俗な発想しか出来ないはずのあいつに、強者を足止め^{自分}するための、一人当たりの時間配分と導入のタイミングと言う、極めて繊細なパワーバランスを保つ技能が、あの男のどこにある？

喧騒にまみれた式場、それと相反するように物静かなこの場所。カイフィルドの意識は、本人の気づかぬ内に、その心の最下層もつとも深い思考の渦の中に潜っていく。

だからこそ、なのだろうか。

《 》

「え？」

物静かな雰囲気をかもし出す木々たちが、言葉を飲み込んでしま
う。意識を思考の方に回していたカイフィルドは、全く気づかずに
背後を取られていた。

「くそっ!？」

殴りかかるように両の手を突き出し、まだ辛うじて残ってい
た先の魔術 炎を全力で、円状になるよう噴射させた。強力な推
進力となった炎は、彼の体を後方へ動かし、体を軋ませる。

豪雨のようなマシンピストルの攻撃が止んだかと思うと、魔術に
よる氷柱の攻撃が始まる。そしてそれも止むと

(た、対戦車ライフル!? 冗談じゃない! こんな薄い炎の盾で
防げる訳がないだろう!?)

黒い銃身に太陽光が当たる冷たい輝き。銃口が異様に突起してお
り、また全体の大きさも馬鹿げている。そこから撃ち出される弾丸
は、カイフィルドの脆弱な肉体をただの塊にしてしまうだろう。

追加詠唱 いや駄目だ。間に合わない。相手は引き金を引くだ
けでいいんだぞ。

そう逡巡していると、唐突に視界がぶれた。厳密に表すと、視界
に映っていた炎の壁が、ぶれていた。

しまった。

万が一魔術が暴走した時のために、魔術師は許容範囲キャパシティを設定する。
人を一人殺せば魔術停止などのように、魔術に制限を掛けることで、
それを防いでいる。

カイフィルドが追加詠唱で書き換えた魔術文章、その魔術の制限
は、『一定値以上の魔力を放出した場合、その時点で終了』だ。こ
れは無駄な魔力消費を抑えるためであり、彼自身このような事態に
なることを予測していなかったのか。この制限は、あまりに残酷だ。
見る見るうちに衰退の一途を辿る炎をよそに、彼の思考は一気に
切り替わる。

間に合えっ! そう祈ると同時、ポケットから一つのカード

を取り出す。そこには、魔術言語すべてが記されていた。

そして、叫ぶ。追加詠唱で使った文字たちは 名を呼ばれた子供のように反応 発光し、存在の改変が始まる。

間に合え、間に合え、間に合え！！

「おおおおツツ！」

魔術が完成するよりも早く、右手は相手を殴るモーションに移行する。最悪殴り飛ばしてからでもいい。とにかく、撃たせたら終わる！

甲冑は一瞬、あまりのことに狼狽したが。すぐに落ち着きを取り戻すと、照準を合わせるまでもなく、引き金を引いた。

バアアアツツ！！

散弾銃とは、音も威力も迫力も、何もかもが違った。延びた音ではない。けれども、いつまでも耳に残響する破壊音とでもいうのだろうか。

いつまでも、いつまでも。

ようやく音が止んだ時、そこには紅い水溜りが生れていた。

「はあっ……はあっ……！」

今日は厄日だ、と少年は思う。

愚痴をこぼすと、例えそれが自分のものでも気が滅入りそうなので、いかに心中といえど自制しておく。

エリアは校舎の中にある、自分が毎日使っている実技練習用個室に身を置いていた。つい先程まで全力で走っていたので、息も切れ切れだ。

「カイフィールドさんは、大丈夫なんだろうか」

言われるがまま逃げてきたので、彼に何があっても分からない。

つい先程とても大きな、外から聞こえてくるもう聞き慣れてしまった、銃声に似た音が聞こえてからというものの、それが気になって

仕方がなかった。

「……………これからどうしよう」

とりあえず、何かないか部屋を物色。役に立ちそうなものを持っていこうと適当な大きさの袋を探していると、

『』

「?」

『ッ』

(……………う、そ……………?)

『コッ コッ』

心拍数が跳ね上がる。体中から、嫌な汗が噴出していくのが分かる。呼吸もうまく出来ない、極限状態とでも言おうか。

ああ、やっぱり今日は、厄日なんだ。

(誰かが、来る……………!?)

第八話 炎舞×少年（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第九話 錯綜の彼方（前）

革靴が床を叩く音は、方向を変えずに近付いてくる。握った拳から汗は滲み出てきそう、しかしその原因は窓からの日差しによるものではなく、焦燥感と緊迫した空気から成るものだった。

もし、あの甲冑だったら。

だったら何なんだという返しがありありと想像できる考えを、今の彼の周りには指摘する人間が居なかった。まあ、居ても指摘するかどうかは分からないのだが。

ともかくにも、エリアは焦っていた。どうにかして身を隠さないと。もし、廊下に音を立てている張本人があつた、謎の甲冑じゃなかったとしてもその行為に移るだけの価値はあつた。とりあえず、エリアは適当に床や壁を控えめに叩いて、素材が薄く軽いものでないかを確認した。

「駄目だ……。壁と壁の間は薄いけど、問題は質量か……」

中々にレアな魔術を扱う彼にとって、一番厄介な障害、制限。百グラムと言う枷が少年を縛り続ける。

そうこうする内に、足音は大分近くまで迫ってきていた。迷いの無いように伺える歩調は、恐怖心を煽る。今にも昏倒したい気分ではあつたが、生憎彼の頭は意識覚醒の健康状態だ。理由不明の不可解な肉体の信号に、脳は拒絶の姿勢でも取っているのだろう。

やがて足音は、自分がいる部屋の前。扉の前で止まった。いきなりすぎるとか早すぎるとか以前に、相手には自分の居場所を特定する機械でもあるのだろうかという謎に対する意識が強い。

っ
っ
っ。

心臓の音。張り詰めた空気が理解できる。このまま感覚が敏感になれば、扉を挟んで位置する相手の呼吸音まで手に取るように分かりそうだった。

スッ。

手と、扉の金属部分が触れ合う音。グツと力を込めれば、それは容易く道を開くだろう。

だが。

それよりも早く、第三者の声はその場に広がった。

『どこかに降りれそうな場所がありますか？』

相手の数がここまでとは思ってませんでした、危険ですから一旦彼方達を降ろしたいのですが』

「駄目。下にも似たような奴らがうじゃうじゃ居る」

『はあ、困りました。お姉さん、モテモテです』

おどけたようにそう呟くと、またもやアスは、何の脈絡も無く危険極まりない飛行を開始した。横の回転は常識レベル。急上昇したと思ったら、唐突に翼の運動を停止させて急降下、地面へのダイブが予告無しで決行される。危険から身を守るための行動とはいえ、リフェウルにとっては生き地獄に近い状況だった。

そもそもこんな事になったのは、いつまでも微妙な高度で飛び続けるアスの責任であり、なんでアタシたちがこんな目に合わなければならぬのだ。

彼女は見事なまでの責任転嫁ぶりを、心中で発揮していた。

ただ今回のは、眼前を横切る球状の炎が見えてしまったため、愚痴を溢さず飲み込む。胸焼けでも起こしそうだと、下がりきった気分が更に最低限度を更新した。

「ねえ」袖を引く声。「あそこは駄目なの……？」「その小さな指の指す方向は、校舎の屋上だ。

「難しい」

「何で？」

「あそこには、もう既にアイツらがいる可能性がある。それに、これだけ騒ぎを起こしているのに国の兵士が来ないところを見ると、

多分この町全体が襲われているんだわ。そんな風に全体の機能が麻痺している中で、果たして甲冑と遭遇した時、逃げ切れると思う？」

『もうそこまで考えていたんですか？』

口を挟む竜に、彼女は抑揚の見受けられない声で返す。

「残念ながら、非常時の頭の回転は速いのよ。ちよつとした癖みたいなもの、気にしないで」

『その方が、貴方にとっても都合がいいのでしょうか？　なら、そうしておきます』

そんな風に一人満足すると　何に、かは知らないが　再び、銃弾や魔術による雨の中を回避するため意識をそちらへ向けた。リフェウルにとつてはあまり好ましくない話題だったので、この会話の中断は願ったり叶ったりだ。

ふと、相手の攻撃回数とアスの動きが極端に下がっていることに気が付く。今頃になってやっとリフェウルは、アスが回避行動を取りながら敵を撃墜していたんだと知った。

そして、知らされてしまった。

「……アス、屋上に降りるわよ」

『あそこは危険なのでは？』

「貴方が疲労困憊で動けなくなるよりはマシよ」

『……何のことですか？』

白々しく答える竜に、尚も怯まぬ声音でリフェウルは、屋上に降りると抗議する。風貌だけに注目すれば威圧的な雰囲気だが、言っていることはただの口ゲンカに等しいかった。

「別に、貴方の為に言ってる訳じゃないの。アタシの読みが正しければ、エリイはここに居る。だから降りると言ってるだけで、勘違いしないで」

『別にそこまで言わなくても……』

分かりましたよ！　降りますよ！』

やや不貞腐れ気味に、巨体は滑空。ズザザツ、と校舎の泣き声のような音を、床を足の爪で抉るといふ行為で出すと、ようやく長い

飛行活動が終わりを向かえる。

「この子をお願い。エリイ見つけたら、すぐ戻るから」

『分かりました。もしもの時は、別の屋上　資料館の屋上で落ち合いますよ』

リフェウルはその後の言葉をろくに聞かず、階段を静かに下りていった。

ああ、くそ。すっかりアイツに感化されちゃってるじゃない。すぐ人を信用しちゃって、バカじゃないの！

そう心中で罵倒する人間は、今頃どこで怯え、泣いているのだろうか。

何でアタシが、あんな得体の知れない生物を気遣わなきゃいけないのよ……。

先程彼女が発した言い訳も、『だったら何で最初から校舎に入ろうとしなかったんだ』などと言われればそれで終わりだったのに。それを、恐らくアイツは知っていたはずなのに。

全くもって、不愉快だ。

いつもの彼女なら、あの少女を竜に託したのは、自分が面倒を見るのが嫌だからなどと誤魔化せたのに。今のリフェウル・ハウは“アスを信頼して、少女を託した”のではないかと自分を疑ってしまう。

誰よりも人を信頼しないはずなのに。してはいけないはずなのに。あれは一体何者で、何故こうもアタシを乱すのだろうか。

拭いきれない疑念は、校舎内に立ち込める湿気に酷似していた。

濃霧のようにもやもやと纏わり付いていた疑惑が、確固たるものに変わった。一人ずつの時間差襲撃から、大人数の一斉攻撃。明らかな時間稼ぎが、青年を襲う。

アルフィンで起こっているこの騒動、その一番の危険地帯で、緋スカー

色の双眸は慌しく、その眼球で捉えている視界を揺らしていた。

後方からの攻撃は全て、炎で焼き払い。前からの攻撃は極力、自分の身体能力で回避するよう努めていた。それがカイフィルドの、戦闘における主流であり定石だった。彼に死角は無い。だからか、過度に集中することも無く安定した精神力を持ち、視覚だけではなく聴覚にも神経を割き、確実に避ける。

例え、十数人の魔術武装兵器を身に着けた人間に囲まれていたとしても、それに変わりは無かった。

炎は鞭のように撓り、踊るっているようだ。彼の周りからは、中途半端に皮膚が焼け爛れた臭いが充満し、鼻が曲がりそう。カイフィルドは、いつそ全て焼き尽くしたいと思ったが、彼がやりたいのは死人を出さないことであって人殺しではないので、炎の温度を爆発的に飛躍させることは無かった。

否、出来ないのだ。

手元で流動的な動きを見せる炎の他に、脇腹の辺り、銃弾がかすめたような傷があった。傷が深く「かすめた」よりも「抉れた」の方が近い状態だ。

ホント、あの時銃身がブレて良かった……。

そう前向きに安堵の息を溢してみても、現状は何も変わらない。

カイフィルドの体は、かなりの量の血液を失っており、限界に近かった。一応、応急処置の仕方ぐらいは心得ているものの、こう度々襲撃されてはおちおち休んでもいられない。

(あまり乗り気はしないけど)

白髪の少年が入っていった学校舎の方を一瞥し、一瞬だけ逡巡する。

(効率は、断然良い……！)

牽制のための、低温度で炎の量だけに力を注いだ魔術を、辺り構わず撒き散らす。 と同時、脇腹を押さえ止血しながら校舎の中へ入っていった。

(早く、エリア君たちに、会わないと)

思い出したように訪れた痛みや意識の朦朧とした感覚に襲われながらも、頭の中はそれだけが占めていた。

(これは、ただの、間抜けな芝居なんかじゃ、ない……)

第九話 錯綜の彼方（前）（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。
更新が遅くてすみません。

第十話 錯綜の彼方（後）

『アイマン様。すぐにこちらへ、カルファム様がお呼びです』
『……。分かった、すぐに行く』

その言葉を心から望んでいた少年が、小さな部屋の隅に丸まり隠れていることも知らず。尤もそんなスペースは当然ないので、ただ単に膝を抱え込んで座っていただけなのだ。

クソっ！ あの女が行けと命令したんだろう！？ なのに今度はこちらか！

妙に感覚が狭い歩幅と歩く早さが、彼の不機嫌さを如実に表す。そうしてアイマンは、アルフィン魔術学校の本館と呼称される、生徒用の実技練習スペースである干渉型魔術の部屋の扉から手を引いた。

（あ、危なかった……）

不安も緊張も焦燥も、自分の中に溜め込んでいたその全てを吐き出すように。そして小柄な体は肺が欲するまま、その部屋ありったけの空気を吸い込んだ。

「げほっ！ げほっ！」お陰で咽た。

「……それにしても」

何故、カイフィルド・ランスさんがこんな田舎町に？

目まぐるしく変わる状況に、エリアは初めて自問を投げかけた。

尤も、それに自答できるかは問題ではなく、疑問を持てるほど自分は落ち着いているということが重要なのだが。

背中を窓際の壁に預けて、遮るものが無い太陽の光を眺める。

何故こうなったかは、僕に答えは出せない。

だけど、自分がどうすべきかは、僕にしか答えが出せない。

「リフェウルを探さなきゃ……！」

窓が閉まっているこの部屋では、ましてや四型の中で一番の強度を誇る 些細な振動でも、干渉型の魔術は集中が切れると事故に

繋がる為だ　この部屋に、風が吹きぬけることはない。だが、エリア・フィーリンツの胸の内を、何か爽快な、白銀色の風が駆け抜けていったのだけは彼自身が感じられる事だった。

成長からか、それとも自意識が生み出した満足感なのか。

それは、空を統べる者だけが知っている。

轟音という言葉が子供の喚き声に使われてしまう程の音、それはつまり誰も耳にしたことがない大きいという単語の使用範囲を超えた音。竜の咆哮は、ただそれだけで空気を震え上がらせ、弾の軌道を捻じ曲げた。

『さあ、私と遊びましょう』

そんな未恐ろしい台詞は言われたくないわねと、若干身震いしながら魔術学校本館の屋上を離れ、それから五分ほど経った今。校舎三階にあるいつもの部屋に、アイツは居るだろう。半ば確信していたリフェウルは、東、中央、西にある三つの階段の中から一番近かった東階段を使って三階まで降りてきていた。エリアがいつも使っている部屋は干渉型第十三室。西階段側からの方が近いのが少々厄介　東階段と西階段の間には結構の距離がある　だが、屋上の階段から近かった方を選んだので仕方がない。

(あの子、大丈夫かしら……)

紅玉のような体表を持つ竜、アスの元に置いてきた少女を思い出す。確かにあちらの方が安全ではあるが、まだあの甲冑は近くに居て、実際リフェウルが階段を降りる時に攻撃をしてくれている。万が一という事もあった。……いや、それよりも

「アスに怯えてないかしら……」

そちらの方が、ある意味では本音である。というか、それしか含んでいなかった。

あんな咆哮聞かされたら、怖くなるのが当たり前だし。むしろ怖

がられてアスがいじける風景の方がありありと想像できるわね。
苦笑よりも嘆息に似た息の吐き方で、言葉に出さずに胸の内に留める。

「？ あれ……」

恐らくは第十三室のある場所から、男子学生の平均よりも小柄な少年が現れた。顔だけ出して妙に辺りを見渡していると思うと、唐突に部屋から飛び出し、すばやい拳動で西階段側へと走り去る。

あれは……！

見間違えるはずがない。見慣れた髪の色と顔。エリアの方からは位置の関係　リフェウルは顔だけを出して常に周りを見ていた。見えなかったようだが、リフェウルからはちゃんと目視できていた。顔も、部屋から出てきたときに確認済みだ。

もしかしたらあの甲冑が居るかもしれない。緊張感を保ったまま、微かな音も聞き逃さない程の鋭利な感覚を得る。自分の足音は邪魔だと言って捨てるように、空気の振動は最小限に抑えられていた。影を縫うようにして進んでいく。

だが、障害もなく眼前の空気を割いていた足は、ピタリと止まる。中央階段が、そこにはあった。

もしかしたら居るかもしれない。上ってくるかもしれない。下りてくるかもしれない。

息が荒い。脈は騒ぎ続け、ろくに酸素と二酸化炭素の交換も出来ない。血液は濁流のようだった。一步がもどかしい。その一步さえ踏み出せれば、流れに沿って走り出せるのに。そう、自分に言い聞かせるようなりフェウルの心は、しかし容易く現実にはならない。

トン、トン、トン

彼女が葛藤に苛んでいると、彼女の思いが悪い意味で具現化した。足が床を叩く音が、少なくとも三階の校舎中に広がって。そしてそれは、少女の迷いを　強いられたという方が適切だが　吹き飛ばすだけの役を担った。

（走れば良い！　見つかつて大丈夫、ここは外じゃない！）

もし、それがあと数秒早ければ

「あ」

全体的に、鋭角なフォルム。脚部の装備に目がいきがちだが、この装具は新体系の魔術まで扱える。

まるで図つたようなタイミングで、デインは少女の前に現れた。

窓から入った日光が、ちょうど人の眼球部分だろうか、に当たると、鋭い眼光に睨め付けられたような感覚に陥りそうだ。

カチャツ　精錬された動きで、甲冑は腰のホルスターに収納してあつた拳銃ハンドガンに手を伸ばし、安全装置セーフティの解除と遊底スライドを引く作業を一瞬で終わらせる。銃口は額へ、その位置にあるのが当然だともいのように、吸い込まれてゆく。

《天降す槍を成せ》

一閃。

甲冑は、リフェウルの体を横切るようにして倒れた。

「やっぱり、リフェウル・ハウか……まあこの際、一緒に行動する人間が増えても文句は言えないな」

「アンタ……!？」

甲冑はうつ伏せに倒れた為、頭になっている背部には小さな穴が空いているのが見えた。当然、階段を上ってきたカイフィルドの手の中には、何か得体の知れない　色からしてまた炎だろうか　棒状のようなものが握られており、これでやったのだろう。よく見ると、槍か何かのようだ。

うつすらと警戒心を強めながら、誰も居ない西階段の方を一瞥した。

……もう間に合わないか。

「ひよつとして、エリア君を探してる？」

「……だつたら何？」

不機嫌さを猛アピールしながら、如実に嫌な顔を作り出す。何故か彼にだけは、罪悪感を微塵も感じないので素になれるのだ。カイフィルド・ランスという男の、リフェウル内での立場、位置は不満をぶつける玩具で収まった。

「アンタの連れが探してたわよ」

「え？」

唐突に喋る。間抜けに驚く。

「アス……あのでっかい竜。アンタのことさりげなく会話に盛り込んでたから、多分と思っただけだ。違う？」

「……そうか。いや、あつてるよ。」

リフェウル・ハウ、アスが今、どこに居るのか分かるかい？」

「屋上。東階段から降りてきたから、すぐよ」

「ありがとう。」

ああ、あと、君も来てもらおうから」

そう、カイフィルドは顔を綻ばせながら告げた。だけど目は笑ってない。緋色のそれが見詰めるのは、自身の背後、階段の窓、否、それよりも遠い空。

「は？」ぐっ。

どちらが最初かは当事者にしか分からない。リフェウルが疑問符を浮かべ、カイフィルドが彼女の手を強引に引っ張った。

パリンツ！！　ゴシュツ！

どこか爽快な破砕音と、不安を煽る重たい音。つい先程まで自分が居た場所に、甲冑が三体も出現していた。もしカイフィルドが手を引いて走っていないかったら、自分の体はあの重量をまともに受け止めるハメになっただろう。僅かながら感謝をしなければならぬのかと、嫌気がさす。

「さあ早く、走って！」

「言われなくても！」

騒々しい足音を、鈍重な音が追いかける。リフェウルが先頭を走って、次にカイフィルドといった順番だ。それを追いかけている甲冑は、銃器や魔法を使ってなんとか足を止めようとするが、カイフィルドが後方に魔法を張っている。以前使った、炎を円状に展開させるもの。ため、意味がなかった。

元々距離が無かったためか、すぐに階段は近づく。

が、

「ちよ、ちよつと待って！」

急にリフェウルは立ち止まった。

「何をやっているんだ、君はっ！」

「上に、小さな女の子が居るのよ！ アスに任せたから大丈夫だろうけど、こいつらまで連れてったら 駄目！ どうせアンタ、上で片付けるつもりなんでしょ？ でもそんなことしたら巻き添え食らっちゃうわ！」

「なっ!?!」

想定外だった。その驚愕に占められた心は、カイフィールドをすばやく次の行動に移させる。

「離れて！」

そついうやいなや、彼は先程使ったものと同じ、炎で形作られた槍を生成しようと魔術を発動させる

「うぐうっ!?!」

瞬間、彼は脇腹を押さえて蹲る。その時初めて、リフェウルはカイフィールドのそれ気が付いた。

「アンタ、その怪我……！」

蹲る彼の脇腹、服にはべつとりと赤黒い血液が滲んでいた。コートのせいで見えなかったようだが、今は見える。

「大丈夫、すぐに立つから」

ははは、と力ない笑い声を上げる青年に、彼女は顔を顰めた。

甲冑はもうすぐ側、十メートルも無い。コイツが今立ち上がったも、恐らくは間に合わない。……なら！

「あーもう！ 守ってくれるなんて嘘じゃない！」

文句を言った訳ではない。ただ単に、理由が欲しかった。自分が動くための理由を、臆病者を突き動かすための理由を。

リフェウル・ハウは、蹲るカイフィールドを一瞥し、次に尚も走り続ける甲冑三体へと目を向ける。睨むように。気に入らないと、蔑むように。

《 《

でたらめな文字列は、この世界に一つの現象を産み落とす。
リクランマ現象。一点に収縮された魔力が統制を失い解放される、一
種の爆発。

リフェウルの右手に握られた、適当に文字を綴られた紙は直に爆
発を起こす。

「廊下は走るなって、言われたことあんでしょうがあああ!!」
そう叫び、投げた。

轟音に混じって、何かが碎ける音やガラスの割れる音が広がる。
だけど、悲鳴だけが、足音早く耳に届いた。

風が直接当たる。煙を浚って、それをどこかへ運んでくれる。視
界はすぐに、元に戻って。しかし、眼前の光景は、いつもの学校の
ものではなかった。

「廊下を壊すなどは、教わらなかったみたいだね」

痛いなら喋らなければいいのに。苦しそうな声音で、しかし顔は
おどけた様に。

彼の言った通り、廊下は半分以上、抉られたように消え去ってい
た。窓際は全壊、甲冑が居ないあたり、爆風に巻き込まれて飛ばさ
れたのだろう。

少し、気分が晴れた。

リフェウルは嘲笑を浮かべると、「そんなこと教わる訳ないじゃ
ない馬鹿」と罵り、「さあ行くわよ」と、手を差し伸べた。

西階段から屋上に上がってから見えたものは、東側の学校の屋上
で竜が我が物顔で暴れていたという、想定がいすぎるものだった。

あの甲冑もいる!

「ひ、ひやえ……!?!」

なんとも情けない声なんだろう。驚愕の後には、反省が待ってい
た。

『あら、またここの生徒さんですか？』

西と東では、かなり距離があるはずなのに。まるで別の何かで探し当てたように、竜の、紅玉のような眼球がこちらを向いた。

『え、いや、あの、えーっと……』

エリアは逡巡すると、その場から脱兎の如く逃走を図ろうとし、
『えい！』

そして兎の如く捕まった。

『動かないで』

そう、体中に声が響く。瞬間、眼前に何か得体の知れないものが落ちてきた。甲冑が上空から魔術を放ったのだ。まさに目と鼻の先、一歩でも動いていたら当っていた事だろう。

『危なかったですね、君』

「……………あなたは」

助けてもらった。その事実には、恐怖心が和らぐ。

『アスって呼んでください。』

ああ、私、竜ですけど別に君を食べようなんて思ってませんからね。カイフィルドの匂いがしますし、守らなければならぬようですね』

「カイフィルドさんを知ってるんですか！？」

『ええ、彼の仕事仲間ですから』

つと、それより。あなたもこっちへ。この女の子をしつかり抱きかかえてくれますか？ ちょっとだけ動きますから』

スツと、翼を持ち上げてこちらへ来るようにと指示する。アスの体には小さな女の子が抱きついていて、表情の変化は皆無だった。エリアは誰かと似ているような気がして、そして脳裏に浮かんだのが、フェウルだったことから、懐かしさのあまり噴出しそうになる。

背中に回さなかったのは、自分達の体が晒されるからだだろう。翼と比べるとかなり小さい腕にエリアと少女は抱かれて、アスは力強く両翼の運動を開始した。

『さあ、迷子を捜し始めましょうか』

第十話 錯綜の彼方（後）（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

もしかしたら、しばらくの間、更新が途絶えるかもしれません（一週間以上更新がないときはそう思ってください）。すみません。更新が再開した時、もしよければ、また読んでやってください。

第十一話 天からの贈りモノ

公式文章^{ホム}、という言葉が存在する。

文字の組み合わせによる、効果の差異が大きい自由度が高すぎるこの技術において、汎用性と簡易性 ある程度の「例外」はあるが が優れている魔術にのみ、それに記録されることを許される魔術文章の記録書。

リフェウル・ハウは、その「例外」を目の当たりにし、目に焼き付けていた。それは、思わず昔からの癖が露顕してしまうほどのものだった。

魔術文章は基本 魔術内容の確定から発動までの時間消費を抑えるため 長文などを扱わない。一文が常識であり、文節だけで使用することも珍しくはない。ここまで説明した後で、何人かの人間に彼女が見た「例外」は何かと問いかけたら、帰ってくる答えは十中八九同じだろう。

カイフィルド・ランスは、複数の甲冑に囲まれながら、一つの文章を紡ぎあげていた。それは手紙を書き連ねるように丁寧で、もどかしさをぶつけるように激しくもある。

聞き覚えのある四つの文章、しかし内容は似ても似つかない。

《焰^Aの華を咲かせよう》

《その色蒼^Aにして、深海の孤独を象る》

《紡^Aがれた言葉達よ》

《その手に豪傑^Aの紅を》

脳裏で再生する度に思い出してしまふ 身近にいる人間が扱っている魔術、その魔術文章に酷似した文法、文節。何かの偶然か。それとも凶られたことなのか。

今、眼前で顕在化されようとしている魔術文章は、七年ほど前に例外中の超例外として記録された公式文章の魔術だった。汎用性、簡易性ともに皆無。なのに何故か登録された、彼女の立場であつて

もその全貌が明らかにされなかつた魔術。

リフェウル・ハウは全神経を集中させる。耳で、目で、さらには肌で感じ取るうと。彼女はただ、そこにある現象を記録する。

「リフェウル・ハウ。少し、下がってくれないか」

だからこそ、自分が彼に歩み寄っていることに気が付かなかつた。

あるいは年相応に、ただ不安だつたからだろうか。

二人は今、上つてきた屋上で数十対の甲冑に囲まれていた。

屋上を飛び立つてからすぐ、エリアは異変に気が付いた。

「……追つて、来ませんね」

『ですね。別の標的を見つけたのか、それとも何か考えがあるのか。どちらにしろ、今は貴方達二人を安全な場所へ連れて行くのが先です。とりあえず、そちらの子が優先でしょうね。君は男の子なんです。だから、ちょっと我慢してください』

「いえ、僕もちよつと寄り道しなきゃいけない……。友達を探さなきゃいけないんです、だから僕のことには気にしないで下さい」

『……友達、ですか』

どこか寂しげな表情を浮かべると、それきり会話は途絶えてしまふ。なんとなく居心地の悪さを感じても、こんな非常事態に冗談を挟める訳もなく、結果として無言を貫く。

そんな空気を打ち砕いてくれたのは、隣にいた少女の声だつた。

「あそこ」

最低限の単語しか喋らない少女は、その体を使って一つの場所を指し示す。そこには、アクデイの兵士が人々を束ねている姿が見えた。学校を出たところのすぐ近くにある広場。昨日のパレードの時に行った、野外店が密集していた所だ。

『近くに下りますから、一人で行けますか？』

「うん」

『何分、姿を見られたら色々面倒なことになる身分なのですよ』
「大丈夫。」

それよりも、お願いがある。……あの人に伝えて欲しい」
アスの瞳に、憂いが映る。「何ですか？」と問うと、少女は妙に照れ臭そうにしながら「ありがとって……」と消え入りそうな声を振り絞る。

「あの人？」

妙な疎外感からか、素直に聞いてみる。すると、エリアに対して無愛想だった少女は以外にも反応してくれた。

「助けてくれた。とっても優しい人」

「へえ……」

リフェウルとは違うな、と少女の言う「あの人」を褒め称えてみる。が、長年の親友を褒めた後のようなむず痒さと気恥ずかしさが体中を襲ったような気がしたので、すぐさま取り消す。

少女はそのまま、自分もそう言って恥ずかしかったのか、アスが地面に降りると同時に走り去ってしまった。

『さて……』

「ええ」

人と竜。その空間に、影は二つだけ。エリアは、これ以上のチャンスは無いと意を決し。

「少し、話があります」

それは、友人を探す前に、どうしても知っておきたかったこと。今後において最も重要な線引き。この言葉が吉とでるか凶とでるか、彼は何も知らない。

ただ、成すべきことを成す為に、エリアはやるべき事をやるだけだ。

(相変わらず、慣れない感覚だな)

炎をイメージした不可視の魔力に包まれながら、カイフィルドはすぐ側の彼女に激しい疲労の様子を隠そうともせず、頬を伝う汗に嫌気をさしていた。

普段使う魔術は原型ではない。むしろ、こちらの方がそれに近い部分がある。言ってみれば普段自分達が使っているものが加工された安全なもので、今やろうとしているものは原型と加工の中間地点なのだ。宝石の原石の様に粗く、雑。しかしある程度の研磨は終わらせている。何もかも中途半端。

それは、力でさえも。　　実力ではなく、かといって完璧に譲渡されたわけでもない。

やるせない思っただけが、言葉には込められてゆく。

(この怪我じゃあ、魔術の連続使用は無理か……。なんとかして全員を巻き込まないと)

目を瞑って視覚を遮り、意識を遮断して聴覚を捨てる。五感では感じ取れないものを理解するために、心の水面は揺るがない。一つ一つ、それは微かな違和感として姿を現す、甲冑が放つ微弱な魔力。デインは常に魔力の供給を行わないと起動しないため、カイフィルドはそこに注目した。

「凄い……」

どうやら魔術は完成したようだ。リフェウル自身がその目で、この現象を目撃し、感嘆の声を上げているのだから。

言葉は紡いである。魔力も作り出した。的も絞った。　　後は！

彼は手の平を掲げ、脇腹からの激痛に顔を歪める事も無く、その現象が終わりを告げるまで集中を霧散させないよう自分に命じ、ただ一言。

《焰の種》

刹那　体を覆っていた魔力は炎へ改変され、またそれは四方へ飛び散ってゆく。

カイフィルドは魔術を、無意識下で感じ取ったものを意識的な感覚に置き換え、距離と数などの情報を把握し、追尾機能を付け足し

た上で発動していた。　　実際は敵からの攻撃も魔術で防いでいたので、二つの異なる内容を持つ魔術を並行して操作していたことになる。

結果は、一目瞭然だった。

粒上の炎は一見、ただ辺り構わず飛び散っただけかと思いきや、計算された軌道を通り甲冑の背部や脚部、後頭部など様々な場所に当たっていた。

大半のものは意識を失い　　そうでない者も動けないことは一緒だった　　倒れていく。運悪く　　飛行魔術を使用していた者だけが　　屋上から落ちる者もいたが、まああの装備なら大丈夫だろうと、あれについてある程度の知識を持っているカイフィルドは大した心配をしていなかった。

「たった一回の魔術で……!？」

その声の主が誰なのか、振り返らなくても分かる。聞き覚えがあるという理由以外に、もうこの場には、自分と彼女以外声を出せるものはいないのだから。

「リフェウル・ハウ。たしか君は、エリア君を探しているんだよね？」

「え、ええ。そうよ」

前振りなしで会話を始めたせいか、軽く訝しげな表情を浮かべる少女。彼はそれに構う事無く口を動かす。

「彼は屋上へ行ったんだよね？」

「多分ね。西階段へ向かったのは見たから。それでも上か下かまでは分からないから、確率は半分」

「恐らくそれは正しいよ」

屋上上がった時、視界の端で捉えたあれ。

「君はアスに連れて行ってもらってここまで来たんだよね？　でも、今はいいない。だとすると、他の市民を見つけて、それをどこかへ移動させるためにここを離れた」

「ならアイツは……」

「そう」

やっと合流できそうだ。

歡喜か、嘆息か。

どちらとも似つかない心情を、彼は気にしない。

ただ青年は、二十四の力が記された紙を左手で握り、右手を空に伸ばすだけ。

彼の声に、紙に記された中の幾つかが反応を示し、魔術として具現化される。突如として右手の上に、直径三十センチぐらいの球状の炎が現れた。だが、これで終わりではない。

完成した手紙に、さらに言葉を付け加えてゆく。カイフィールドは追加詠唱により、この炎に形を与える。標となるべく、巨大な力の塊に。

《天聳える柱となれ》

そして炎は、天を駆け上がってゆく。

「アスとエリア君は、一緒にいる可能性が高い。とりあえず、アスをここに呼ぶ」

「やっぱり、そういうことなんですね」

『ええ、残念ながら。あの場に、正式に派遣されたアクデイの兵士が居たのはそのためです』

眼前の少年は、ただ俯く。

まさか、ここまで理解している人間がいるとは……。

表面上は冷静な雰囲気を纏っていたが、アスは内心、驚愕と感心に染められていた。

アスたちはあの後、その場を飛び立とうとはしないまま、話し合っていた。

『アクデイは現状、対立している国よりも人の数が多く、それはイ

コールで戦力の数にもなります。ただ、その分デメリットも多々あり……。

それは、内戦が起きやすいという事。人が多ければ多いほど、複数の派閥に分かれてしまうのですよ。今はまだそのようなことは起こっていませんが、現状不安定な世界、いつそれが起きてしまうか分からない。そういう状況に、私たちは立たされている」

最後の言葉は、暗に自分達がアクデイの人間であることを示していたが、今更なことなのでエリアも気に留めなかった。

「今回の騒動は、中立国との間に一種のパイプラインを作ること。表立って協定を結べばウイクジブスが何らかの妨害をしてくる、だから『奪取された新型の兵器を回収するために中立国へ向かった』と、向こうには公言している」

『実際は全くの自作自演ですがね。中立国は独自の文化 亜人や摩技術についての知識、技術も抜きんできていますから。』

この町を襲った例の新型兵器ディン。あれだって、元を辿ればどの素材も殆どが中立国製です。

つまり 』

「その技術を自分達が得れば、ウイクジブスとの戦争に勝てる」

『そう。もうアクデイは戦争を止める気はありません。むしろ逆、長年敵対関係にあった国を滅し、不安定な世界を元に戻して内側からの崩壊を防ぐ。』

そのための第一歩が、今回のこれ。自作自演で恩義を売り、ほぼ強制的に技術提供をさせる』

「そのためには、こんな小さな田舎町、どうなるうが知ったことではない……か」

『……すみません』

「いえ、いいんです。少なくとも、アスさんやカイフィールドさんはそういう人達とは違うんでしょう?」

『ええ、彼は間違いなく止める気ですよ。今回の騒動の、彼の上司であり恐らくは首謀者 アイマン・ヒューストンを殺してでも止

める気です』

(アイ……マン?)

どこかで聞いた名前。部分的な情報は浮かんでくるのに、その全貌は明らかにされない。頭の中で幾度も反芻するも、結果は同じだった。

無言の空間が、足を運んでやってくる。

吹き荒ぶ風が、悪戯に髪を弄ぶ。田舎町に似つかわしくない火薬と血の臭いが、鼻を突く。今まで死体は見なかったけど、どのくらいの人々が犠牲になったのだろう。

込み上げてくる、理不尽さに嘆く気持ちと憤りの無い怒り。これに「身近な人間の死」という現実が加われれば、たちまち化学反応を起こして危険な爆発物に変貌するだろう。普段は柔らかな顔立ちも、今だけは事件の首謀者への敵意を剥き出しにしていた。

「……………」

また、風が吹きぬける。

ただ今回のそれは、酷く乱暴で荒れ狂ったような印象を受ける、激動と言葉を具現化させたようなもの。

荒んでいて。

とにかく、強い。

そして肌を感じ取ったものは、それ以外にも、

「熱……い?」

焚き火の上で温められた空気を大量に浴びているような、そんな感覚。

『どうやら、迷子探しは終わりのようです』

「探し始めてもいませんでしたけどね」

紅玉のようなそれが見詰めるものを見やり、返す。

『それは内緒の方向で』

さあ、と紅で覆われた腕をこちらへ伸ばし、折りたたまれていた両翼は元気良く天へと向けられた。

焦燥はある種の汗を生み出し、その類の汗は嫌悪感を生み出す。本来ならば今、自分はどうにこの町を離れていなければならぬはずなのに。天才だともてはやされるあの若造の行いで、何故私が被害を被らねばならぬのだ！

アルフィン魔術学校の校長、グラムス・リマ・カーネルは、国の治安を守るアクデイの兵士ですら近寄りがたい、激しい剣幕を見せていた。

彼は、カイフィールドが調印式のあの場に居なかつた為、つまり彼に身を守るものが誰もおらず、否応無しに正式な兵士の側へ保護されてしまった。

腕の時計を一瞥、もうすぐ三時になる。本来ならば、カイフィールドと一緒にこの町を出ている頃だ。

ミスを犯すわけには行かない。呪文のように刷り込まれた言葉が、脳裏に浮かび上がる。それだけが、彼を突き動かす動力源となる。

（あいつらは何故かここを……大して何も無いクソみたいな田舎町を、わざわざ選んだ。それは、そこに何か目的があるから。何か大事なこと……）

アハツ、と君の悪い声が、広場に広がる。彼の後ろ、噴水の中央で水を撒く女神の像も、その男にだけは柔和な笑顔を振りまくことは無いだろう。

（そうだ、まだチャンスはある！ あいつらが探しているものを先に見つけて、上へ持って行けば、私はまだ勝者でいられる！）

グラムスは周りを見やる。あの兵士達は、どこかで話し込んでいるようだ。今ならきつと、ばれずに戻れる。

男は、アルフィン魔術師・摩技師育成学校の敷地へ戻るため、欲望に駆られた足取りで走ってゆく。

その先に、苦痛と絶望が当たり前前の世界が広がっていると知らずに。

第十一話 天からの贈りモノ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第十二話 消失の主へ送る手紙

午後三時。事件発生から二時間経った今。民間人からの通報でやってきたアクデイの兵士達は町の中央を陣取り、しかし何故か上からの命令で待機せざるを得ない状況。

立ち入ることを許されない魔術学校校舎の屋上で、四者の思惑がぶつかっていたなど誰が思おうか。

一人、リフェウル・ハウは少年の身を案じて奔走し。

一人、カイフィールド・ランスは矢面に立つことで人々を守り。

一人、エリア・フィンツは守られることに憤りを感じ。

一匹、アスは戦場にいる民間人を出口へ導く。

アスは仕事仲間の合図をしつかりと汲み取り、エリアを連れて先ほど自分達がいた学校の屋上へ降り立っていた。

そこで思いは、交わる。

「リフェウル！」

アスの足が地面に触れる前に、少年の足は屋上を踏みしめた。リフェウルもまた駆け出していて、勢いあまって抱きつくともまではいかないが、それでもしつかりと再会の喜びを味わっていた。

そんな微笑ましい様子を、カイフィールドは眺めている。

彼は脇腹に対戦車ライフルをかすめており、その上で全力に近い魔術の使い方をしている。即効性の止血剤と応急処置がなければ倒れている身、それでも彼は、アスと目が合うとおどけてみせる。

「彼は凄いね。少しの間とはいえ、こんな状況を一人で生き抜くなんて」

『ええ、まったくです。それに、頭の方も以外に……。両親は魔術師らしいですよ？』

たしか、アクデイ第九技術機関の本部にいるんだとか」

何故か誇らしげに、アスは胸を張って答えた。

「第九技術機関？……それ、本当かい？」

「それが何か？」

真偽の確認を取る彼を不思議そうに見詰め、適当に頭の中で該当する事件などがないか調べるも、元々そんな事件は怒ってないのか、それとも自分が知れなかったことなのか。アスは首を傾げるだけだった。

カイフィールドは言おうか言うまいか逡巡したが、やがて意を決したように、決して眼前の少年少女には聞こえぬよう極限まで声量を絞った声を上げる。

「第九技術機関は、数年前から閉鎖している。研究者全員が一晩の内に全員失踪しているんだ」

「そんな……！？ 毎月手紙も来るんですよ！」

「多分、国が偽装しているんだろう。君はその姿だから、会議とかに参加できないせいで知らないだろうけど、一時期国の中枢は完璧に麻痺していたからね。結局、話は隠蔽と言う方向に進んでいったけど、彼には、言わない方が良さそうだな」

「……ですね」

空気が悪くなってしまったな。

やはり自分の胸の内だけに留めておくべきだったと後悔し、反省する。

「どうかしたんですか？」

気付くと、少年が心配そうに瞳を向けていた。

どれだけ陰鬱な面持ちだったのだろうか、しばらく考え事は控えようか。そう思わされる眼差しだ。

「ああ、全然大丈夫だよ」

快活な笑みを浮かべ、元気をアピールするカイフィールド。しかしエリアには、それ以前に気になることがあった。

「え、いや、あの……そうじゃなくて。その怪我……」

彼は自分の脇腹を指差す。そこはロングコートが唯一裂けていて、赤が滲んでいる箇所。この戦場で唯一負ったものだ。

「ああ、これか。大丈夫だよ、毎度のことだし」

「それが毎度起こる人生なんて、アタシは絶対嫌ね」
毒づくリフェウルを、彼は情けない声音で止める。ほぼ懇願よねと、リフェウルも渋々といった感じで口を閉じる。

四者は笑う。束の間の休息に、心身ともに解放されたからだ。そう。

確かにそこには、笑みがあった。

静けさが存在した。

死と言うものが、遠くに感じた。

嵐の前の静けさ。近づく風の流れを、誰も感じることは出来なかった。

「とりあえず、君達は家に帰ったほうが良いよ。アルフィンの町の端っこなら、彼らが来る可能性もないだろうし」

「それは良いんだけど……」。

それよりも、まだ聞いてなかったけど、アタシとこの上司さんは何が目的なの？ わざわざこんな田舎町に喧嘩売りに行くなんて、よっぽど暇なのね」

「それはさつきも言った通り。技術と情報を貰うために、裏で繋がるためだと思うよ。それ以外に何か考えでも？」

「いや、ちよっとね」

リフェウルはカイフィルドの首根っこを掴むと、彼が怪我人であることなどわりと無視して強引に引っ張ってゆく。

エリアに聞こえてないかと細心の注意を払いながらも、彼女は口を開く。

ああ、彼女、エリア君には秘密にしてるんだ。色々複雑なん

だなど、カイフィルドは若干の同情を抱いた。

「アタシ、アタシの家系のことはもう勘付いているわよね？」

「ん？ なんのことだい？」

「そういうのは止めた方がいいわよ、合っていない」

「手厳しいね」

「道化気取ってんじゃないわよ。ボクとか言っちゃって……ホント違和感ありまくりだったっつうの」

やれやれと肩を竦め、呆れていますよとアピールするように溜息を吐いてみせる。カイフィルドはムツとしたが、それは表情には出さず胸中だけに留めて置く。

「アタシの家系は、アンタの知っている通り『記録係』よ。その仕事は、ウイクジブスが一切介入できない他国の事件を、その代わりに記憶し、書き記し、伝える事。」

アタシの両親は偶々ここに来て、そしてアタシを生んだ。まあ、二人が死んだ十年ぐらい前から、アタシは記録係としての義務を放棄してるんだけどね。つうか、アタシの存在自体、向こうは知らないだろうから別に構わないんだろうけど……。

それはそれとして。アタシが一つ気になっているのは、ある一人の女の事」

一旦区切り、何か思い当たる節はないかと言外で語る。やがて返事がないと、彼女の口は再び動き出した。

「フェマミー・アレイチエルド 金さえ積まれれば仕事を引き受けるフリーの元軍人。十年前、ウイクジブスの元帥の席に一番近いといわれた人間よ」

「元帥……だつて?」

「軍事国家であるウイクジブスにおいて、階級が表す地位は絶対。元帥は基本、アクデイでいう王に匹敵する権力を持つわ。その元帥は必ず四人決められていて、それぞれが管轄の政治を行う。権力を一つの人間に集約させるんじゃないやなく、四つに分けているのね。」

んで、そのフェマミーは今、アクデイに雇われている。アンタの言うアイマン・ヒューストンはまるつきり使えないみたいだし、代わりの指揮官にでもなってもらったんでしょうね。前に一度、彼女の戦い方を見たことがあるから分かるの。この腹立つ戦法、間違い

なくあの女のものだわ」

腹立たしい思い出でも抱えているのか、苛立たしげに佇むリフェウル。前髪を撫でる風にまでもキレそうな面持ちで、会話を止める。彼からしてみれば、元帥になりかけるほどの人間とその年齢で接点を持つなど割と誇れることなのだが、記録係の人間は情報屋としての側面も見せるため、まあ不思議ではないかと余計な口を挟むのは止めておく。

「何か他に、彼女に関する情報とかはないの？」

「あつたらとつくの昔にアンタをそこへ飛ばしてるわよ」

「……ありがたいね」

彼は自分の脇腹を一瞥すると、軽く嘆息する。そこには赤く滲んだ衣服と、丸く切り取られたような痕が残るロングコート。割かし深い傷なのだが、彼自身さして問題ないですよといった表情を浮かべている辺り、出てくる言葉は「魔術って便利だね」だった。

風がその者の前進を妨げる。竜の背中というものは、状況によっては小粋なアトラクションにもなるが、また状況によって絶叫以外の何ものも生まない恐怖心を植えつけてくれるものだ。

前はアスが腕で抱えてくれていたため、ただじっとしていれば良かったのだが。もう既に腕から悲鳴が聞こえ出しているエリアは、がむしゃらに力を込めてざらざらとした背中に抱きついていてた。

「あの、本当に家に帰っても大丈夫なんですか？」

「心配ない。町のほうから煙が見えないから、そっちには全く興味がないみたいだからね。やはりフェマミーの狙いは学校にある

まあ、それが何なのかは今のところ不明だけど」

「そう、ですか……」

『心配ないですよ、ちゃんと守りますから。竜が本気を出して戦うんですから、負けるはずがないでしょう？』

「むしろ町が壊れるわね」

わりと本気で思っているのだろうか、彼女はジト目だ。

『あらあら』

それを軽く受け流すあたりがアス。この二人、案外相性良いのかも、エリアは恐怖のせいで今現在余裕の無い脳で考えてみる。

と。

アスとリフェウル、二人の表情を映している視界に、その奥に。何か点のようなものが見えた。

点は光のようなものにも見え、光の点は高速で進んでいるのか、残像を残して線になる。

(あれは……)

空に光を記す線は、こちらと並行して飛んでいた。

(魔術……?)

やがて線は、進行方向を九十度、変更させる。つまり、こちらへ向かって真っ直ぐに飛んできていた。

「アスさん、もっと上へ飛んで!？」

叫び声を上げた時にはもう遅い。光の正体は、通常の数十倍の大きさを持つ電が太陽光を反射して見えたもの。

『ぐうぐうっあああああっ!』

グシャアッ!! と気味の悪い肉の潰れた音が聞こえた瞬間、アスの絶叫が空に木霊した。

高速で進みながらも安定した飛行を保っていたアスだが、ガクンツと高度が下がる。電は右の翼に直撃していて、この状況下では致命傷に等しかった。

「アス!？」

悲鳴に近い声をリフェウルが上げる。

『だい……じょうぶです。目的地まで、なら、まだ、飛べます……から』

「くそっ! なんでこっちに来た!？」

一瞬だけ激昂した彼は、心中の混乱を必死に押さえ、黙考する。

(そもそも、学校に何か目的がある、という漠然とした考えが間違
いだっただのか？ だとすると目的は……)

エリア君の話によると、アイマンは一度動いている。その何かを
探して……。そして見つけた。あの学校の一つの部屋に。そこに何
かがある……。違うのか！？

「エリア君！」

「は、はい」

「アイマンは確かに、君の隠れている部屋に入ろうとしたんだよね
？ だったらそこに何かがあるはずだ！ 思い出せないか！」

「そんなもの、何も無いですよ。あそこにあるのは魔術の練習に使
う道具とか、机とか紙とか。どこにでもある普通のものなんです」

エリアは唐突な魔術攻撃に怯えながらも、尚続ける。

「さっきも言った通り、アイマンって呼ばれた人は、こっちに真っ
直ぐやってきて、ボクのいた部屋の前で立ち止まって。そして、誰
かに呼ばれて離れていったんです」

「ちよつとまつて！」

明らかにおかしい違和感に、カイフィールドは気が付いた。

(本当に学校に求めているものがあるのなら、ここへは来ない。こ
の事件の真相を知る民間人を葬り去りたいなら、なにもこんな方法
じゃなくても、ましたやアスを狙うなんてありえない。)

アイマンは真っ直ぐにエリア君の元へ向かった。そう、ここが問
題だったんだ)

初めてカイフィールドとエリアが会ったその日。その出会い方は、
失敗した魔術の矛先が彼に向いたからだ。

ではそのとき、彼は何の魔術を使ったのか。短い言葉で魔術を発
動させたほうが良いはずなのに、わざわざ四行の魔術文章を使った
のは何故か。アスと言う存在と契りを交わして手に入れた「四行の
魔術文章」という力を、彼が手に入れていたのは何故か。

(そんな馬鹿な……)

しかし、それしか考えられない。

アクデイの上層部は、エリア・フィーリッツという小さな少年を狙っている。

人の敵になると、勝手に決められて、それで彼は平和な日常を脅かされた。

何も無い部屋にわざわざアイマンが出向いたのは、そこにエリア君がいるとなんらかの方法で分かったフェマミーが命令したから。

アスを撃つたのは、彼の周りにいる強者を蹴散らし、円滑に物事を進めるため。

この町、学校を狙ったのは、技術提供を強制させるだけではなくいや、そもそもこちらが本命なのだろう。混乱に乗じてエリア・

フィーリッツを誘拐。それこそが、この騒乱のシナリオ。

(ふざけるな……!)

全てを理解した上で、彼は少年を守るとか少女を守るとかそういうものを一切関係無しに、我慢の限界を迎えていた。

(また同じ事を繰り返すつもりか、上の奴らは……!?)

何かを殴りつけたい衝動に駆られながら、歯を食いしばる。

(竜と組む素質があるからって、民間人を戦争に放り込もうとする国なのか、あそこはっ!)

「アス!!」

「っ!?!」

普段の彼からは決して聞こえるはずの無い、純粹な怒りのみを含んだ声。それは咆哮のようにも取れた。

「今すぐ降ろして……」

彼の懇願に、アスは信じられないといった風に見開くと、
『駄目です! 貴方だって傷を負ってるじゃ』

「いいから早く降ろせ!」

『っ!』

「ちよつと、どうしちゃったのよ!」

慌ててリフェウルも止めに入るが、彼は決まってアスを見続けるだけだ。

やがてアスも観念したように、徐々に徐々に、地面へと近付いてゆく。

「リフェウル・ハウ、彼を頼むよ」

「そんなの言われなくたって分かっているわよ」

「違うんだ。本当に彼が危ない。アクデイはエリア・フィーリンツを誘拐しようとしている」

「どういう……ことですか？」

突然、聞き捨てならないことを耳にしたエリアは、真っ直ぐカイフィールドを見つめる。

翼の動きに流される木の葉を抜けて地面に降りると、カイフィールドは続ける。

「アクデイの第九技術機関は、数年前から閉鎖している。中にいた人間が全員失踪しているんだ」

『カイフィールド!?』

殴りかかるような勢いで怒鳴り散らすアス。だがしかし、彼は真実を伝えることを止めようとはしなかった。余計な混乱無く話を理解してもらえるには、これしかなかったからだ。中途半端な情報はただ混乱しか生まない。それでもし逃げる事が出来なかつたら、今まで自分達は何をやってきたのだということだ。

「君は特殊な魔術を使えるね。オリジナルの、まず目にする事が無い四行の魔術文章。今は説明している時間がそんなに無いからこれだけ言っておく、君の両親はそれを君に伝えて、それから失踪している。アクデイも両親の居場所まではつかめなかつたんだろう、だから矛先が君に向いた。君には、ボクと同じような一種の才能がある」

「さい……のう?」

「それを説明している時間はない。さあ、早くここから逃げて。走って、できるだけ遠くへ!」

早く逃げると促すも、少年は「母さんと父さんが……」と呟きその場を離れようとしなない。少々乱暴だが、殴つても彼を逃がさな

ければならない。竜と組むということは、それだけ地獄を見ることになる。眼前の少年に、そんな酷なことはさせられない。

拳を作ると、カイフィールドは彼が大きな怪我をしないように手加減をして

「いい加減にして！」

「パアアアッ！」

「……………え？」

『貴女……………』

カイフィールドが殴ったわけではない。

真実を伝えてしまったカイフィールドを、アスが殴った訳でもない。

「リフェ……………ウル？」

彼女が、彼を殴ったのだ。

「とつとと逃げるの！ 今は自分の事だけを考えなさい！ 他のやつらなんか忘れて、生きることに執着しなさいよ！ 自分が狙われているってのに、なにやってんの！？」

がしつとエリアの腕を掴むと、とても女の子が出している力とは思えないほどの握力で、引っ張り、走る。

「リフェウル・ハウ！」

「……………なに？」

泣き出しそうな表情で、彼女は、今まで彼女達の命を守り続けた男を見詰める。

対するカイフィールドは、もうその表情には以前のような爽やかさは無く、静かな雰囲気纏っている。

「ボクみたいにはなるなど、彼が落ち着いたら言ってくれ」

「……………分かった」

そして少女は、また前を向く。だがすぐには立ち去ろうとはせず、俯き、葛藤しているような。肩をフルフルと震わせ、やがて振り絞るような一言。

「ありがとう……………守ってくれて」

「っ！？」

人が歩き、葉の擦れる音がする。気付いた時にはもう、二人の学生の姿は消えていた。

悔しい。

あのありがとくに、彼女は一体どんな気持ちを含めたのか。守る理由も見出せず、ただ闇雲に力を振るった過程で「守った」としても。その「守る」に何の意味があるのだろうか。

ボクは本当に、彼らを守っていたのだろうか。

「今度こそ、守ってみせる」

彼を、血の臭いが立ち込める戦場に近づけず、この騒乱から遠ざけることが「守りきる」こと条件ならば。自分はそれを、やっつけてみせる。

「アス、これで三回目だね」

「……やるんですか？」

裂けた右の翼を折りたたみ、ほぼ倒れているような状態でアスがいる。突き刺さっている、砕けた細かい電が痛々しく。本来、太陽の光にあたって輝きを放つ透明な結晶は赤く、本物の紅玉のようになっっていた。

「ほら、来ましたよ。やるなら、はやくやらないと」

左の翼を伸ばし、空中に浮いている無数の甲冑を指す。

血まみれの一匹と一人は、殺人の機械を前にして、微笑んだ。

躍起になっている訳ではない。おかしくなったとか、別にこの状況から逃避したい訳でも。

ただ何故か、笑みがその顔から消えることは無い。

「満身創痍でこの術を使うなんて……。下手したら、死ぬか」

「怖気……。づきましたか？」

「まさか」

カイフィルドは立ち上がり、倒すべき者を睨め付ける。

《我、神器の名の下に消失を始める》

この魔術に、文字は不要。竜と人の声は一つの言葉として残り、それは全く別の言葉となる。

《朱色の嗤い、真紅の憂い》

つまりそれは、消失文字。この世に書き記されることを拒まれた、誰も知らない文字。

《逆巻く焰で翼を包み》

消え失せた文字の欠片は集い、一組の僕に力を分け与える。

《堕ちた器の糧になろう》

シユルウツと羽織っていたロングコートを、草の上へ落とす。止血用の包帯も、動きにくいだけなので取っておく。傷口から血が垂れてきているが、それすらも無視する。

《この世の理、壊れる掟》

やらなければならぬ、ではなく、やってみせる。気持ちの変化が二者の思考をクリアにし、より強い決意を生んだ。

《五大と生死の創造者よ》

途中、アスの声だけが途切れる。それは力尽きたことを意味するのではなく、「力」を具現化させることにより存在しているアスが、力としてのみ存在していることを表す。

《業火、過去の変換を望む》

竜の翼からは、熱気が弾け飛ぶように放出。打ち振るえば大木を薙ぎ倒す尾から、蜃気楼に見間違われるような吐息を吐く頭まで。その全てが、燃え滾る炎に変わり、緑の地をそこだけ黒に染めていった。

七行文章。既存の上を行く四行文章の、さらにその上。消失の主へ送られた手紙言葉によって、力が譲渡される。

『カイフィルド・ランス、事情は理解して頂けましたか？ できれば貴方には無傷でいてもらいたい。その傷のことに付いても、我々は負い目を感じているのですよ』

上空の甲冑の内の一体が、回線をオープンにしてこちらへ声が聞こえるようにする。女性の、柔和な声音だが、どこか作り物めいていて好きにはなれなさそうだ。

『カイフィルド・ランス、もう一度だけ言い』もういい』

女性の声を遮って、聞き覚えのある男の声。甲冑の中のどれかに、アイマン・ヒューストンが居るのだ。

それだけでカイフィールドは、今にも暴れだしそうなくらいには理性が吹き飛んでいたが、それでも何とか抑える。

『よう、ランス。気分はどうだ？ 金属で体を抉られた感覚は？ ずっと見ていたぞ、お前が必死になっているところをな！』

「黙れ……」

『あの餓鬼はな、お前の思っている通り、消失文字の使い手だ！

これで二人目。お前と、餓鬼。まあ餓鬼の方は精神が不安定そうだから、ちよつと脳を弄くるけどなあ！』

「黙るんだ、アイマン」

こちらを挑発しているのは分かっている。それは、彼がこんな幼稚な口調を使っているという事が照明しているのだから。だが、それでも我慢ならない。少女の言葉が、脳に刷り込まれてしまった仕方が無い。「ありがとう」と、彼女は泣き出しそうな声音で言った。「守ってくれて」と、自分達がやったことを肯定してくれた。今、それを果たさなければ、何かを失う。守りきらなければ。こんなのでは十分ではないのだから。

だからカイフィールドは、力を使うことを躊躇わない。アスもそれに同意し、翼を壊してまで戦う。

『全てをぶつけましょう』

炎が、動く。

『全てをぶつけた上で、守りきったと、胸を張ってあの子達に会いに行きましょう』

炎になって形がなくなっても、彼女は彼女のままだ。

「行くぞ、アス」

「ええ、カイフィールド」

「舞え!!!」 『踊れ!!!』

重なつた命令に、アスの体長と同じくらいの大きさを保っていた

あの男、あの頭でも国の上の方に位置する人間でしたから』

「大丈夫よ、アイシャ」

幼女の口元を人差し指で押さえ、なぞり、黙らせる。

「だって私、強いんだもの」

彼女の居る部屋からは、狼煙を上げ炎を撒き散らすアルフィンの町が見えた。

第十二話 消失の主へ送る手紙（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。
かなり時間が空いてしまって、すみませんでした。

第十三話 祭日への最終参加者

アルフィンの町は、炎の拡大を促進させ、ただただ呑みこまれていく。

そこへ、ゴウツツ！ と新たな炎が生れた。ただそれは町を、建物を、人を、動物を焼く事は無く、町を蝕む忌まわしき火を押し返しているようにも見えた。

有機物によって燃焼している周りの炎とは明らかに違う、純粹な輝きを放つ焔。その中心に、カイフィールド・ランスが居る。

彼は走る。いや、走るといふよりも殆ど跳んでいるに等しかった。彼を取り巻く焔が時折、本当に小さな規模で爆発を起こし。カイフィールドはそれに後押しされるように大地を蹴ることで、十メートル近い距離を跳躍しながら進んでいた。

轟音が追いつく前に彼は大地を離れ、その後焔の爆発による余波 ほぼ爆風のレベル により舗装された道は次々と捲れ上がってゆく。脇で倒れている出店の中にも、少なからず彼が壊してしまった物があるはずだ。

『あまり飛ばしてはいけませんよ。怪我の事もありますが、本命とぶつかる前に余力を残しておかなければ』

彼の目的は、一人の少年を守る上で必要な過程である、ある女性を捕まえること。そのためにわざわざ戻ってきた訳だが、相手はどいう気なのか辺り一面火の海となっていたのだ。何故だか、正式に派遣されたアクデイの兵士はどこにも見当たらず、代わりに彼が見つけたのは、

「まだ追ってきてるか？」

『ええ。彼方が爆発まがいの方法を使つて移動をしているお陰でどうにか距離は開いています。見失つてはいないようです。まあ、こんな目立つ方法を一定の間隔で放っていたら嫌でも目に付きますけど……。まあ、あの兵器のスペックならおかしくはないでしょう』

彼のすぐ側にはアスが居る。尤も、あの体長十メートル台の巨大な竜が並行して飛んでいるわけではなく、魔術により焰という形に変化した状態で、だ。

彼女の言葉の通り、自分の背後から複数の殺気を感じられる。

そして目的の女性、フェマミー・アレイチエルドは集めた民間人をどこかへ追いやっているようで。どうやらここで決着を着けたいのか、それとも他に何か目的があるのか。あるとすればやはり思いつくのはあの少年のことで、しかし彼はここには居ない。なんの根拠も無いが、前者で間違いないようだ。

さてどうするかと悩んでいると、前方に建物が見えた。厳密に言葉で表すと、この奥には大通りが存在し、今カイフィールドが駆けているこの道は大通りへ抜けるための脇道のようなものだった。右へ行けば広場で、左に行けば学校がある。

なんの力の抑制も無く、先程までとんなら変わりの無い速度で脇道を抜けると、彼は舗装された道に片足を突っ込む。ガガガッ！と道を削りながらもしかし速度は変わらず、それどころか足が地面から離れてしまい、高速で側転しているような状態になってしまった。

前後左右が録に分らない状態で、カイフィールドはただ右手を横に突き出す。タイミングを誤らないよう、しっかりと見計らい、焰を集束させると濃密度のそれを解き放った。

ドンッ！ 一瞬の浮遊感の後に、ようやく自分の体が止まったのだと認識できた。一瞬でもタイミングを誤ればスピードを更に加速させるような状況だったが、結果オーライである。カイフィールドは特に気に留めることもなく、再び小規模の爆発で跳躍する。

『学校……ですか』

彼が選んだのは左の道である。場の広さから考えて、建築物の被害を最小で押さえるためだ。

「まずはフェマミーを見つける。空を飛んで空中からでもいいけど、この状態は第二魔力の消費が激しいからね。あまり無駄遣いはした

くない。屋上へ行くよ」

現在の彼の状態は、第一魔力と合成することなく純粋な第二魔力のみで魔術を扱う身だ。彼が使っている魔術はそういう類のもので、言ってみれば第一魔力を含んでいない分、余計に第二魔力が必要になってくる。体力の消費は予想以上に激しく、カイフィルドのコートは、過労による大量の汗を吸っていた。

それに見かねたアスは、

「私が元に戻りましょうか？」

「駄目だ、この状態は解けない。一度解けば五、六時間は元に戻れないんだぞ。この術は発動時が一番魔力を消費するから、その分の魔力が回復するのを待たないといけないのは知っているだろ？」

「しかし……」

アスはカイフィルドの脇腹を見ると　現在、実際に目は存在していないがそんな風に焰は動いた　そこには肉を抉られたような傷が見えた。本来ならば大量の血液が流れていなければおかしいほどの傷の深さなのだが、肝心の血液が辺りの道どころか傷口付近にも見られない。

「この術は術者の魔力を無差別に吸収して魔術に変換してしまうからね、血液中の微弱な魔力だって吸収しちゃう。あまりに深い傷を負っていると、仇になるのがネックだよ。」

まあそういう訳で、大変危険な状況にはあるけれど、術を解くのは却下だよ」

体内から流れる度に吸収されるようでは道に残るはずも無い。自分自身を蝕む魔術に内心皮肉めいた笑みを浮かべながら、しようがないかと自己完結する。

「カイフィルド　」

名を呼ぶ声に、一拍送れて反応する。

「余所見をしていると、不意を突かれますよ！」

「くっ!？」

小さな火球を使って、その勢いで軽く体をいなす。すると頬や髪

かすめて、金属製の何かが通り過ぎていった。

『まだです!』

焰からの注意に従い、右側面に集束していた焰を前面に押しやった。円盤に展開された焰は非常に密度が高く、それだけで地面を焦がす。がしかし、

バチイイツ!

「か はっ!?!」

焰を貫いた電気が彼の脇腹を、よりもよって傷口を撫でるような軌道で通り過ぎてゆく。血液は大量に噴出し、しかし瞬時に焰へと変わって彼を取り巻くそれはさらに大きくなる。

「あああああつっ!?!」

激痛が脳を叩き、絶叫としてその酷さを外へ伝える。

しかしのた打ち回る暇は無く、すぐに二発目が彼を襲う。

『後ろです!』

とつさに振り返ると、そこには最初に彼を串刺しにしようとした金属製の槍のような物が地面に刺さっていて、そこに先程の電気が帯電している。

(避雷針みたいなものか……? だとしたら!)

「せいかい」

突然の第三者の声に、意識を取られる。だが、それがいけなかった。

避雷針に帯電していたはずの電気が、吸い寄せられるようにカイフィルドの元へ、厳密に言うとその目の前の女性 フェマミー・アレイチエルドの元へ戻った。再び切り裂かれるような痛みにも、今度は意識まで遠のくような感覚まで訪れる。

フェマミー・アレイチエルド 金の髪を頭の後ろで全て纏め上げている女性。妖艶さを醸し出している体躯と、美貌を兼ね備えた理不尽なまでの完璧さ。服装はお世辞にもお洒落とはいえないが、簡素な格好が逆に彼女の体形を引き立たせていた。

「この術、私達の場合は攻撃方法が『直進』だからねえ。こうやっ

て避雷針を用意して、放出した電気を一瞬でも留めておく場所を用意しないと、適当な場所に当たって霧散しちやっつて、連続で攻撃できないのよ」

慣れ親しんだ友人にでも話すかのような口調で、彼女は電気を帯びながら会話を進める。

「とりあえず、同じ状態の人間とやるのは初めてだから、私としてはこの状況では勘弁なのよねえ」

「君が、始めたこと……だろう」

噛み付くような声音で、彼は起き上がる。意識が飛んでもおかしくないほどの激痛と、同じく意識が遠のいてもおかしくないほどの出血量だが、それでも彼は起き上がる。

『タフですね。お姉様、どうします？』

と、彼女の体を避雷針代わりに利用してその場に留まっていた電気が、アスと同じ様に喋りだした。

「君が彼女の……」

『ふふふ、他の竜を見るのは初めてというわけですか。アイシャは、その彼女が炎を基盤とした魔術を扱うように、雷を扱うんですよ』

幼女のような声。フェマミーを螺旋状に取り巻く雷は、いつでも愉快そうな声音だ。

「一応、私も無益な戦いは避けたいのよ。お姉さん、面倒なの大っ嫌い」

「その代わりにエリア・フィーリンツを差し出せと？」

「話が早い子好きよ」

うふふ、と妖艶に微笑む。しかし常に殺気が頬をピリピリと刺激して、気を緩めることを許させない。

『その要求を呑むとでも？』

『その要求を呑ませないとでも？』

熱波と閃光が入り混じり、殺気と言つ殺気が当たり一面に立ち込める。

「ということだ。ボクの相棒は好戦的で困る」

「交渉決裂、ね」
「バンッ！」

カイフィールドが大地を蹴った音。同時に、フェマミーは先程の避雷針と同じ物を背後に四つ出現させ、魔術で浮かせていた。

「今度は避けられるかしら？」

彼女の背後の避雷針がこちらへ飛んでくると同時、カイフィールドは横へ飛びのく。火球二つで、牽制しながら距離を置くことを考えたのだ。

「アイシャ」

雷が地面を叩き、捲れ上がったそれは一枚の壁になった。だが火球を防ぐには硬度が足りる訳も無く、衝突した瞬間にあっさりと木端微塵となった。だが、
「いない！？」

壁の向こうにいたはずの彼女が消えている。考えるよりも早く体を動かし、自分から半径三メートルほどを焼き払う。

舗装されている道よりも、剥き出しの大地の面積の方が大きくなっている。自分の意識によって焼き尽くす対象を選べる術だが、相手の位置が分かっている状態ではなりふり構ってられない。溶け始めた建物の壁が、ボトボトと新たな火種になっているのも無視だ。

対象とされれば骨も残さない焔の渦を展開しているカイフィールドは、それでも不安を拭いきれなかった。

（どこだ……？ どこにいる！？）

「渦の外には認識できません！」

焔から伝わる焦り。莫大な力を保持しているはずのこの状態でも、アスとカイフィールドは焦燥に駆られる。

ヒュン。

視界の端。辛うじて捉えたのは、カイフィールドの右側、渦の外を通過する避雷針。

「っ！？」

アスを使つて爆発を起こし、ほぼ飛ばされるような感じで後ろへ。刹那、眼前を一閃する雷が、焰を貫通して通り過ぎる。その行き先は、大通りに建つ一軒の家　の前へ現れた、二本目の避雷針だった。

そして背後には、最初に彼を襲つた避雷針が地面に刺さつたままだ。

(ま……ずっ！)

『もう遅いですよ！』

まずアイシャは二本目の避雷針へ到達すると、一瞬でカイフィルドの後ろにある避雷針へのラインを　備え、狙いを定め、直進する。道も壁も建物すらも吹き飛ばしてしまいそうな速度で、アイシャは彼の心臓までの短距離走を走破しようと、雷としての自身の形を、ばらけた電気の塊から一つの槍のような形態に変化させた。

カイフィルドはこれを避けられない。空中に浮いている状態ではどう足掻いても雷の軌道からは逃れられないし、なにしろ速度が尋常ではなかった。

十メートル以上吹き飛んでいるが、それでも雷が自分の体を貫くのに一秒も満たない。

「く……っ！　おおおおおっつー！」

カイフィルドは焰を使つて、真下の地面を砕く。土や壁の残骸の他に、鉄パイプなどの様々な金属製品が舞った。

『なあ……！？』

バチイイツー！　とそれらの金属にアイシャがぶつかる。当然、雷は一瞬の間だけ金属に留まり、それを彼は見逃さなかった。

地面を砕き続けた焰を抜き、鞭のように不安定な軌道を見せるそれを力で捻じ伏せて眼前の金属群を叩く。

「帯電状態で叩けば留まる場所が無くなる。そうすれば、霧散するんだろっ！」

一瞬で金属が溶解すると、耳を劈くような弾ける音が広がった。勢いが消え道を転がりながらそちらを見ると、そこにはさっきのよ

うな雷の塊は無く、本当に小さな電気の一部が残っているだけだ
た。

「あら、以外にやるわね。少なくともアイマンよりは賢いわ。

ああ、彼死んだんだっけ？」

残存する電気の、更にその数十メートル奥に、フェマミーが立っ
ている。相変わらずの、妖艶な笑みを浮かべて。

「どこまで把握している？」

『なーに、簡単なことです。デインに内蔵されているカメラに侵入
して、一部始終見させてもらいました。アイシャのこの状態は、か
なーり便利なんですよ？』

「まあそういう訳。割と最初っから傍観者だったわよ、私」

「何故、彼の居る場所がすぐに分かった？」

「言っただしょ、最初っから見えていたって。」

あの子が四行文章を使って貴方と遭遇した時から、私は見ていた
わ。その時の魔力さえ採取できれば、元を辿るなんて造作も無いこ
とよ。」

何を今更といったような態度で、説明することに対してやや嫌気
がさしたように肩を竦める。

相手はどうにも緊張感に欠けた会話や態度で接してくるが、カイ
フィルドとアスはそれどころではない。敵の攻撃を避けるのにここ
まで必死になったのは、初めてだった。

涼しい顔をして燃える町に立つ女性に対して、彼は恐怖を抱く。
ねっとりと絡みつく冷や汗が風に曝される度に、どうしようもない
寒気が全身を覆う。

「さあ、どうせこちらの要求に従う気は無いのでしょ？ 時間が惜
しいから、さっさとやっちゃいましょう？」

その言葉が、戦闘再開の合図となった。

「アス、焰の半分をボクに。君はアイシャを相手にしてくれ！ 彼
女達が一緒に居ると、どうにも近づけない！」

『分かりました！』

互いに最低限必要な連絡を取ると、カイフィールドは地上を走り、アスは焰の塊となって上空から進む。

『ちよこざいな』

アイシャは一点集中の必殺の一撃を諦め、広範囲に雷を放出する。だが広範囲への放出と力の加減にムラがあるためか、今度は焰を前方に押しやるだけでカイフィールドは突破する。アスも同様に雷の幕を突き破り、アイシャとの戦闘に突入していた。

「アレイチエルド！」

叫ぶよりも早く、焰を纏わせた右腕で振りかかる。それは彼女の皮膚を焼くどころか衣服すらも傷付けることは出来ず空振り。

「あら、はずれよ？」

「まだだ！」

振り切った腕を無理に動かそうとはせず、手の平だけを広げて地面に向ける。そこへ焰を集束させ、彼は爆発を起こした。上半身が勢いよく反れて、カイフィールドは無理に抵抗せずそのまま流される。そして脚部に力を込め、ボールを蹴るように振り抜いた。

突然サマーソルトを放ったカイフィールドに初めは戸惑いを隠せず、出会った時から常に浮かべていた笑みすらも消していたフェマミーはしかし、ニヤリと頬を最大限に緩め「面白い」と呟き、あっさりと避けてしまう。

「面白いわ、カイフィールド・ランス！」

一人高揚するフェマミーを無視し、視界の上下が元に戻った途端、彼は腕の焰を全て解き放った。

「ここまで喰らい付くなんて、貴方凄いわ」

彼女もまた、自身に留めていた電気を放出。カイフィールドが放った一撃を一瞥すると、一瞬で、攻撃を当てる角度、量、タイミングを掴んだ。

「お姉さんからのプレゼントよ！」

一点集中されていた雷は腕が振るわれると同時に筒状に伸び始め、槍になる。

一秒にも満たないわずかな瞬間にまったく別の力同士がぶつかる。雷が焰の中心を貫き、進む。焰は中心を貫かれながらも、輪のように広がって進んだ。

カイフィルドは最初からこの展開を予期していたのか、簡単に雷を避ける。フェマミーは、焰の輪を潜るようにはしてやりすぎず。

すると、まるで録画した映像をまた見ているみたいに、ほぼ先程と同じ挙動で彼はフェマミーに肉薄した。

「避雷針が使えない今なら！」

「何を言っているの？ 確かに三つは向こうだけど、残りの二つは

」

彼女が魔術で避雷針を呼び寄せようとした時、確かな違和感が存在した。

（魔術の発動が、感じられない？ いえ、そもそも魔力が注げないのかしら？）

「さっきの一撃で、悪いけど残り二本は溶かしてもらったよ！」

今更、残りの避雷針を呼んだところで遅い。絶対にこの一撃は決まると確信したカイフィルドは拳を握り、それに、今まで誰かにぶつけたくて仕様が無かった怒りをのせる。

だが、そこで気付いた。

「忘れてないかしら？」

彼女の表情が、一切崩れていないことを。

「私は、一度でも 一時でも『ウイクジブスの元帥の席に最も近いと言われた人間』なのよ？」

そしてその笑みが、今までで一番歓喜に満ち溢れていたことを。

ベコキツ！！ と、苦痛の音が広がった。

少し前までは、雲の存在がどこにも見当たらない、完璧な青空。

しかし今では立ち込める煙のせいで拝めるのは灰色。風もまた、先

程まで人に快適な空間を提供する、決して吹き荒ぶことのない心地の良いものだったが、今や吸い込めば肺を焼いてしまいそんな熱風となつて町を覆っている。

エリアは、自分の部屋に居た。

尤も、ユニヤリフェウル 余談だが、彼女もまた両親の都合で、エリアの後に居候として彼女の家に住んでいる と共に時間を過ごしていたあの家の部屋ではなく、正真正銘、エリアが両親と住んでいた、現在は魔術の練習などに使っているあの家の部屋だ。

(なんで、町が燃えているんだろ……?)

“ 違うんだ。本当に彼が危ない。アクディはエリア・フィーリントを誘拐しようとしている ”

(そうか。町があんな騒ぎになつたのも、目の前のこれも、全部僕が原因なのか)

彼の足元には、短時間で必要な物を詰め込んだバッグが置いてある。何回か泊りがけでの練習もやっていたので、最低限の生活必需品は揃っていた。食料も、保存の利くものならかなりの量だ。

(なのに……)

「なんで……」

ポツリと、力の無い疑問が口から漏れた。

窓辺に立ち尽くしていると、不意に後ろからドアノブの回る音が、リフェウルもまた、荷物の詰め込みすぎで張り裂けそうなバッグを持っていった。

エリアは彼女の方も見ずに、浮かんでは消える戸惑いや疑問に意識を向けていた。

「なのになんで、僕はこの町から逃げるんだらう」

別に戦いたいなどと言うつもりは毛頭無い。目の前の現実を受けきれずに混乱に陥っていた人間に、何が出来るというのだ。それを分かっていても尚、彼は疑問を抱き続けていた。

「用意、出来たよ……」

寄り添うこともなく、励ますわけでもなく、そう呟く。振り絞る

ように出したその声は、しかし彼の耳には届かない。ただ、自分達が今から離れようとしている町を見詰めていた。

「……行こう。後はアイツがどうにかしてくれるから、きつと大丈夫よ」

「それだけじゃないんだ」

「……え？」

その言葉に反応した訳ではない。内容は決してとつぴなものでもないし、声を荒らげて言った訳でもない。振り返った少年の頬が、僅かだが濡れていた。

「エリイ……」

「別に自分の命を軽く見ているつもりは無いよ。……でも、何で血が流れるのさ。何で僕以外の人が傷を負うのさ。そして何で、僕だけが無事なのさ」

「それは……！」

「会って間もない人間のためにあそこまでしたカイフィールドさんやアスさんを見て、血や肉を見て。それでもリフェウルは、何も感じなかったの?!」

「……」

「感じなかったの」

「分かってるわよ!」

「っ!?!」

怒号にも似通った声音。泣き叫ぶように、懇願するように。複数の感情が入り混じったそれは、彼の心に強く響いた。

「アタシだって何かしたいわよ! アイツはム力つくけど、アタシやエリイを守ったもの。アスだってそうよ、翼があんな風になってまで飛ぼうとしたじゃない! だからって何が出来るの!?! のこと出ていって、アンタは捕まってアタシは殺されておしまいじゃない!」

リフェウル自身、嫌気が差してきていた。こんな稚拙で中身の無い、自分への言い訳だけが詰まった言葉なんて、言いたくない。

それでも、恐怖が上回った。ここから逃げたいと思う気持ちが、脳に響いて、こびり付いて、しがみ付いていた。

「アタシはもう、あの国と関わるのは嫌なのよ!」

叫び、願ひ、訴え、泣く。負の感情が彼女を押しつぶす。

(そうか。やっぱり、そうだよね)

それを見て、エリアは少し安心する。泣き叫ぶことも正しいんだと、教えられた気分だった。

親に教えられた、流してもいい涙と、流してはいけない涙。

(流してはいけない涙を、流させちゃったな)

「ごめんね、リフェウル」

小さな部屋の中で、少女は目を濡らしながら俯いた顔を上げる。

そこには泣き笑いのような表情を浮かべた少年が、顔を精一杯に歪めて、この世で一番歪な笑顔を作り出していた。

少年の言葉には、二つの意味が込められている。

部屋の中にある両親の写真を一瞥し、さらに窓の外に広がる、火に覆われた町も見やる。

頭の中の感情は、綺麗に纏まった。

不思議な子。それでいいの？

突然、頭に声が響いた。

恐怖が幻聴みたいになつて止めようとしているのかな、などと見当違いの答えを導き出したエリアは、大して気にしていない様子だった。

(だって、ここは僕の町だから)

(それに、父さんと母さんの帰る所が、無くなっちゃうじゃないか。リフェウルの帰る所が、無くなっちゃうじゃないか)

それだけが、彼方の理由ですか？

(違うよ)

エリアは即答だった。頭に響く声に、すぐさまその答えを返したのだ。

なら、なんですか？

しばらく、頭に声が響かなくなる。大して問題は無かったが、急に聞こえなくなるとそれはそれで気味が悪いものである。

しばらく経つと、また、

ふっ。面白い答えですね。今までの人の中には無かった答えです

(今までの人?)

今度は、なにやら愉快そうな声音で響いた。大して注意していなかったため聞き逃していたが、なにやら女性のような声。それも、聞き覚えのある声だったのが、エリアには引っ掛かる。

「じゃあ、行ってくるね」

それでも時間は止まってくれない。最優先事項を思い出した彼は、あの、脳に響く声など次の瞬間には忘れ去り、取るべき行動に出た。
「っ！ エリイ！ 駄目だって言ってるでしょ、これは遊びじゃないのよ!？」

「うん。分かってる」

「分かかってなんかない！ アンタは分かかってなんか無い！」

「いや、分かってるよ」

「っ!？」

少年の頑なな姿勢に、リフェウルは彼の胸倉を掴んでいまにも殴りかかりそうな威圧感で応じる。

それでもエリアは一切動じず、ただ自分の中で導き出した自問への自答に従うだけだ。

「この町は、僕の町だから」

「……………」

「この町は、君の町だから」

「……………」

「戦おうなんて思ってないから安心して。ただ、どうしても、あの町に人が残っていると思うと心配でしょうがないんだ。リフェウル

だって、ユニおばさんが心配だろ？　だから、行ってくるよ」

理由は、それだけで構わない。自分が動ける理由があるのなら、それはなんでも構わないからだ。臆病で泣き虫な自分が動けるのなら、それがどんな理由であっても、本人にとってはその気持ち全てだからだ。

強者には強者の、人の救い方がある。それは力を振るうことや、守ることにある。

なら、弱者にも弱者の、人の救い方があるのではないか。弱者にだって、守ろうと動くことは構わないはずだ。

どれだけの恐怖が脳を埋め尽くしても、気持ちは絶対に揺るがない自信がある。エリアはリフェウルに、ここから離れるよう促すと自分の部屋を抜け、家を飛び出し、そして　そして少年は、燃え盛る町に飛び込むという答えを胸に、駆け出した。

「……待ちな……さいよ」

小さな小さな彼女の声が、遠ざかることによってさらに小さく。

「待ちなさいよ！」

今度こそ、彼女の声は少年には届かなかった。

「うごほっ！　ぐふおっほっ！？……。……怪物か、あの女」

ひたすらに咽る彼は、最早、激痛という言葉の許容量に収まり切らないほどの痛みを全身に感じながら、もう言葉を発するのすら命がけの状況に陥っていた。

「あら、怪物だなんて失礼ね」

「うわ、ホント絶望的」

「あらあら、そんな風にあからさまにがっかりされると……。お姉さん、傷心ものだわ」

崩れかけた遺跡のような状態になっている民家。そこに倒れているカイフィールドの側に、妖艶な笑みを浮かべた女性、フェマミーが

降り立った。

「さあ、もつとお遊びしましょ　と、言いたいところだけど。あら、あの子、逃げなかったのね。良い子ねえ、慈善活動ファイト中！　つてところかしら」

「何……を、言つて……いる？」

時折訪れる、意識を根こそぎ奪ってしまいそうな激痛に詰まりながらも、カイフィールドはなんとか言葉を紡ぐ。

「エリア・フィーリントツが戻ったのよ。　この町にね」

予想外の相手の動きに、目を丸くしながらもどこか楽しそうな表情のフェマミーは、あっさりと敵である彼に情報をばらす。それを聞いた彼は当然驚き、戸惑い、しかしすぐに彼の元へ行こうと足力を込める。

と、

『くうううつつ！？』

『アハハ、よつわいですねえ！！』

鼓膜を突き破るほどの音を奏でる電撃が鳴り響き、敵と認識すればありとあらゆる万物を溶かす焔が、カイフィールドのほんの数センチ隣に落ちた。

「アス！？」

『すみ……ません。物理的な攻撃は効きませんが、どうやら魔力同士のぶつかりあいになると、単純な力比べになってしまつようです』
辺りに散らばるように霧散していた焔は、次第に彼を取り巻くように集まりだす。

「さあ、悪いけど彼方達とは遊ぶ暇が無くなつちやっただから、ちょっとお留守番しててね？」

アイシャ、と再び全身に雷を纏うと、いつの間にか呼び戻していた避雷針二本と、どこかに落ちていたのだらう鉄パイプを、カイフィールドを囲むように二本、頭上に一本と線で繋げば三角錐になるような配置で固定させる。

「何を……？」

「お姉さんの、マジックショウ！」

そんなふざけた掛け声と共に、避雷針や鉄パイプが雷を帯び始め、そしてその強力なエネルギーを共有しはじめた。

「結果みたいなものよ。触れれば、まあ普通の人なら即死。壊せば、これも同じく普通の人なら、蓄えられた力が暴走して即死。お姉さんが帰ってくるまで、ちゃあんとお留守番、よろしくね」

雷で作られた三角錐は、高密度の雷の結晶。触れればたちまち絶命してしまう拘束具を前に、カイフィールドは何もすることが出来ないのだ。己の無力感に、ただ怒りと言う感情だけが先走る。

「行くわよ、アイシャ」

『はい、お姉様』

簡素な格好をした間の抜けた言動ばかりする、しかしカイフィールド自身が認める最強の魔術師は、この町のどこかを奔走する少年を追って自らも動き出した。

「くそう……！」

強く、強く、先の尖った木片があるにも拘らず彼は拳を地面に打ちつけた。

「……………くそう！」

本当の本当にもう、あまり時間は残されていない。

第十三話 祭日への最終参加者（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。慣れない戦闘シーンばかりだったので、どこがおかしなところがあるかもしれませんが。

第十四話 弱者の意地

走る事を止めれば、それは死に直結する。

抗うことを止めれば、それは死に自ら進むことを意味する。

エリアは度重なるアクシデントにより、本来彼のような一般人が理解し得るはずのない直感をその身に宿し、しかし皮肉にもその直感が彼の体を突き動かすことで、炎に包まれたアルフィンの町で未だ無傷でいることができていた。

ただそれも、長くは保てない。いずれあの甲冑が自分を見つけ出し、襲ってくるだろう。彼は、リフェウルとの二人しか知らない、道と呼ぶことの出来ない狭いコンクリートの空洞を通ったり、建物の中に身を屈めて辺りを探索しながら、確実に広場へと足を進めていった。

（あそこには、たしか沢山の人が集められていたはず。まさか騒動が起こった方には誘導しないだろうから、広場の奥に進んでいけば会えるかな……）

この状況の割りには正しい判断を下した少年は、何故か捲れ上がっている、本来は舗装されていて綺麗なはずの道を、その脇に転がっている建物や看板などの残骸などを使い身を隠しながら進む。

記念日には様々な種類の出店が軒を連ねるため、それこそ飲食店のようでありふれた物を売っている店では「いかにアピールするか」が重要になってくる。ほぼ必然的に宣伝用の看板などは大きくなっていき、それは身を隠すのには打ってつけたのだ。

やがてエリアは、左右二つに道が別れている大通りに出ると、右へ曲がった。あの「不自然に捲れ上がっていた道」は左に続いていて、彼の眼前に広がるのは舗装された、少なくとも今までの通りよりはよっぽど綺麗で整った道だ。

が、そんなことなど関係ない。全く走るスピードを緩めずに、今度は隠れる場所がどこにも無いのでただただ全速力で町を駆け巡っ

ていっただけだ。

「……はあ、はあ　っ!？」

予想外の光景に、思わず咽返し息を吐き出しそうになる。だが彼の肺は度重なる激しい運動で酸素をろくに取り込むことも出来ない。希少なそれを取り逃がすまいと、肺はギリギリで排出行為を押し留まった。

(あの甲冑が広場に。それも数は三つ……距離は二十メートルぐらい)

普通に考えれば、何の力も持たない十六歳の少年が、一国の最新式殺人兵器を三つも相手にすることなど出来るはずが無い。

《束縛嫌う翼を羽ばたかせよう》

だが、彼には当てはまらないことが三つあった。一つが、彼が魔術師であるということ。

《その色白銀にして、万物を抱擁する空を象る》

そして二つ目は、彼の扱う魔術が通常とはかなりの度合いで異なるということ。

《紡がれた言葉達よ》

そして最後に、彼はそういった危険を全て覚悟でここまで歩んできたということだ。

《悲しみに暮れた者たちへの贈り物を》

第一魔力という波を第二魔力で覆い、固め、押し、纏め上げる。

一見単純そうだが複雑な力加減が必要とされる魔術完成までの過程が、不思議なほど簡単に終えられてゆく。

二箇所を結ぶ異質な点が眼前に現れ、もう一つは一体の甲冑の前へ配置される。するとエリアは、明らかに百グラムをオーバーする石を掴んだ。

(百グラムの制限を守っていても仕方が無い)

投擲のモーションで、彼は大きく振りかぶった。なんの音も立てずに隠密に行動に移すのが理想的だが、しかしこの意味ある一発には怒りや悲しみなどを込めなければならぬと、エリアは感じ取っ

ただ。

手元から離れた石は、導かれるように点へと吸い込まれる。それは一定の距離まで縮めると、突如として存在を消し　　が、すぐに何かの弾ける音と共に現れる。

エリアの使う魔術は、空間呼応魔術だ。これは線移動と点移動の特性を抽出し凝縮したような魔術であり、質量オーバーで点が壊れた場合には線移動という形をとる、二段式の魔術。

この魔術を、彼は「質量オーバーせずに成功させる」方法と、「質量オーバーにより魔力が乱れ最後まで保てない」という方法しか経験したことが無い。これはつまり、その他の可能性に気付くための要因が何一つ無かったということ。

互いに繋がっている二つの点は、自分達が存在する空間とは別種の空間である。入り口だけがポツンと存在し、その中に入ったものは別種の空間の道を通り出口へ抜ける。それが、エリアたちの存在する空間では一瞬という時間で認識されているのだ。

その、別種の空間にしか存在しない『速度』が、こちらの空間の線移動に適用されたらどうなるだろうか。質量オーバーにより手綱の取れない状態となった魔術を、それでもなんとか操り、最後まで成し遂げた時、その可能性は十分にあるのだ。

彼が学校の屋上で魔術を使いバケツを動かそうとした時、失敗してそれで終わりだったはずのバケツは、決して速くない速度ながらも真っ直ぐに動いていたのだ。

では、その点移動から線移動への変化の時に、自爆をしなかったら。移動方法の変換作業に成功していたなら。

一体この石はどれほどの、本来存在しないはずの速度を叩き出すのだろうか。

点移動というものに速度が存在しない空間で無理矢理にそれを当てはめた時、この空間はどういった動きでそれを現してくれるのだろうか。

(……………行け！)

心の中でそう叫ぶも、魔術は崩壊し石はカランと重力に従って落ちる。

それでもエリアは、一から作業を繰り返して、もう一度石を投げ放つ。

(……行け！)

カラン。

(行け！)

カラン。

「……………行け、よ……………」

力なく呟いたそれは、轟々と燃え盛る炎と熱波によって掻き消される。

だが、探索する音域の幅を狭めて特定の人物の声のみに反応するよう設定を施せば、半径二、三キロほどなら容易に音を拾える Dein。そして現在、その特定の人物に登録されている声は、誘拐を命令されているエリア・フリーリンツのものだった。

甲冑たちは彼の方へ首を動かし、そして発見してしまう。生憎、散弾銃しか所持していなかった甲冑たちは、下手に大きな傷を負わせて失血死させてはならないと判断し、公式文章から魔術ホームを選択する。

それを見たエリアも黙っているわけが無く、先程と同じ作業をしながら甲冑たちとの距離を詰めていく。広場には出店があるので、少しぐらいなら魔術を凌げると判断したのだ。

走りながら、質量オーバーにより不安定な魔力を、内側からも外側からも補強する。時に魔力を増やして覆い、時に不要だと判断した魔力は削ぎ落とす。

「？」

と、急に、何の脈絡も無く唐突に魔力が安定した。一か八か、その可能性に賭けたエリアは安定したそれに石を投げ込んだ。

先程と同じ、消えると現れる。ただ以前と違うのは、エリア自身が石の存在を認識できなかったことだった。認識できないほど

の速度で、出現すると同時に移動を開始したのだ。

ありえないことを無理矢理押し付けられた石が、それに耐え切れず粉々に砕ける。しかしそれは見方を変えると、無数の石の破片が相手の体を貫くことを意味し、カイフィルドでも溶かすことしか出来なかつた装甲に、いとも簡単に亀裂を生み出した。

足や胴を貫かれ、あまりの激痛のためか意識を失い、一体が地面に倒れた。

側に居た残りの二体は最初こそ戸惑ったが、すぐに自分達がエリアを捕獲しようと命令を受けていることを思い出し、相手を昏倒させようと迷わず魔術を放つ。

「っ！」

敵を倒したことによる達成感に浸ることもなく、エリアはその場を離れる。追うように爆風や木材の破片などが彼の背中を叩き続けるが、それでも足を止めることだけはしない。自分から命を捨てるようなことだけは、しないのだ。

広場の端に停まっていた荷車に滑りこみ、次の魔術の準備を。魔力だけは先に作っておいたので、後は文章を紡ぐだけだ。と。

ゴンツ！！

「あ がっ!?!」

棍棒で背中を叩かれたような衝撃に、体中の力が抜け落ちてゆく。呼吸は完全に止まり、エリアの体は酸素を求めてじたばたとのた打ち回る。荷車を貫いた魔術は、彼の体に鈍重な痛みをどの箇所にも平等に与えた。

それでも彼は、無意識の内に魔術を完成させ、その手綱を放さずにいた。周りにあった鉄パイプを握ると、創り出した点に突き出した。

鉄パイプは存在するはずの無い速度を身に付けると、あまりの速度に棒状からただの球体に拉ひきちげてしまう。

今度はエリア自身も微かにだが認識できた。真っ直ぐに進む鉄球が甲冑の腹部にめり込み、装甲を奥へ奥へと強引に押し、電気系統

の配線や特殊素材の合金などが外側へ押しやられている。とそこで、最後の一体が動き出す。

《跪け》

流石に二人も味方が倒れてしまえば危機感というものが生れるのか、鞭の様に撓る黒い煙のような物が甲冑の手に現れる。エリアは慌てて飛び退こうとするが、それは素早く足に巻き付き、彼を宙に放った。軽く十メートルは越しており、このまま甲冑が何もしなくても、エリアは体中の骨を折って動けなくなってしまうだろう。最悪、死亡の可能性もある。

だが甲冑に下っているのは彼を捕獲することであり、殺すことではない。一旦気絶させてから回収しようと、捕獲用の昏倒魔術を起動させ放つ。

(ま……ずいつ!?)

身を振って術の軌道から逃れようとするが、空中と地上では体の動かし方が全く違う。どこをどう動かせば良いのかも分からない。そしてそもそもこのまま落ちたところで待っているのは激痛と死なのだ、どちらにしろ、もうエリアにこの状況を打破するような策は何一つ残っていないかった。

「……ただ……!!」

まだエリアには、地面を離れる寸前に掴み取った石が残っていた。どっちにしても助からないなら、せめてこいつを倒してから。そう覚悟を固めて発動した魔術に全てを込め、石を手放す。

だが、相手の魔術の方がやはり速かった。魔術はちゃんとした形で終わらねければ効果は途中で途切れてしまう。石が点に消え現れるまでに彼が意識を失ってしまえば、石はただの石でしかなくなってしまうのだ。そのことを分かっていた甲冑は、分厚い装甲の内側ニヤリと歪な笑みを浮かべ、その光景を最後まで見届けるつもりだった。

魔術の弾は、次の瞬間にはあの少年に当たるだろう。二体のディンを倒したのは相当の事だが、現実はその甘くない。そんなこ

とを考えながらやがて落ちてくる人間を回収しようとしていた最後のデインは、そして絶句する。

エリアもまた、似たような心境だった。

「なに……これ……」

自分は空間を作り出し、それを応用した攻撃方法だけに意識を集中していた。相手だって、使っていた魔術は今まさにそこに存在していた弾だけだろう。

なのに。

(この壁は?)

彼の眼前には、凝視しなければ視認することすら出来ない透明な壁が展開されていた。それが突如として出現し、弾を簡単に弾き返したのだ。甲冑からは、恐らく自分が放った魔術がいきなり消えたと認識しているはずだ。訳の分からない現象に、この場の二人は完全に思考回路が止まった。

「あ……!!」

だが、確実に時は流れる。

エリアの放った魔術　より厳密には魔術により速度と言う莫大な力を得た石が、相手に当たったのだ。なにはともあれ、ようやく緊張感から解放され、安堵し、胸を撫で下ろしていると、しかし一つの重大なことに気付いてしまう。

ヒュウ　ッ！　と、胃の中のモノが全て食道を逆流してきてし

まいそうな、臓器が不安定になる感覚。

「うわあああああああああああつ!?!」

三百六十度、上下左右ありとあらゆる方向に視界がブレ、一瞬で地面までの距離感を逃してしまう。もう、いつ地面に落ちるのか以前に、自分がどういふ体勢なのかも理解できないような混乱状態だった。

そして彼は、やがて訪れるのであろう激痛に覚悟し目を瞑る。

瞬間、ポフツと間の抜けた音が耳に。次に何かが裂ける音と崩れるような音が連鎖し、最後によりやく彼が覚悟していた痛みが、

しかしそこまで酷くない程度のそれが届いた。

エリアは、飲食店の出店が雨に濡れないように、店主達が張ったのである。雨避けの布に着地したのだ。だが布は裂けてしまい、結果店の中に着地。店内は人間が上から降ってきたことにより調理器具が飛び散り、エリアの体に降り注いでいた。

「いつ……痛う……」

頭上の調理器具を押しつけ、お菓子の店なのだろう妙に甘ったるい匂いが気になりながらも、自信の体にどこも異常がないか確認する。

そもそも十メートル上から地面に落ちるはずだったことを考えたらましか、と彼は改めて今度こそ安堵する。慣れない運動、それも極度の緊張感での激しいそれにプルプルと震える足に、エリアは苦笑するしかなかった。

（それにしても……）

しばらく休むことに決めた少年は、ふと先程の一瞬の出来事を思い返す。

突如として現れ、結果として自分の身を守った透明の壁。なんのために出現し、なにを目的としているのか。状況からあれが魔術であることしか分かっていない彼は、その程度の疑問しか浮かべることが出来なかった。

何故、自分の命を守ったのか。

だがエリアはあまりその事に感じては深く考えないようにした。そもそも自分は、おばさんが安全かどうかを確認するためにここまで来たのであって、そう考えると今回の謎の事象は瑣末、瑣事ではない。

一旦考える事を止めると、意外にもどんどん興味は薄れていった。「さて、ここからどうしようかな……」

衣服に付いた埃などの汚れを適当に掃うと、少しは筋肉の震えが収まった足を動かす。あまり音を立てないように店を出ると、エリアは再び、推測で導き出した場所へと歩を進めていく。

煙から垣間見える太陽の光は、西側から町を照らしていた。

彼は民家にいた。

ただ、人が住んでいたと分かる生活感溢れるような場所ではなく、壁も天井も崩れ落ちた廃屋よりも酷い建物だった。

そこで、出血が止まった脇腹を庇うようになるべく負担をかけないよう、カイフィルドは壁に体を預けていた。

彼の側には、まるで病人に寄り添うような形で焔が煌々としていく。

「まだ痛みますか？」

「ああ、大丈夫。心配しないで。」

それよりも、この術の欠点らしきものは見つけれられたかい？」

「いえ、残念ながらこれといって確実な弱点は見当たりませんね。唯一、破壊できる可能性があるとするれば、力の中継点のようなものである四つの金属、それもフェマミーが作った避雷針ではなくこの鉄パイプの部分でしょうか。だけどそれをすれば」

「ただでは済まないだろうね」

「ええ……」

アスはそれだけ言うともた、現在自分たちが閉じ込められている魔術の結界を調べ始めた。

カイフィルドはその間に、第二魔力を養い出血多量により崩した体調を整えることにしている。いざここを脱出する方法が見つかったても、先に進んだフェマミーを追いかけられるだけの余力が無ければ話にならないとアスに諭されたのだ。

三角錐の中を焔が飛び回る中、彼はただ枯れた花のように頭を垂れていた。

成す術も無くこんな所へ閉じ込められてしまった自分に、怒りよりも呆れの方が上回っていた。

(ボクは何やってんだろうな……)

勝手に知って、勝手に首を突っ込んで、勝手に守るとか言って、勝手に戦って、勝手に負けて。ボクは、なんのためにここへやってきたんだろ。

どれだけの時間が経ったのだろうか。西の空に太陽が沈もうとしているのを見て、悔しさが募る。

瓦礫の欠片を掴むと、感情に任せてそれを眼前の雷で形作られた壁へと放る。バチイッ！ と想像以上に激しい音を響かせ、瓦礫は跡形も無く消え去る。塵すらも残させないその障壁は、恐らく彼の魔術でも簡単にはいかないはずだ。

「ねえ、アス……」

現実を突きつけられたような気がしてならなかったカイフィルドは、逃げるように誰かと会話をすることを求めた。

「はい、なんですか？」

「ボク達は、首を突っ込まずにいた方が良かったのかな？」

「……………」

「ボク達がここで何も行動に出なければ、この町はここまでの被害を受けずに、それこそエリア君だって危険な目に合わなかったかもしれない。ボクがどうにかすれば、少なくともアクデイに居る内は絶対に安全なもの。一応、何不自由ない生活は送れる。だから……………」

「本気で言っているのですか？」

「……………」

「貴方は何か勘違いをしています」

「そんなことはない……………」

精一杯の力を込めた言葉は、あっさりと否定の言葉に屈してしまっ

た。『いいえ。この際だから言っておきますが、貴方のその性格、治したほうが良いですよ。鬱陶しくてたまりません』

「なっ……………」

『うじうじといつまでもつまらない自嘲ばかり言って。何ですか？』

同情して欲しいんですか？ 気持ち悪くてしょうがないです』
「君はなに怒っているんだよ！」

謂れない中傷だと、カイフィールドは柄にもなく怒りをぶちまけた。

が、それに対してアスも、不満が募り募っていたのか、予想以上の怒気を孕んだ声音で応じる。

『いいですか。確かに貴方や私が変な気を起こさなければ、この街は少なくとも学校の土地が荒れるだけで済んだだけかもしれません。そもそも混乱が起こればそれでもいいのですから、そこは間違いないです。』

そして、エリアも、たとえ誘拐されたとしても、貴方の言うとおりにアクデイにいれば裕福な暮らしが約束されるでしょうね。貴重な戦争の道具を、雑に扱うわけがないですから、最初の内はさぞかし丁寧なおもてなしをするでしょう。そしてそのうち、頭を弄くつて、記憶を綺麗サツパリ無くしてくれますよ！ これで兵器が一つ完成です！』

「っ！！」

詰め寄るように、アスは 焔はカイフィールドに叫び続ける。

何故か彼女に向き合っていると自分が惨めに思えて、無意識に彼は顔をそむけた。

しかし、それでも彼女の叫びは止まらない。

『貴方はそれを見て、これで良かったと思えますか？！ 抜け殻のような、ただ力を振るうことだけを命令される少年を見て、後悔しませんか？！ 貴方は、彼の日常を守ろうとしてここへ来たのですよう！ 国の真ん中でお高くとまっている連中が書いたシナリオではなく、自分でこの道を選んだ 誰が決めたものでもない、まさしく貴方の物語でしょうが！』

「でもボクには、彼の人生を左右するような決断を下すことは……」
『そんなもの、もうとっくの昔に分かっているじゃないですか。』

彼はこの街に戻ってきた。力なんてものが無いのに、彼はそれで

も何らかの目的のためにここへ戻ってきた。それは、少なくとも現状に抗うということの意思表示ではないでしょうか？」

呆れたように、でも柔らかい包容力のある声音。先程まで怒号を発していた者とは思えないほどのそれに、カイフィールドは呆気に取られる。

顔を上げるとそこには、焰という力の塊に体が与えられようとしていた。渦巻くように焰が集束を始めて、既に爪ができている。

「アス、この状態で元に戻ったら!？」

当たり前事に気付いた彼は、慌てて彼女の行動を止めようと声を張った。

『分かっていますよ。この状態で戻れば、まず大きさに確実に境界に引っ掛かりますね。そして、魔術そのものが暴走してダメージを受けてしまう。でも、貴方だけに先に進んでもらいたい。壊れた瞬間に空へ持っていけば、カイフィールド、貴方だけは助かる。』

すみません、まだ貴方の魔力が大して回復していないのにこの状態を解いてしまつて……」

「そんなことしたら、君だつてタダでは済まないんだぞ？」

『それでも、エリア・フィリントンは守るべき存在でしょうか？ 貴方の考えた今日のシナリオは、一部の人間が犠牲になり笑顔を作るのではなく、全てを元通りにすること。私は、そのお手伝いをするだけですよ。』

いいですか、貴方は貴方の考えた最高の物語を貫き通してください。それが彼にとって現状、最も素晴らしい結末だと私は思います。

だから、』

「ああ」

足全体が認識できるようになると、いよいよ三角錐の中が窮屈になつていく。

それでも彼は全く焦らず、むしろ緊張から解き放たれたような清々しさを覚えている。

アスの言葉を絶つて口から出てきた淡白な内容の声は、そういつ

た類のものだった。

（まったく、ボクってやつはつくづく馬鹿なんだな。彼女が命懸けで行動しないと分からないなんて）

今までアクデイの兵士として、姫の専属護衛として、数々の戦いに参加した彼は幾度と無く沢山の死体を見てきた。敵と判断すれば、冷静で無心となれる。それなのに今回は、守ると決めただけで、その対象である町の人間が傷付くのを見ただけで、あつという間に心が揺らいでいった。こんな光景は耐えられないと、初めて彼は思ったのだ。

主軸は揺らいでないのに、必要以上の責任感が勝手に彼を押しつぶす。粉骨碎身で戦い続けた彼の心は、それだけで折れてしまう。（守ると勝手に言い続けて、少しでもその目標が達成できないと理解すると、勝手に潰れて。ほんと、馬鹿みたいだ）

雲が消え失せようとしている西の空に、光は輝く。それを後ろに佇むアスは、少し前までなら、自分の卑屈さを見せ付けられたような気がして、後ろめたさだけを感じていただろう。だが今は、それよりも希望が上回っていた。頼もすぎる味方に思わず笑んでしまっいそうだ。

「ボクは自分が選んだ答えに従うよ。それがどういふ結果に繋がったとしても、それはこれからのボクの物語だ。後悔はしない。彼を誘拐させずに、アクデイから一生匿うつもりでもいる」

『ですから言っているでしょうが、気負いすぎです』

「いや、それぐらいが丁度良いのさ、昔のボクと比べるとね」

「は、はあ」とその時の彼を知らないアスは、どう返せばいいのかわからずに一人で勝手に悩み始めた。その様子がどうにも可笑しくて、彼はついつい、こんな状況にも関わらず笑んでしまう。

「こつという気持ちは、本当に久しぶりだ」

誰に聞かせたいわけでもない呟きは、幸せの声音。

彼は考える。もう誰かが傷付いてしまって、泣いてしまって、悲しみに暮れてしまっているのなら。力で脅威を押しつけるだけじゃ

なく、その傷付いた人達に日常を取り戻させる。もう一度、笑顔と
言うものを作り上げる。それが、自分なりの、カイフィールド・ラン
スにとつての「強者の人の守り方」だと。

「絶対に戻ってくるんだぞ、アス」

今までに無い力強さを瞳に感じさせ、カイフィールドは自らの相棒
を送り出す。

「ええ。言われなくても分かってますよ」

その言葉の刹那。そして焰が、完全に一つに戻った。

避雷針が次々と大地から離れ閃光が竜を包み、アスはまるで雷の
羽衣を纏っているように見える。

雷の戒めは解け、しかしその力の流れは規則正しいものから次第
に乱れ始め、三角錐という形に保たれていた電気の道筋は球状だっ
たり棒状だったり、暴走を始めてしまう。

「つぐ、がああああああああつっ!?!」

断末魔の叫びが、民家から大通り、大通りから町、町から空へと
広がった。

「アス!!!」

たまらず叫ぶが、次の瞬間アスの腕が彼を吹き飛ばす。だが、痛
みは地面を転がった時のものだけだ。

痛みなど知ったことではないと彼は起き上がり、もう一度その名
を叫ぼうとした時 耳を劈つんざくような咆哮が放たれる。

「エリアトリフェウルをお願いします! 彼一人で来ているとは考
えにくいですから、きっと彼女も来ているはずです!」

轟く雷が竜の体表を駆け巡り、その後をなぞるように痛みがやっ
てくる。彼女の絶叫のような懇願の叫びに、カイフィールドは力強く
首肯していた。

「アス」

「」

「また、後で」

返事を待つ事無く、カイフィールドは潰れかけた心を奮い立たせ、

フェマミーが消えた道へと駆け出す。この自分の一步一步が、一人の少年の希望となることを願って。
そして。

『ええ。また、後で』

雷を纏った竜は、小さな約束を胸に羽ばたき、町を照らす煌々とした輝きとなった。

既にこの騒動が始まって五時間。兵士の指揮をとっていたものは朽ち果て、二十体ほど用意されていたデイン、その最後の三体はある少年により再起不能、竜は青年の歩く道をこじ開ける。

カイフィールドとフェマミー、守るか奪うかの最後の戦いが始まった。

「どうして、こんな風になっちゃうんだろう」

誰に聞かせるわけでもなく。ただ彼女は悲観する。

「どうして……」

普段からボサボサの金髪はそれでも容姿のためか「そういう髪型」として理解されてきたが、今の彼女からは陰鬱な雰囲気しか伝わってこない。生気の欠片も感じさせない瞳は、彼女がこの町に来てからずっと隠し続けてきた「無」を顕にしている。

記録係 戦争の副産物として生れた、何らかの特殊な力を持つ亜人と呼ばれる人種の一つ。見たもの、聞いたものを脳に「書き込む」ことで後世に歴史を正しく伝える亜人を国が雇い、その名を付けられている。

尤もリフェウルは普通の人間で、ただ亜人に育てられたと言う過去を持つ少女だった。そう、彼女の両親は亜人なのだ。

彼女は人間でありながらも亜人としての知識を詰め込まれ、そして記録係として最も必要なことをすり込まれたせいで普通の暮らしを送ってこなかった。そのせいで、この町へ来た彼女は白い目で見られ、一時は事件にまで発展することになったほど。

彼女がユニやエリアに依存し、その他の人間を基本信じないのは、その当時の彼女を受け入れたのがその二人だけだったためだ。

だが、彼女が唯一心を許す大切な二人は現在、どこにも居ない。ユニにいたっては、生きていないことすらも確認できない状況。それに加えて、「襲撃者の目的であるエリアが、そいつらのいる町へ戻ってしまった」。元々、不安定だった心は完全に打ちのめされ、リフェウルがこのようになってしまうのは、彼女を知る人間からすれば自明の理だったことだろう。

内心、彼女もエリアを追いかけたてしようがなかった。家族同類の大切な人が連れ去られようとしているときに黙っていることなど、いかに普通の感性とはかけ離れたことを教養された彼女とて、できることではないのだ。

ただ、頭から離れない恐怖が、動こうとする度に心を揺らしてしまっしょうがないのだ。理由がブレ、軸がブレ、結果ここに留まることになる。背中をもう一押ししてくれる何かを、リフェウルはずっと待っていた。

そしてまた、そんな都合のいいものは訪れないと、彼女自身が理解もしていた。

蹲り、抱くように抱えた足の中で葛藤する。怖くない、怖くないと呪文のように呟くが、それだけで恐怖が拭えるのなら苦労はしない。しばらく経っても、何一つ効果は無かった。

ふと、部屋がどんどん暗くなっていることに気付き、立ち上がって明かりを点けようと立つ。

「痛っ!？」

何か尖った物が刺さった感覚。着替えるのを忘れていた制服のポケットから、髪留めが出てくる。どこかで見た覚えのある、小さな女の子用みたいな物だった。

「これって、あの子の……」

脳裏に浮かぶのは、あの騒動の中で知り合った、なんとなく昔の自分に似通った箇所がある少女。名前を聞き忘れていたが、そうい

えはあの子は無事なのだろうか。

「一瞬頭をよぎった理由に、自分が考えたことながら、最初の内は信じられなかった。」

まさか自分が他人の身を案じるなんて、思いもしなかったからだ。それも、本当に無意識に思ってしまったのだから、驚愕だ。

「エリアを無理矢理にでも連れて、おばさんも連れて、あの子の安全を確認して……」

恐怖を押しつけるための理由を、呪文のように呟く。不思議とこんな風に理由がなければ大切な人のために動くこともできないのかという自嘲のようなものは無く、今まで全く感じたことの無い、だが存外悪いものでもない感情が胸を埋め尽くす。

「動いてね、アタシの足……」

小刻みに震える足を叩き、立つ。玄関に近付くたびに震えは大きくなり、次第には壁に手をつけて歩いていった。

「動いて……」

それでもリフェウルは、頭を振って「じつとしている」「帰ってくるのを待つ」などという保身的な意見を頭から追い出す。

小さな小さな勇気の火種を、彼女は大切に抱えて歩くのだ。

靴を履き、ドアノブに手をかける。

（エリイ、アンタだって大切な家族の一員でしょうが。おばさん助けたって、アンタがいなけりゃなんの意味も無いじゃない。そんぐらい気付きなさいよ、バカ）

ガチャリ、とノブが回る。このドアを押せば、眼前には壊れた町が広がるだろう。そして自分は、これからそこに飛び込むのだ。

まったくもって、正気の沙汰ではない。

しかし、彼女の中では、唯一存在する最高の選択肢だった。

「行くわよ、リフェウル・ハウ。おばさんとあの子を見つけて、泣き虫を回収しに」

家から出て走りだした彼女の足は、不思議なほど軽やかだった。

第十四話 弱者の意地（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第十五話 戦場の華

カイフィールドが結界を抜ける数十分前。

夕刻の空は、地上と同様で真っ赤に焼けている。

「綺麗ね……」

そんな光景に、フェマミー・アレイチエルドは心を奪われていた。国に対して反旗を翻した青年カイフィールドとの戦闘により、自身の戦闘の定石、その要である避雷針を全て失った彼女は、そのスペアを用意するため、ここ数日身を隠していたとある宿舎の中に居た。

尤も、それには休養といった意味合いの方が強いのだが。

いかに元帥の席に近いと言われた人間であっても、あれだけの激闘を繰り広げ尚且つその後、彼の動きを完全に止めるために結界魔術を常時発動しているのだ。休憩を挟まずもう一度カイフィールドと戦えば、十分も経たずに魔力は底を突くだろう。

「お姉様、大丈夫ですか？」

「ええ、平気よアイシャ。力の配分を間違えずにじっとしていれば、あの程度の結界を維持しながらでも体力を回復させることは容易なもの。」

それより、周りへの警戒を怠らないで――

と、フェマミーが自身の右手にはめている指輪、そこへ帯電している彼女へ注意を促そうとしたところで。

そこで。

部屋に唯一ある窓、フェマミーが景色を眺めている窓のカーテンが、微かに揺れた。

「あらら、お客様だわ」

『申し訳ございません！ お姉様。今すぐに排除します！』

「別に構わないわ、アイシャ」

今すぐにも町一個を覆えるほどの雷を生み出そうとするアイシヤを制止し、優雅に微笑みながら振り返る。

「久しぶりね、アイ」

「いつまで経ってもその呼び名なんだな、私は」

彼女の視界には、白のシャツに覆われた純白のベッドに腰掛ける女性がいた。

黒のパンツ、左胸部分にウイクジブスの紋章が入った元帥のみが着用を許される軍服。ただし軍服は彼女のセンスなのか、袖は切られていて肩辺りまでしかなく、そして何故か左足だけにベルトのような物が巻きつけられている。そんな装いの女性が、不敵な笑みを浮かべていた。

ウイクジブス・アイナ・ロマ

国の名前を冠する元帥の、史上初の女性。同時に史上最年少でもある彼女は、幼い頃から武術、魔術に秀でている。

釣り目気味の、常に相手を嘲笑しているような目。口元には、フエマミーとはまた違う類の笑みを絶えず浮かばせている。そして何より、長身でスタイルが良く美しい。

彼女から発せられる異常なほどの殺気が無ければ、世の男性は誰も、彼女に声を掛けたことだろう。

「私の代わり、ちゃんとやってくれているみたいね。ありがたい、ありがたい。」

で、私に何か用？ 生憎、今はちょっと忙しいのよねえ」

「応える義理は無いと思うが……。」

それに、あんたに譲ってもらった席なんて、いるだけで吐き気がするよ。ただ、こういう事をするのには向いているから、私はあくまで利用しているだけだ」

「うーんなるほど、私怨ってやつね。アイ、あなたまだ私のこと恨んでるんだ」

「恨んでる……か。まあどうでもいいけど 単刀直入に言う。取り合えず死んでくれないか？」

突如として、バツとシャツが舞う。それが床に触れるよりも早くアイナは、カイフィルドですら入ることに苦戦したフェマミーの懐

にいと簡単に体を捻じ込む。

「お姉様!?!」

「いい、私がやる」

懐への侵入を許したことに大した驚きも見せず、自分の身を案じる言葉に答え、彼女はアイナの背に手を回した。ふつと息を吐くように力を込めると彼女の体は宙に浮き、刹那の間に彼女達の居場所が入れ替わる。

アイナは振り返りもせず、先程フェマミーが床に着地した時の僅かな音を頼りに回し蹴りを放ち。フェマミーもまた、彼女の蹴りが空気を裂く音を感じして屈む。

さらに屈んだ状態から脚のバネを最大限利用し、後方へ アイナの方へ跳ねる。拳を作ると力を蓄えるように腰を捻り、回転、裏拳へ繋いだ。

それに応えるように、アイナも回し蹴りの勢いを利用して拳を前へ。

二つの拳は、静かにぶつかり合った。

「……………」

「……………」

ピシッ。

部屋の中にあつた花瓶に、ひびが入る。次に窓ガラスが破砕音を奏で、床は捲れ上がり、壁に掛けてあつた絵画は吹き飛んだ。

破壊と轟音と爆風が、二人の行動に追いついてようやく空間に爪痕を残し始める。仕舞いには雪崩のように床や天井が崩れ始め、一瞬にして廃墟と化す。

「壊したら駄目じゃない、アイ」

「私はあるとじゃれただけだ」

だがその廃墟の中に女性は存在せず、いつの間に飛び出したのか、二人は宿舎が建っている通りで睨み合っていた。

互いに微動だにせず、呼吸をする時の胸部の僅かな動きすらも伺えない。そもそも呼吸をしているのかと疑いたくなるような二人だ

が、しかしそれを可能にするだけの技能を持つのがアイナとフェマミーだ。

そんな中、唐突にアイナは口を開く。

「国から正式に命令が下ったよ。あんたを殺せと、アクデイと手を組まれたら困るってな」

「あれ？ そんな命令を下せる子だったけ？」

「とぼけるなよ。上と言っても、実質あの国を牛耳っているのはジジイどもだ。私は立場上、従うしかない」

そして彼女は、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、訴えるような声音を振り絞る。

「なんで裏切った！ 私と、あいつと、あんた。三人であの子を支えていこうと決めた矢先に、なんで国を裏切って傭兵もどきなんてやっている！？」

「応える義理は無い、よね？」

「ふざけるな！」

「ふざけてないわ」

「この……！」

頭に血が上ったアイナは、「踏み出す」というよりも「飛ぶ」形で殴りかかる。奥歯を噛み締め、拳に様々な感情を乗せた彼女の形相は、憤怒だけに染められていた。

『お姉様には触れさせない！』

と、二人に間に割り込むように雷が走った。今の今まで、自らの主の命に従い手を出さずに居たが、あの元帥が本気でかかってきたとなれば話は別だ。一旦フェマミーの指輪に留まると、一点に力を集中させ貫く雷の槍に変化する。

糸のように細く、しかし絶大な破壊力を秘めたそれが放たれようとした時、

「邪魔だ」

アイナは左足のベルトのような物を掴むと、巻き付いていたそれを強引に引っ張る。前面に展開されたベルト　そこには、二十四

の魔術文字全てが記されていた。普通ならばそこから使う魔術にあわせて文字を選ぶのだが、だが彼女は握った拳とは反対の手で帯に触れると、全てから力を受け取った。

《生れる、力。美しく、咲き、乱れる。造られ、音となり、容となり、意志となり。空と、水と、土と、緑と、火に、包まれ。拒絶の象徴、縛られる、望み。集え、痛み、醜悪。時の流れよ、そして止まれ。》

呪詛のように呟き、誰に知らせるためでもなく、願いを込めて。神様に懇願するように、ただひたすらに力を要求。自らの内に秘める願いを込めた祈りに、そして力の権化は応える。

瞳の中の感情が一瞬、怒りから別の何かに変わったが、しかしそれを気付かせる間も無く彼女は拳を振りぬく。

物理的干渉　　そういつた類の攻撃は絶対に受けないはずのアイシャの雷の体が、真正面から、宿舎を破壊した原因の一撃をもろに受けてしまう。「は？」と混乱する間も無く、彼女はゴムまりのように地面をバウンド。周りを巻き込みながら飛ばされていき、煙が晴れたときには幼女の姿に戻っていた。

「あつが!？」

そして打ちのめされた幼女の意識は、完全に飛んだ。

そんなものなど最初から目にしていないと言わんばかりに、アイナはスムーズな挙動で拳を戻し、そしてもう一度放つ。

腹部一点に集中された拳の一撃は、魔術の援助を受けて竜すらも凌ぐほどになっている。アイシャを一撃で昏倒させた拳は、全く勢いが死んでいなかった。

だが。

『お姉……様』

「っ!？」

真っ直ぐに伸ばされた腕の先。拳が突き刺さったのはフェマミーではなく、先程まで気を失っていたはずの、幼女の姿をした竜、アイシャだった。

口から血が溢れ、赤い線を引いている。苦しそうに喘ぐ声が漏れ、僅かだがアイナの表情が歪む。

「お前、なんで……」

『お姉様の邪魔は、させません……』

「ごふっ、と口内に残っていた血液を全て吐き出し、息絶え絶えに言葉を発する。自分の腹部にめり込んでいる手を掴み、しかしそこで前のめりに倒れてしまう。思わずアイナは抱きかかえ、ふとこの状態で攻撃されないかと警戒したが、フェマミーの表情は今までに無いほど無表情で、先程までの殺気が全く感じられなかった。

『貴女に、お姉様の、何が分かるのですか……?!』

むしろこの重傷を負った幼女の方が、凄まじいほどの殺気を放っている。怯むことはなかったが、油断することも無い。

『お姉様の邪魔は……させない!』

刷り込まれたようにそう呟きながら、両手で強く手首を握り、自らを奮い立たせる。アイナの手を電流が走るが、それは本当に微弱なもので、意識しなければ感じ取れないほどだ。

「もういい……」

そんな彼女に、フェマミーは淡白な台詞を放つ。

今にも倒れそうな小さな体を抱きかかえると、そのままアイナに背を向けて 突如として、消えた。

「何なんだ、まったく」

愚痴るように吐き捨てた言葉は、誰の耳にも入らない。

まさか、あの程度の存在に臆した訳ではない。気おされた訳なんか絶対に無く、力の問題でも同様にありえない。ただ、何か、何故か、手を動かすことが躊躇われた。本能的な部分が、彼女を抑えたのだ。

「どうしたんだ、私は……」

残された自分はどうすればいいのだと、彼女は自答を模索する。

「……追うか」

用意された答えと国の誇り^{紋章}を胸に、彼女もまた、その場から消えた。

「また君なのか……」

「またアンタなの……」

茶と金の上に位置するような髪色の青年と、手入れが面倒ですからと語っている金髪の少女。

向かい合う二人は、互いに「いやどんな偶然だよ」と心の中で密かにツツコミを入れていた。

そもそもアルフィンの町は、面積だけで考えると同盟国の中でも上位に入っているような国だ。中央広場と学校の間だけでもそれなりの距離はあるし、そもそも二人が動き始めた位置である学校付近とエリアの家は、ほぼ正反対の位置にある。それが、リフェウルの場合、道が建物の残骸のせいで塞がって通れなかったり、よくよく考えるとエリアがどこにいいのかを知らなかったりと、様々な原因
プラス神様の気まぐれ（九割） が絡み合い、結果、同様にあてもなく人探しをしていたカイフィールドと遭遇したのだった。

（……いや、だからどんな偶然よ）

もう一度、今度は出会った瞬間に吐いた溜息よりも不満を多く募らせて、大きく大きく息を吐く。

その行為が気に障ったのか、「なんだよ？」と突っかかるカイフィールドだが、しかしリフェウルはそれを無視して適当に歩き出す。

「ったく。いつでも不機嫌なんだな、君は」

やれやれと肩を竦めて、何故か彼は自分に付いてきた。

「……ストーカー？」

「つくづく君は、人の善意を無下にするんだね」

「偽善者？」

「どうしてこう人の心を抉る……」

君一人だと危なそうだからついていだけで！ と、やや呆れ気味に理由を口にし、溜息をつくカイフィールドに、ふとりフェウルは気になることがあった。

「ねえ、アスは？ アンタたちいつも一緒に居るんじゃないの？」

「彼女は、今は動けない。君が言っていたフェマミー・アレイチエルドと戦ったとき、ちよつとした『へま』をやらかしてね。それをどうにかするために、予想以上のダメージを負ったんだ」

「そう……」

「心配かい？」

僅かに目を伏せた彼女に、カイフィールドはからかうつもりで、少しでも空気を柔らかくするためにそう言った。

「うん。心配」

だが予想外の返しに、彼は面食らう。

できればもう一度聞き返したかったが、彼女の纏っている空気と、どうか雰囲気のようなものがそれを拒んでいる気がして、自重する。「エリアを守ろうとしてくれたんだもの、心配に決まってるじゃない。いい？ 私がここに来た理由は、『心配だから』よ。」

エリイが心配で、おばさんが心配で、あの子が心配で。そういった理由でも動いてみようって、考えられるようになったの」

「少しの間で、随分変わったんだね」

「まあ、強いて言うならエリイのおかげ……かしら？」

どうやら自分でもよく分かっているのか、顎に手を添えうんうん唸り始める彼女に、カイフィールドはポーカーフェイスを崩さずに内心苦笑した。

いや、ほんと変わったよ、君。

口に出すと気持ち悪いとか罵倒されそうだったので言わず、彼は前を見て歩く。学校と比べると、広場に若干近い所だろうか。さてここからどう動こうかと、そんなことを考えている彼に向かって、言葉が続けられる。

「私の親、亜人なんだよね。ほんとの親じゃないっていうのが、唯

一の救いかな？ ほら、亜人って結構蔑まされてるじゃない？ 同盟国ならまだしも、アンタのことかウイクジブスなんか行くと、結構酷いでしょ？」

「それはまあ、一概には言えないけど」

確かに亜人は、あまり良く見られてはいなかった。特別な力を持つ。人と違うということがどれだけの壁を作るのかは知らないが、それなりに数は居るはずだ。と、彼は頭の中の記憶を探り無難な答えを見つけて出す。

「それは、『義父と義母が亜人』っていう場合でも変わらないみたい。

イジメってやよねえ。今じゃエリイのお陰で大分落ち着いたんだけど。知ってる？ 結構、陰湿なのよ。まあ私は育ての親の職業柄、こと動揺だとか発狂だとかは全くしない人間だったし、むしろ見下してたから、たまに反撃とかしていたけど。

でもね。それでも結構、『ああ、つままないなあ』っていう呟きは、どうしても生れちゃうんだよね」

「それで、エリア君と一緒に居てくれたのかい？」

「ううん、むしろその逆。その時、エリイとアタシ、ぜんっぜん会ってなかったもの。ていうかアタシ、知らないんじゃないかしら？」

一体どうということ？ とカイフィールドが口にする前に、リフェウルは再び声を発する。

「アイツ、アタシが嫌がらせうけた時、それにアタシが気が付く前に元通りにしてたのよ。靴を隠されたって、アタシがそれに気付く前に見つけ出して、何事も無かったようにもとの場所へ戻す。凄い時は、アタシに嫌がらせをしていた連中に一人で注意しに行った時間もあつたのよ？ んで、ある日事件が起こって。でも、それきりイジメは終わった。今じゃ軽く、学校の人気者らしいわよ、アタシ」

「それはまた、変わった助け方だね」

「アイツ、アタシがそうだったことをされるのが嫌いだって分かってたのよ。分かかって、それでもほっておけなかった。だから、ア

タシにはれないように。何でそんなことしたんだって訊いたらねえ、なんて答えたと思う?」

「……駄目だ、想像が付かないよ」

一応真面目に考えてみたんだけどね、と忘れず付け加え、彼はリフェウルに答えを求めた。エリア・フィーリンツのことを知ること彼の行動パターンを知ろうと聞き始めたことだが、今やカイフィルドは完全に聞き入ってしまい、とある少年のことなど頭の片隅から抜け落ちてしまいそうになっていた。本末転倒な話だが、残念ながら二人を止める人間は誰も居ない。

「アイツ、『えー、あー、うー』って唸り続けて、最後には恥ずかしくなったのか顔真っ赤にして逃げて言ったのよ」

「とことん変わった子だったんだね、彼は」

と、そんな風に言う彼だが、心中では彼のことを高く評価していた。あの少年の場合、善行と言うより、自分がやりたいことをやっているだけだと思うのだが。それでも自分にはできないなど、軽く尊敬はしていた。

だがそんなことを言った矢先、彼女は怪訝な目付きで側に居る人間を見詰めた。

「アンタ、何言ってるのよ。エリイはいつでも、その『変な子』よ。だからアイツは戻ってきたんじゃない。泣き虫なくせに、弱いくせに、それでも自分じゃない他の人が苦しんでいたたり困っていたりすると手を差し出さずにはいられない。ね? 変わってないじゃん」

呆れているような、誇っているような。感情が複数寄せ合わされて、訳の分からない声音、言葉になってしまっているが、それでもなんとなく言っていることは伝わった。

「要するに、君は彼が好きなのか?」

「つつつ!?! ぶほっ!?! ぐほっ!?! あ、ああ、アンタ! 話が突飛すぎるのよ!」

「だって、そんな話聞いて どう考えたって、空気にそうじゃないか」

「だから突飛すぎるっていつてんでしようがバカ！」

ガツツ！ と相手に脚に蹴りを一発入れておく。気持ちは収まらなかつたが、それでもなんとか静める。せつかく無くなってきた嫌悪感を再びバリバリ放出させながら、リフェウルはカイフィールドを睨んだ。彼は彼でぶーぶー文句を垂れていたが、そんなものは無視だ。

「いい？ アイツは面白い日常をくれたの。だからアタシも、恩返しのためでエリイの日常を守るために動いたのであって、断じて好きだとか愛してるだとかアイラブユーだとかじゃないのよバカアアアアアアツ！！」

猛ダツシュでカイフィールドまで駆け寄った彼女は、ダツと跳躍すると、傍観者から見れば綺麗なフォーム。しかしやられる方からすれば地獄絵図。で飛び蹴りを放った。

こんな綺麗なフォームの蹴りをどこで習ったんだらうかああそうか親か親が教え込んだのかくそお当たたら痛そうだなあ嫌だなあでも避けられくふうっ！？

「っ痛うう……！！」

リフェウルの怒りは見事、超高速で心の中愚痴りをしていたカイフィールドの腹部に突き刺さり、路上でのた打ち回らせることに成功した。

もう既にこの行動が好きだと言っているようなものなのだが、空気に反して（何に、かは不明）彼女の言っている通り、好きでもなんでもなく、あるのは「家族として大切」といった感情だけなのだ。さてこれからどうしてやるうかと、わざわざ恐怖心を煽るように指をパキポキ鳴らしながら、リフェウルは不敵な笑み全開で近付いていく。

これは調子乗りすぎたかなあ、などとカイフィールドは後悔し始めるが、もう遅い。罰は、然るべきところへと運ばれようとしていた。

だが、それよりも早く。

ゴオオオオツツ！！！！！！

穏やかな空気を吹き飛ばすように、怪物の咆哮のような轟音が、町を覆う空に響き渡った。

時は遡り、リフェウルとカイフィルドの耳に轟音が届く数十分前。町外れの森林の中で、幼女を抱く女性の姿があった。

「もう大丈夫。貴女は少し、休んでなさい」

「……大丈夫、です。アイシャは……アイシャは、まだやれ、まず口を開くたびに血が零れるのを、フェマミーは苦虫を噛み潰したような表情で見詰めた。忠誠心と言うものがここまで厄介なのか、いつそ自分を見捨てて逃げて欲しいと。だが幼女の実存意義は彼女の願いを叶えることは不可能なのだ。」

思わず眼前の木の幹を力の限り殴りつけそうになるが、なんとか理性が勝り押さえ留める。もしそんなことをすれば、少なくとも半径百メートルの木々は薙ぎ倒されてしまうからだ。アイシャを安全な場所で休ませるのが目的なのに、そんな、自らの場所を知らせるようなことをしては本末転倒だった。

「もう大丈夫。誰も貴女を傷付けないから、虐めないから、泣かそうとしないから。私が、貴女を守るから。」

だから貴女は、もう寝なさい。まどろみに体を委ねて、心を落ち着かせて、目蓋を閉じるの。次に開いた時には私が居て、全部終わっていて、帰りましょう?」

アイシャをそつと、地面に降ろす。木の幹に背中を預けさせ、抱いていた手を離す。

「っ!? お姉様……。ごめんなさい……」

泣き出しそうな顔を俯き隠し、ただ一心に謝る幼女の声は恐怖に染められていく。

彼女の眼に映る女性の剣幕が、かつてないほど怒りに染まっていたからだ。

睨まれただけで肌が切れそうなほどの殺気が、彼女の眼には宿っていた。

だがその怒りの矛先は、その町の中に居るはずのアイナにも、エリアにも、カイフィールドにも、リフェウルにも。誰にも向けられることは無く、放たれる訳でもなく、故に彼女の中でふつつつと煮え立つ感情はその濃度を高めてゆく。

「アイシャは悪くないのよ」

『でも……最後まで手伝えませんでした』

「いいの……。それでも貴女が無事なら、後は私がやればいい」

唇を噛み締め怒りを霧散させ、流れる血に痛みを実感することで憤りを紛らわす。

「アイシャは私が守るのよ」

そして彼女は一歩ずつ、確かな重みを感じながら歩を進めてゆく。「早く、全部を終わらせるの」

「おばさん！」

「っ！ エリアかい?!」

中央広場のさらに奥。瓦礫により途中進めない所もあったが、何十分も走りまわった結果、ようやく人の集団を見つけたエリアは、その中からユニの姿を見つけ出していた。

通りを埋め尽くすように人々が集まっていて、みな服の所々が汚れている。

周りには町中の人が出て、誰もが突然の不幸に嘆いていたが、少なくともそこだけには確かな幸せと安心が存在していた。

「良かった……。本当に良かったよ……」

「おばさんこそ、怪我は？」

「大丈夫。今はもう居なくなっちゃったんだけど、さっきまではアクデイの兵士がいたからねえ。なんでも、アクデイが作ったなんとか

つていう兵器が奪われたらしくて、それが今回の騒動の原因なんだとき。搜索していたアクデイの兵士さんが来てくれなかったら、今頃どうなっていたことか……。いやあ、感謝だよ、感謝」

「……………」

一般の人への説明は、そんなことになっているのか？

憤りの無い怒りを感じたエリアは、ユニにはれないよう制服の袖に手を隠しながらギリギリと拳を握った。

だが、ここには大勢の人がいる。こんなところでユニに本当のことを話せば、たちまち動揺は広がるだろう。最悪、全ての真実が包み隠さず知られることになり、大きな混乱を生むだろう。そんなことは、想像するだけで恐ろしい。

今彼がすべきことは、中途半端に混乱を生むことではなく、どれだけ迅速にこの大人数を遠くへ移動させることなのだ。

「あ、あの」

「そういえば、あの子はどこだい？」

「あの子？」

「やだねえ、リフェウルに決まっているじゃないかい。ん？ 一緒にいかなかったのかい？」

「リフェウルは、僕の家に住んだ。先に行ってるだろうから、きにしないで」

ユニが「先に？」と疑問を口にする前に、さらにエリアは続ける。「いい？ おばさん。今すぐにこの町を離れるんだ。近くの町でもどこでもいい。皆を連れて、なるべく遠くへ、それもアクデイっていう国の干渉がなるべく無いところがいい。そういうところを探して、いますぐに行って！」

後半を、もうほとんど命令のような形で言ってしまったせいか最初こそ戸惑いを隠せない表情を浮かべていたものの、内容を理解したのか、「何を言っているんだい！」と憤慨する。

「あんたも逃げるんだよ！ こんな、いつ人が死んでもおかしくない場所なんかいっても危険なだけ！ リフェウルは行ったんだろう？」

なら、あの子に早く追いついて、一緒にそついう町を探すんだよ！」

腕を引くユノに、しかしエリアはその腕を振り払う。いよいよ訳が分からないと激怒しそうな彼女は、もうまわりに居る人間のことなど考えることができなかった。

「ごめん、おばさん……」

だからエリアは、ただ謝ることしかできない。

“違うんだ。本当に彼が危ない。アクデイはエリア・フィーリントツを誘拐しようとしている”

「本当にごめん……」

“君は特殊な魔術を使えるね。オリジナルの、まず目にするのが無い四行の魔術文章。今は説明している時間がそんなに無いからこれだけ言っておく、君の両親はそれを君に伝えて、それから失踪している。アクデイも両親の居場所まではつかめなかったんだろつ、だから矛先が君に向いた。君には、ボクと同じような一種の才能がある”

「僕にそんな才能が無ければ、こんなことにならなかったんだけどね」

「何を言っているんだい？ エリア、一体、何がどうなっているんだい？」

ユニが問い詰めようとした、その瞬間。

ゴオオオオオツツ！！！！！！

と、凄まじい轟音が走った。

周りに居た人々は皆叫び声を上げ、混乱し、ただひたすらに声を上げる。

ユニすらもあまりのことに呆けてしまい、エリアはどうすればいいのかと思悩む。

轟音が近付いてくる気がして、激しい焦燥が胸を押しつぶすようだ。

得体の知れないプレッシャーに、自滅しそうになる。甲冑が相手

なら、不意打ち気味の攻撃を決めれば倒せるかもしれないが、それでも完璧とはいえない。握った拳の中が汗で滲み、それが緊張の度合いを物語っていた。

「おばさん、できるだけ遠くへ行つてね。本当に、ごめんなさい」

「エリア……！？」

「僕、狙われているから、皆と一緒にいけないや」
そうして彼は、自ら音源へと歩を進める。

全てを終わらせるために。大切な家族の無事を確認できた彼には、その家族を助けると言う新しい目標が生れていた。

それはつまり、そういうことであつて。

彼は、終わりを迎える覚悟を、決めていた。

自分の行動を止めようとする声に対して、聞こえない振りをする。決めたとはいえ、あまりにも軸の緩い覚悟は、そういった些細な事で揺らぎそうだったのだ。

炎に包まれていたはずの通りが、不自然に開ける。まるで戦場へ誘うように、エリアの眼前の道には何かの残骸も瓦礫すらも無かつた。

（カイフィールドさんやアス、二人に謝りたかつたなあ……）

あ、リフェウルにも謝らなきゃいけないな、と苦笑して。そんな風に歩いてきた彼に向かつて、突如として横側から影が。

「エエエエエエリイイイイイツツ！！」

ほとんど奇声を発して、殴りかかってきた。

第十五話 戦場の華（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

第十六話　そして空が轟く

午後六時の黄昏時に。

すっかり自己犠牲心を決め込んで歩もうとしていたエリアを、リフェウルは鬱憤を晴らすかのように吹き飛ばす。

ゴギユツ。

彼女のために説明しておくが、これは拳の力だけで出た音ではない。そもそも普通、こんな音は人体から発せられては色々とまずいだろう。

リクラマ現象によるエネルギーの膨張が、その年代の男の子の割りに華奢な体をいとも簡単に宙を浮かせたのだ。

現象自体にダメージは伴われないが、瓦礫に体を叩き付けられては涙目にもなるという話だった。

「リフェウル？……なんで」

瞳を滲ませる少年は、すっきりしましたと言わんばかりの爽快な表情を浮かべる幼馴染に、疑問その他負の感情を乗せて訊ねる。

「いいから、おばさん達を助けるんでしょ？」

「え？」

「え、じゃないわよ。当然でしょ。おばさんはアタシにとっても、大切な人なのよ。……………それに、ほら、祭の時、色々とサービスしてくれた人もいたし…………。」

あーもう！　調子狂うわあ。慣れない事はするもんじゃないわね！　もう！　バカ！」

後半、やたら理不尽な怒りをぶちまけるリフェウルだったが、エリアは状況処理が追いつかずポカンと口を開けて呆けていたので、話半ばでもう聞いていなかった。彼女からしてみれば、自分の恥ずかしいところを見られなくて良かったという気持ちだろう。

「とにかく、そっちまかせた！　アタシこっち！　いい？　オーケ
ー？　じゃあね！」

自分からの問いに何故か自答するという自己完結ぶりを発揮したリフェウルは、本当に、町の人たちの集団へと駆けて行ってしまう。重力加速度的に混乱が深くなり、一つずつ問題を解き明かそうとしても彼のキャパシティでは不可能。いくら今日一日で様々な出来事に遭遇したステータスを持ってしても、出来ないものは出来ないのだ。

「リフェ……ウル？」

「一応知らせておくけど、これは君のせいだよ」

「なんで僕　って。カイフィールドさん!？」

ごく自然なノリで会話に入ってきた魔術師に、エリアは上ずった声を上げた。

何故なら。自分を逃がそうと死闘　あくまで、エリアの視点である　を繰り広げていたカイフィールドの努力を踏みにじるような行為、すなわち、この町へ戻ってきたことに対しての怒りを、なんらかの形で受け取るのではないかと危惧していたからだ。

「君は面白いよ。自分の行為が、周りを奮い立たせていることに全く気付かないんだから」

だが予想に反して、彼の声音は柔和なもの。

そこにあるのは確かな力強さと、微かに尊敬が伺える。

エリアが、それが何なのかを確かめる前に、彼は続けた。

「まあ、ボクもその内の一人なんだけどね」

自嘲の笑みを浮かべ、最後彼を見たときに扱っていた荒々しい炎とは似ても似つかない。そんな、まるで極寒の中の人を包むような闇の中の人を導くような。少なくとも、エリアにとっては全く無害である小さな炎を、彼は手中に出す。

「たとえここに居たとしても、ボクは変わらず君を守るだけだから。だから、別に帰れなんて言わない。」

君は、君の物語に沿って進めばいい。それが、君の人生だろう？ただ怯えて部屋の中で縮こまるんじゃない。怯えながらも足掻いて走ることを、君は選んだんだろう？

だからその結果を、ボクに見せてくれ。ボクに、希望をくれ。足掻くことで守れるものもあるのだと、照明して見せてくれ」

ギョッと握り締めた拳。爪が喰い込んで、皮膚を傷付けると、指と爪の間に血が広がる。

煌々とした輝きとなった炎がいつしか、二人を包み込んでしまうのではないかと疑うほど膨張し。そしてそれは、呼吸のように微かながらも、カイフィルドの胸の動きに合わせて運動を繰り返す。

「カイフィルドさん……………お願いがあります。助けて、くれますか？」

ピタリと、収縮と膨張の繰り返しが止む。

彼はエリアに背を向けて、刻一刻と近づく轟音を見詰める。

時間の流れが様々なものとして感じられる無言の空間。

自らが作り出したこの空間を、カイフィルドが焼き払う時。

「さあ、行こう。早く終わらせて家に帰らなきゃ、アスが待ち草臥れて大変なことになる」

カイフィルドの手中の炎が圧縮され、一点の光源となったそれは、頼もしいほどの輝きを放った。

ドゴンッ！と。

もう何度目だろうか、鼓膜が破れないのが不思議なぐらいの爆音と爆風に、ほんの一瞬体が浮き上がる。

だが眼前の青年の運動量を見てしまえば、この程度の衝撃は比較するまでも無かった。

「右即頭部です！」

エリアの叫び声にカイフィルドは、空中に浮かぶ自身の体を弓形に反らすことで、敵の攻撃をやりすくす。

それを見届ける前に、エリアは本来存在しないはずの速度を標的へ叩き付ける。

だが、それは空を裂くだけだった。

既に、あのこちらへ迫ってきていた轟音の招待である、フェマミー・アレイチェルドと遭遇してから十分。

ただ疲労が体を蝕むだけで、事態の進展は全くと言っていいほど無かった。

前線で戦うカイフィールド　そこへ迫る攻撃を彼に知らせるための後方、エリア。互いの役割をフルに活用し、全力を出し切り続けても尚、彼女が膝を付くことはなかった。

今もこうして、後方のエリアが攻撃に参加したとしても、その事実は変わらないのだ。

だがしかし、カイフィールドの動きはその事実を吸収し、学習し、動きに繊細さが加わる。

エリアもまた、それに感化されるように視界を広げるのだ。

「おおおおおっつ！！」

カイフィールドが叫ぶと同時に、彼の手中の炎が爆発し、その余波を受けて有無を言わず彼の体は地を離れた。目指すは、魔術で空中に佇む女性だ。

地面に対して垂直に放つのではなく、微妙に角度をつけることで上への力だけではなく回転の力を　遠心力が付加した足払いを放ち、だがそれは容易に回避された。

それでも彼は炎を爆発させ、もう一段階跳ね上がり腹部に回し蹴りを刺す。

少なくとも、彼の背後に居たエリアには、そう見えた。

ただ、位置的に彼には分からないだろうがそれは厳密に言うと、フェマミーの腹部に足が刺さるはずだった、と言う光景なのだが。

「エリア・フィーリンツを渡しなさい！」

ぐぐつと、間一髪の所でフェマミーは、自身とカイフィールドの足の間に入れた左腕を押し返す。

「どうした、フェマミー・アレイチェルド……。妙に、焦っている、みたいだけど？」

まさか今のを防がれるとは、と内心冷や汗をかきながら、足でも折られるんじゃないかと動揺しながらも会話を続ける彼は、賞賛に値するだろう。

「カイフィールドさん!? 大丈夫ですか!」

片足を取られてバランスを崩しかけているカイフィールドの状況がどんなものなのか、エリアも察しが付いているようだ。カイフィールド自身も、いつまでもこの状況は不味いと思うし、何しろ自分が狙われている状況でも、人助けをしようとした(彼の視点で言う)お人好し馬鹿のことだ、きつとその内自分を助けに来るだろう。

(アスと約束しただろう……!)

それは駄目だと、自分を鼓舞するように活を入れる。

「心配無い! 君はそこにいて!」

そう、僅かに振り返ったその瞬間。

「 心配無い……ね?」

ヒュン、と空気がなった。

「……………油断したわね」

その言葉の意味は、カイフィールドに向けられた言葉ではない。自分への戒めの言葉を、彼女は放ったのだ。

先程の音は、フェマミーの、常識の範疇を超える拳の動きから放たれたものではない。エリアが小石を、自らが作り出す空間の法則ルールにより、高速という言葉の許容範囲を超えた速度で射出したのだ。

左腕を、石が通過した右肩に当てる。僅かだが鮮血が溢れ、その微かな痛みが集中を紛らわせる。

そこで、カイフィールドとフェマミーの距離が離れた。

「僕に用があるんですよね……?」

自分を睨む少年に対して、彼女は「へえ」と関心の声音を示す。

「逃げないのね」

「カイフィールドさんがいますから」

そこで、エリアは彼女に背を向けて走り出す。

は? と呆れたように溜息をつき、嘲るように、

「何よ、やっぱりの逃げちゃうのね。結局君だって」

「感傷に浸る時間なんて、あげないよ！」

「何事かと思考を巡らせた瞬間、彼女の耳には呪いの言葉と感じ取れただろう、言葉が聞こえた。」

《天聳える柱となれ》

幾重にも魔力を練り、注ぎ込んだのか。どこからが作戦で、いつそんなものを立てたのか。何故自分はこんな分かりやすい罠にはまったのか。そんな疑問に呑まれたフェマミーを、炎の柱が包み込む振り返り、エリアは歓喜に染められた。カイフィールドさんはまだ中にいるけど、術者なのだから大丈夫だろうとそもそも心配はしてないし、魔力の密度が物凄く濃かったことから、あの魔術の威力が伺える。それが直撃だったのだ、喜ぶなと言う方が間違っている。

「何故まだ時間があるのに、そこまで焦るんだ？」

だが、やっぱり現実には厳しいかなと、思い知る羽目にもなる。

天地を夕陽と炎で二分するような光景。地の光源の中に、影が二つ見えた。

「別に焦ってなんかないわ。ただ、面倒な事は早めに済ませておきたい性質なのよ」

「傭兵まがいの活動をしているのも、効率よく人を集めるためかい？」

そうよ、と続けて、今度は彼女から。

「そのために、ここまでしたの」

「そのためなら、一般人も巻き込むと……」

「なんの罪も無い一般人だなんて言わせない。ここに居る　いえ、世界の全ての人間は、全員、罪人よ。」

なのに、極一部の人間だけがその尻拭いをさせられている。それに不満を抱いたことがないの？

ある日突然、はい貴女は一国を滅ぼせる力を持つ人間になりましたと言われて、あなたは戸惑わなかったの？

当たり前前に戸惑わない、力や自分に酔っただけの坊やに何

が分かるというの……。偽善も大概にしなさいっ」

力の籠もった言霊は、はたして彼に届いたのだろうか。浮かんだ瞬間にどうでもいいと切り捨てた問いに、しかしカイフィルドは（当然そんな問いは聞こえていないのだが）答えた。

「ボクはボクの思いのままに進む。たとえそれが偽善と嘲られようとも、それが約束だから」

構えを取り眼差しを向ける青年に、女性もまた雷を纏い迎撃の態勢を取る。

「私は私の思いのままに進む。たとえそれが非道と蔑まされようとも、それが誓いだから」

エリアの眼前。未だ消えぬ炎の中の影二つ。聞きなれた轟音を奏でて、刹那の間に交差する。

純粹な戦意と悪意の前に、彼はただ佇立するしかなかった。

そこは炎と雷が入り乱れた、町の大通り。

その場に吹く風は、一、二時間前の殺伐とした雰囲気を伴うものではなく、地面を、崩壊寸前の建物を、そして竜の体の表面を優しく撫でた。

破壊に破壊を重ねた通りの道には、凝視すれば金属の残滓が見える。

カイフィルドが去った直後、アスは空へ飛び立った。その時の衝撃により鉄パイプの方は飛び散ったようだが、元帥並の実力を持つ人間が自ら造りだした避雷針の方はそうはいかないらしく、彼女の力を持ってしてもある程度の大きさにまでバラバラにするのが限界だった。

避雷針の一部は四方に飛び散って、雷もまた霧散したのだ。

視界が白に染まり、意識を刈られるような激痛と引き換えに。

『づぐっ……』

竜の筋肉が、僅かに動いた。

呻き声と共に目蓋を開けたアスは、朦朧とする意識を無理矢理に覚醒させ、しかし体中の痛みに結局動けなくなってしまう。

ただ、傍から見ただけでは彼女の受けた傷の大きさは伺えない。あるのは形として残る痛みではなく、記憶に残る痛みだ。

彼女の存在は、魔力　力と言う抽象的な存在が具体性を備えたものである。それは実体であり、感情も持つ。だが、実質「魔力」でもあるのだ。そこに魔力があれば、外傷だけならば彼女はすぐに回復することができる。だからこそ自分がこの役目を引き受けたというものもあるし、違っだろうと問われればそれはそれで間違っている訳ではなかったりする。やはり、抽象的だ。

『どれくらい時間が……』

などと呟いても、こここの辺り一帯は全て浄土と化していたりするので、時計など当然あるはずも無い。それでもやはり、仕事仲間の事は気になった。

『……？　あの子とカイフィールドと一緒に、大勢の人の中にリフェウル……？』

この場合、行くべき場所は決まっている。

ろくに動かない手足に鞭打つ。痛みだけが残留する翼へ活を入れる。朦朧とする意志を明確にする。

だが。

『ぐうあつ……っ』

ボタンツ、と力なく翼が地面に触れ、足も体重を支えられなくなった。

『はやく、行かなくては……』

しかしそれでも、やることは変わらなかった。

だが、次の瞬間、今まであんなに無茶なことをそれでも頑なにやるうとしていた彼女の動きは、ピタリと止まった。

ムリシタラダメ。

唐突な、内側から響く声にしかし彼女はうろたえない。尤もそれ

は、あまりの痛みに幻聴が聞こえるとかそういう馬鹿みたいな認識で対応している訳ではなく、本当に大して不思議なことではなかったからだ。

コウタイシヨウ。アナタハスコシ、ヤスンダホウガイイ。

『貴女が、来るのですか？』

その声音は、若干の後ろめたさが伺えた。

ソウ。ダイジナヒトヲ、ウシナウキハサラサラナイ。

『どのくらいで、着きますか？』

スコシジカンガアレバツクカラ。ダカラ、ソノアトハマカセテ。

『すみません。貴女の力まで借りることになるとは……』

情けなく謝り、しかし体力の限界だった。瞳からの情報を暗闇に染め、数秒経つと聴覚もろくに機能しなくなる。

まるで自分の体が自分のものではなくような感覚を、アスは嫌いではなかった。

如何なることがあるうとも落ちなかった竜の意識を、その声はいつも簡単に闇へと誘う。

「皆！ それぞれ荷物は必要最低限の物だけを持って、それ以外はここに置いておくの！」

魔術を使える大人は、何でもいい、とにかく大勢の人間が乗っても平気な、そんなようなものを出して！ 他の人はそれに乗って、乗員限界の一步手前で出して構わないわ。とにかく、今言った通りに、場所はまた後で知らせるから だから、今はとにかく動いて！

声が轟いた瞬間、あんなに荒れていた人の集団が一気に静まり返る。

そもそもリフェウルは、そんな、人を動かすことに長けた人格で

はない。もつと言えば、こんな大声を出して人を助けようなどとはまず思わない。彼女の目からこの町を見た時、そこは、昔自分へ嫌がらせ（リフェウル自身は全く気にしていないのだが）を行った子供やそれを見て見ぬ振りした、またはそれを促してきた大人たちがいる町なのだ。そんな人間にまで手を差し伸べるほど、彼女はお人好しではない。

だが、それでも自分へ優しさを向けてくれた、ごく一部の人間を見捨てることは出来なかった。

嫌がらせを行っていた人間が居ない時のみだが、それでも自分を気遣ってくれていた人間を、彼女は記憶から消し去ることが出来なかった。

世間では偽善と呼ばれる行動が、リフェウル自身がそこに意味があると肯定することで、善となるのだ。

そういう人間が居る事を発見することが彼女にとっては驚きであり、驚きは退屈を紛らわせてくれる。彼女にとってそれは、紛れも無い善になるのだ。

「お願い……」

煮え切らない感情を持つが故に、迷い、苦しみ、悲しんだ人間の悲痛な叫び。

だから、エリアのように全てを気に掛ける事はしない、自分が助けるのは自身へ優しさを見せてくれた人間だけであり、しかし彼女は「おまけ」としてそんな人間を見捨てないことを選んだ。

「お願いだから、言う通りにして……！」

これ以上、脆弱な自分の意志がぶれる前に、と。
すると。

「何を、どうすればいい。もう一度だけ教えてくれないか」
それは、誰の声だろうか。

耳を澄ませば、通りの地面を叩く足音が次第に膨れ上がっていく。ただその足音は混乱に染まったものではなく、時折聞こえる人を纏めようとする声によりある程度統率の効いたものだった。

「ありがとう……」そう誰にでも言うのではなく、空を仰いで言葉を紡ぐ。

リフェウルは自分へ尋ねてきた男性　前夜祭の時、彼女にサービスしてくれた男性へ、今時分たちが居る状況とこれからどうすべきなのかを手短に伝えたと、自身の目的に沿って体を動かす。

「リフェウルかい？」

「っ！」

と、そこで聞き覚えのある声に足を止める。

「おばさん！　良かった、やっぱりここにいたんだ！」

「そんなことよりも、あんたも早くあれに乗りなさい。年寄りはいし、迷子を捜してくるから」

迷子？　と疑問を口が告げる前に、おばさんが何故そんなことをいうのか考えてみると、案外、簡単にエリア・フィーリンツの顔が浮かんだ。

「ううん、おばさんこそ先に乗って。エリイのときには、アタシが行くから」

その言葉に、ユニは馬鹿なことを言うんじゃないと、顔を強張らせる。

「こんな危険なところに、あんたまで置き去りにできるわけないだろう？」

「大丈夫。今エリイ、カイフィールド・ランスと一緒に居るから。だから、全然心配ないよ。アタシは皆がここを離れたことを知らせに行かなきゃいけないから、だからここに残るだけだし。おばさんは、別になんも心配しなくていいから」

勿論そんな義務は彼女にはないのだが、今はどうにかしてユニをあの箱に乗せたかった。

だが、口について出た嘘が（普段の彼女を知る人間からすればだが）随分とらしくないものだったことに、今更ながら恥ずかしくもある。

「カイフィールド　って、あのカイフィールドかい？　アクデイの？」

だが勢いで出したその名は、予想以上に効果があるようだった。ユニはそう、と数分、逡巡すると、そちらの方が安全だと考えたのか、隣町で待つていることを告げると人の集団に紛れていく。

（気付かれてたかな……）

逡巡していたように見えた数分間、おばさんは自分の目を見ていた。まるで試すかのような視線を向けて、ただ黙り続けた。

そう。黙り、察し、汲み取ってくれた。エリイを助けたい、手伝いたいという意志を、おばさんは尊重してくれたのだと思う。

「ありがとう……」

それから、また再び人探しが始まった。

（兵士達の方へ歩かせたんだから、ここにいるはず……）

髪留めを握り締めて、集団の中へ歩を進める。

あの小さな、無表情で幼い頃の自分に瓜二つの少女を探して、人の波の中で一生懸命に視界を左右に動かして。それでも見つからない時は、髪留めを掲げてひたすら大きな声を出す。

と、意外にも早く視界の端に。動き回る大人の中で直立不動の体勢をとる小さな少女が一瞬、映る。

その視線に気付いて無表情がこちらを向き。リフェウルの勘違いだろうか、一瞬だけその瞳に宿す感情が嬉々としたもの変わったのは。

そんな妄想をするなんて重症ね、と。エリイのお人好しがうつつたのかしら、と。表面上だけの嘆息を吐きながら、名前も知らない自らの背中を押してくれた少女のもとへ、リフェウルは人込みを押し退けながら進んだ。

「リフェウル……」

「呼び捨てなのね」

ええー、ともうちよっと相手を敬う心を持ちなさいよと言いたくなる再会のシーンだが、自分がこの少女と余り変わらない態度を常に取っていた事を思い出すと、なんだか萎縮してしまう。今度からはある程度、愛想良くしようと心に誓ったリフェウルである。

「……リフェウル、かつこよかった。皆、動いてる」

「え、あ、まあね。アタシもまさかうまくいくとは思っていなかったけど、良かったわ」

「……凄い」

頬を朱色に染めて、今まで他人と殆ど関わらなかったせいなのかぼそぼそと、それでもリフェウルの頬を緩ませてしまっただけの言葉を、少女を一生懸命に発した。

リフェウルは誰にも見せた事の無い、恐らくは自分と似通ったところがある者だったから見せるのであるろう柔らかな笑みを浮かべて、少女の頭を撫で、

「アンタ、忘れ物。この髪飾り、アンタのでしょ？」

そしてその間に、髪飾りを付ける。

「あ」と声を漏らして自分の頭をぺたぺた触り、それに触れると今度は形を確かめるように指先でなぞり始めた。

「それ、大事な物なの？」

何気なく訊いてみると、少女は少しの間逡巡した後、口を開く。

「……うん。とつても。」

……わたし、学校で苛められてて。……でも一人だけ、助けられる男の子がいる。……誕生日。その人から、もらった」

「そっか……」

偶然って、怖いわね。

次第に人の数が減っているのに気付き、魔術で作られた箱状の、何か乗り物のような物に人が乗っているのが見えた。

この少女も、あと数分もすればこの町を去るだろう。

その前に、どうしても言っておきたいことがあった。

「ねえ、名前教えてくれない？」

「ユウリ」

「ほんとに名前だけしか教えないのね」

もしかして天然？ と口から出そうになったが、まあ今は特に関係ないので止めておく。

ここへ向かっている何者かがこの集団へ被害を及ぼす前に出発させたいので、やや口早に台詞を吐いた。

「ユウリ、今は退屈かもしれないけど、きっとその男の子が、アンタの人生を楽しさで溢れさせてくれる。毎日、毎日、どんなに短い時間でも、笑顔を浮かべることができるの」

だから、と続けて。

「そんな人生を迎えて、アンタがもつと愛想良くなったら、また会おう」

まるで自分が自分の未来を導いているような、そんな錯覚に陥りそうになる。なんの保証もないはずの未来の暗示を、彼女は自信満々に呟いたのだ。

「……うん！」

やはりまだ子供だからか。それでもユウリは、その言葉に耳を傾け、

「……じゃあね、リフェウル」

最後の一人として、町を出る箱状の中にいるのであろう両親のもとへ駆けて行った。

「じゃあね、ユウリ」と、それらが動き出してから。

あれだけいた大勢の人々は、四つの箱によってどんどん離れていく。

なんだか寂しい気持ちになりながらも、これで良いんだよねと、今この場に居ない白銀色の髪色の少年へ向けて呟く。

今頃アイツは、あの魔術師と一緒に全ての原因のもとへ向かっている。……いや、もしかしたらもう衝突していて、カイフィルドのやつが戦っているのかもしれない。エリイだって本当は逃げなきゃ危ないのに、自分が狙われているから逃げる訳には行かなくて……。

アタシなんかでは、何も解決できないから。

だから彼女は、自分にできる精一杯をやり切った。

(これで皆、助かったのよね……！)

炎で遮られていた視界は、ここから脱出する時に大人達が魔術で

消したのだろうか、いつしか遙か彼方まで鮮明に見えるほどに。

頬を撫でる風も、既に慣れ始めている荒々しい熱風なんかではなく、爽快なものだ。

まるで、全てがうまくいっている事を暗示しているかのように、周りの景色は動いていく。

「え？」

だから、見えてしまった。

一部だけとはいえ火が消え、風が吹き煙がさらわれる。視界がよりクリアになったせいで、彼女は見えなくても良かった。むしろ見ない方が良かった悲劇を、視界で捉えることになったのだ。

「なん……で。全部倒したんじゃ……」

四つの箱の前方。町の境に、銀色の鎧が立っていた。

ただそれは見た目で判断した、名前を知らないが故に用いた言葉であり、実際は赤い血液に染められて、それはもう赤い鎧に成り果てている。

遠くにいる彼女には分からないが、その甲冑からは人の体を焼いたような腐臭が漂い、荒い息遣いが聞こえている。生きているのがやっとという状況なのだ。

いひっ

回線が音量最大でオープンになっていたがために、彼女の耳に声が入ってしまう。その声は未来をうすうす予想していた彼女に恐怖と焦燥を与え、震えさせる。

いひひひっ！ ははは、あひゃあっ！

リフェウルは知っている。壊れた人間の行動が、どれだけ恐ろしいかを。

醜く染まった甲冑の腕が、持ち上げられる。その間も、あの気色の悪い奇声は止まず、むしろ増してゆく。

いひゃひゃひゃ！ カイフィルドオ！ カアイフィィイルド

オオオ！ お前のせいで、台無しじゃねえかあ！？

ノイズのようなものが所々で挟まれてよくは聞き取れないが、声

音だけは　醜悪と憎悪に染まったそれだけは、嫌でも感じさせられる。

四つの箱の中の人には聞こえていないのだろうか。丁寧に防御用魔術を付加したせいで、防音の効果まで備えられてしまったのかもしない。

守るために考案された文字列が、牙を剥く。

なああにが守るだああ！　ひひっ、あははっ！　全部壊してやる！　殺してやる！

理性と呼ばれるものが全て吹き飛んだ人間の頭に、抑制という言葉は存在しない。

「止めて……！」

絞り出した音は、しかし届かない。届いたとしても、暴走という方向で動き出してしまった運命の歯車は、止まらないのだ。

「止めて止めて止めて！　それには……それは駄目！！　駄目なの！？」

皆が……！？　おばさんが！？　ユウリが！？

みつともないと蔑まれようが、罵倒されようが。それでも涙を流さずにはいられない。

懇願して救われるのなら。叫んで叶うのなら。神様を信じることで助けてもらえるのなら。

何でもしますからと、彼女は祈った。

この世の全てに、懇願した。

世界の理不尽さに、叫んだ。

カイフィルド。これでお前の存在の意味は、終わりだあ

ポウツ、と青白い光が甲冑の腕に纏わり付くようにして生れる。

そのまま腕を前方にかざして、またあの不気味な笑い声が町中に響き渡った。

「止めなさいよ！　止めなさいよっ！　止めるおおおおっ
っ……！」

絶叫と同時に、既に肉体の限界を迎え始めていた、酷使し続けた

結果によりパンパンに膨れ上がっていた足を無理矢理に、前へ突き出した。

ろくに酸素も取り込まず、吐き気を常に抱えながらも、それでも足を止めることだけはやりたくなかった。

止める止める止めると、呪詛のように呟きながら。段々と輝きを強くする甲冑の　恐らくは魔術に、リフェウルは全力で走る。

それでも世界は、ちゃんと動いていた。様々な、方向に。

爆ぜろ！

そう、悪魔が囁いた瞬間。

「いやあああああああつっつ！？」

火柱が上がり、その熱風は彼女の涙を蒸発させる。

無茶苦茶に、すでに完成した魔術を混ぜ合わせるにより生れたエネルギーの集合体。

それにより舞い散る鮮血と肉塊の光景は、まさに悪夢。

彼女自身もまた、足が地面から離れ、祐に五メートル程、飛ばされる。

あひゃひゃひゃっ！　いひっ！　ふはははっ！

アルフィンの記念日である今日の、午後六時半過ぎに。

そうして。

そうして悲劇が、完遂された。

第十六話　そして空が轟く（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

更新、おくれてすいません。実は、今年は、三月ぐらいまでまともに更新が出来そうにありません。勿論、できればやらせていただきますが……。

2011年も、もしよければ見てやってください、お願いします。

第十七話 弔い

それは、絶望的な光景だった。

何百メートルも離れているのに、爆風にのつた、人体が焼けた独特の腐臭が鼻を刺激してくるのだから。

心臓が弱い人間なら過呼吸や錯乱状態に至ってもおかしくない光景に、常人だとしても、それでも意識を失うか一目散に逃げ出すかの二択だろう。

だがそれに向かって、リフェウル・ハウは歩いていった。だから彼女は常人ではない。異常なまでの、お人好しである。それがとある少年に感化されての事なのかはさておき、そのことは覆すことの出来ない事実。

もしかしたら、それはただ、認めたくなかっただけかもしれないし、誰でもいいから、生きている者の姿が見たかったのかもしれない。いやそもそも、彼女はこの、心に押し掛かるような重圧、吐き気や焦燥感をどこかに投げ捨ててしまいたかったのかもしれない。

「……………」

どちらにしる、彼女が歩みを止める理由にはならない。

大勢の人々を運ぶ、あれだけの大きさを持つ魔術で作られた箱状の乗り物の残骸は、見えない。術者が死ねば、当然、魔術は消えるのだから。だから彼女は、なるべくそれを視界に入れないように。

視界に入ってしまった時は、その記憶を消し去ることに努めていた。何故なら、そこにあるのは肉塊と、赤黒い血液と、男の狂った笑い声だけだから。殺人の快感に酔いしれているのか、今は妙に大人しいけれども。つい数分前に、沢山の人を殺した、笑い声だけだった。

私怨を第一に考え、目的を放棄し手段を選ばずに行動した、アイマンへと。リフェウルからすれば、名も知らぬ大量殺人鬼のもとへと。彼女は静かに、歩み寄り。

決して、分らないはずなのだが。

「殺してやる」

人が思い浮かべる悲劇の想像に、際限は無かった。

リフェウル・ハウは、一時期、亜人の手によって育てられた身だ。子供に恵まれなかった夫婦が、捨てられて施設にいた彼女を拾い、育てたのだ。

その理由は、自分達の後を継がせるため。記録係とは元々、アクデイやウィクジブスなどの国の王室の人間が、民衆の置かれている状況や近隣諸国の状況を知るために設けた機関であり、彼女の義理の両親はそこに所属している人間。

そうして彼女は、記録係としての知識を詰め込まれ、そしてそれは皮肉にも彼女にとって最大の武器となりえていた。

《灰に帰れ》と、アイマンは殺人の言葉を紡ぎ、生み出された物は停滞する。

「公式文章、三十五番。対人用の中級攻撃魔術よね？」だがリフェウルは殺人の言葉をいとも簡単に解析する。

記録係は時として戦争をも観察し、そしてその中から安全に生き残るために魔術を知る。

そのため彼女の頭の中には、公式文章として登録してある魔術全てが、蓄えられているのだ。

これが、リフェウル・ハウの本当の能力。単なる造形科の優秀な生徒ではなく、この世界で最も有名な公式の魔術を全て把握し、使用し、対処出来る者。

勿論それは、弱点すらも自分の頭の中にあることを意味していた。『早く逃げないと、その辺りのゴミくずみたいになるぞ?!』不気味な声音は黄昏の空に響く。

嘲り、蔑み、望み、妬み、叫び、滅し、傷付き、傷付け、また叫

んでいる。コイツは次に何をやるのだろうか。背景の輝かしさがかえってこの男の矮小さを表しているようで、その中であの男は、まるで自分は優れた人間だと言っている。　　彼女はうんざりしたように息を吐くと、太陽光の恩恵を失い始めている暗がりの道に生存へのルートを描き始める。

「三十番から三十九番までの魔術は全て、威力だけに固執していたせいで発動後のコントロールは殆どできない……！！」

そのため直進しかできない魔術、その軌道に変化を与えようとすれば、方法は追加詠唱のみ。

「ただ追加詠唱は元々、不安定な魔術内容を安定させるための技術。汎用性を重視した上だとしても、「完璧」を追及している公式の魔術に追加詠唱を施せば、それはもうオリジナル……公式文章ではなくなるわ」

その言葉に眉一つ動かさず　　というより、まず顔が見えないのだが。だが、特に気にしている様子も見えず。

彼女もただ単に時間が欲しいだけだったので気にせず、いやむしろ好都合かと、相手の魔術の種類、手の構えから推測した角度、道の幅、それらからのルートで進めば目的が達成できるのかを導く。そう、導こうとして、断片的な情報を合わせる作業の途中で、しかし殺人鬼は嗤った。

『悪いな、私は人の話を聞かないんだ』

その台詞と共に、一箇所だけ時が止まっているように見えた男の手中の魔術　　カイフィルドの使う、手に燈しておくタイプの魔術よりも一回り大きい火球が、弾け跳ぶように運動を開始。

紅い球体が地面を抉り飛ばしながら、そう速いスピードではないものの確実に距離を縮めてくる。舞う大地の鱗片が、沈みかけた太陽を完璧に隠してしまう。

奮起する前に圧倒されそうだったが、リフェウルは唇を噛み締めその痛みや口の中に広がる鉄の味によって恐怖を霧散させた。彼女は半身の構え　　左半身を前に突き出し、右半身を後ろへ引く体勢

を。

その、回避行動を取っているのか疑いたくなるほどの動きの少なさに、敵であるはずのアイマンすらも同情を含んだ溜息を漏らす。

『……………は？』

漏らす、はずだった。リフェウル・ハウがこちらを嘲笑い、何故かギリギリのレベルで火球がその横を素通りし、彼女の背後で凄まじい轟音が咲き、結果、無傷の少女……………こんな異常の四連続イレギュラーにアイマンはとてども、偶然だと客観視できなかった。

「だから言ったでしょう？ その魔術は、直進しか出来ないの」

じわりじわりと、逆転していく。五感のどれでもない何かが、有利不利の天秤が傾き始めていることに、ここまで来て初めて理解し始めたのだ。

『そんなことは知っている！ だから私は……………私はっ！』

「だから私に向かつて、真っ直ぐに撃ち放った？」

『そうだ！ 直撃は免れたとしても何故、飛び散る地面や建物の残骸の欠片があたらぬ？！』

それを聞いてポロポロのリフェウルは 制服の所々だけがポロポロになっっているリフェウルは、愚味ねと冷ややかな視線を向ける。

「恐らくその甲冑、『公式の魔術と銃器を搭載した理想的な兵器』じゃなくて、『公式の魔術しかろくに扱えないがために、力の埋め合わせとして銃器を搭載している不完全な兵器』なんですよ？

公式文章の魔術っていうのは、さつきも言ったように汎用性が高いものが登録される。そしてその次に重視されるのは、使用される魔力がどれだけ少ないか。そりゃあそうよ。どれだけ簡単に使い勝手がよくても、消費する魔力が多かったらそう何度も使えないんだもの」

『何を言っている……………』

「いい、本当に力のある兵器を使いたいのなら、私ならまずオリジナルの魔術を使うわよ。完全ではないがために追加詠唱を必要とし、そのせいで魔力が余計に必要なとしても、公式との差はおおよそそ

こでしかない。

考えてもみなさいよ。公式の魔術を連続で使用することで沢山の人を殺すことに対して、オリジナルがそれを一撃で葬れば、それだけの力があれば、簡易と応用の二つの魔術形態に優劣の差はなくなる。

そして兵器は力。もう一つの国と冷戦状態になつてる国にとって、力は沢山ないと色々不便よね。そしてそんな、人が乗らないと起動しないような、魔術が扱えないようなそれを使うには当然、大量の兵士なり何なり、とにかく人間が絶対に必要なはず。

だね。エリイがそうなんだけどさ、偶にいるわよね、第二魔力が異常なほど欠如している人間　魔的エネルギー欠陥症っていう原因不明の病気の患者が……」

ふとそこで彼女は、長々と台詞を紡ぎ続けてきた口を閉ざし、思わせぶりの表情を取り繕った。

（こいつ……まさかこれだけの判断材料で、ディンの構造を……！？）

何故彼女がその答えに到達したのか。いや、そもそも何故、眼前に殺人鬼が居るのにここまで頭が回るのか。一体、この餓鬼は何者なのか。この町の人間を調べた時に送られた資料、紙に記されていたのは、「もとは捨て子で、義理の両親も既に無くなっている」という特別でもなんでもない、ただの情報のはずなのに。　男の中で、得体の知れない何かという単語に対する恐怖心が、彼自身によつて膨張していく。

あたりはすっかり暗くなっている。彼は体中から出てくる冷や汗を、彼は装備のせいで拭うことができなかった。それも手伝って、苛立たしさが尋常ではない。

だがそれを知ってか知らずか、リフェウルは表情を崩さない。「極端に少ない訳じゃないだろうけど、魔力が少ない人間もいる。そんな人間をその兵器に乗せて、もしその兵器が独創の魔術文章なんかを使ったら、まあ、あつという間に魔力が空っぽになつてとて

も兵器としては使えないわよね。

だから仕方がなかった。生命のエネルギーとも見て取れる第二魔力が無くなって、動けなくなる兵器を作るよりも、活動時間を長くするために威力を抑えた兵器を大量に作ったほうがマシってね」
一体どれほどの犠牲がこの実験に使われたのだろう。公式の魔術を使用した方が効率がいいというデータが取れるまで、一体どれほどの人体実験が行われたのだろう。

恐らくこの調印式も、亜人の生態データを取る意外に、あの兵器を強化するといった目的もあるはず。差し詰め、魔力を作り出す機械でも開発して無人化でもするつもりだろう。そこまでいかなかったも、少し頭を弄ればあの兵器を動かせる人間が一気に増える。コイツらにとって人は、甲冑を動かせるエンジンだけでしかない。

この仮設が頭の中に立ったとき、自分でもよく分からない感覚に陥った。ちよつと考えただけでも、ここまで研究が進むのにどれだけの血が流れたのか分かってしまう。

「だ、だからなんだ。構造が理解できたからといって、文字も書けない学生が何をするというんだ……！」

喚き散らす男の声が、憎悪を熱湯のように沸き立たせる。

「どれだけこの力を否定する言葉を並べようと、公式文章には届かな完全なる力」

「一つだけ！」

「っ！？」

「一つだけ、教えてあげる……！」

静かな殺意は、それが芽吹いた時よりも遙かに肥大化していた。だからもう、我慢の限界。

彼女は、火球が捲りあげた、拳ほどの大きさの地面の破片を掴み取る。凹凸の鋭利さが目立ち、それは掴み取ったその手に切り傷が生れそうなほど。

それを彼女は、左の二の腕に突き刺した。何の躊躇もなく。何の逡巡もなく。

「うっ！！ ぐうああっ！？」

夜の始まりを謳う様に吹き荒ぶ風に、少女の苦痛に染められた声音が木霊する。

だが最初の絶叫以降、彼女は呻かなかつた。ただ奥歯を噛み締め、どくどくと流れる自分の鮮血を人差し指で撫でて、制服の袖やスカート、様々なところへ明らかに人語以外の文字を記していくのだ。

「いくら、完全、だからって……。私は……。私は……。！！！」

息を吐くたびに彼女の体が小刻みに震える。

激痛のせいで一度、意識が飛びかけて、今度は出血のせいで頭がぼうつとしてきた……。早く止血しないと、本当に危ないかもしれない。

そう。彼女は早く応急処置を施したいところなのだが。

（文章が書いてある制服は破けない。かといって、他に止血に使えるものはない）

だからリフェウルは、相当大的な賭けに挑んでいる。自分の体が自分の意思で動かせるうちに、ほぼ知識だけで（それも幼い頃の記憶である）一国の最新型兵器一体を倒す。

（我ながら、馬鹿みたいな作戦……。いや、もう作戦とも呼べないわね）

《捻くれ者の矛》制服の一部が発光する。

ただどアイツだけは許さない　そうして手にした武器は、矛と言っておきながらその形状は明らかに棍棒のそれ。二メートルほどの、先も尖ってなく、やはり鈍器としてしか使用方法が見えない代物だった。

勿論こんな、何がしたいのか訳の分からないものは公式文章ではない。成功したのだ。生れて初めて、オリジナルの魔術文章の作成に。

“大体、リフェウルの魔術文章は適当すぎ！　あんなちぐはぐな単語列記して、何がしたいのか全然分からないんだもん！”

「エリイ、あんたの言った通り、文章の意味じゃなくて単語の意味を考えたら出来たよ」

棍棒の長さを丁度三等分するように握り、回し、振り。まるで昔から使っていた物のような感覚と羽根のような軽さに、彼女は柄にもなく声を漏らして驚いた。

「これがアタシの……アタシだけの…………！」

「何をするつもりかは知らないが」

声の主をキツと睨め付けると、先程の火球を構えているのが見える。

それを見て、緊張しているのが自分でも分かった。本来ならばこの武器を手にした時から覚悟しなければいけないのだが、まだ彼女は戦場を飛び交う殺気の痛さになれてはいない。

「それを私が待つとでも思ったか？」

だが意地の悪いことに（もしくはわ、そうではなくそれが当然なのか）男はそんなものを待つてはくれない。

だがそれによって彼女の、半ば強制的にだが（投げやりな態度とも取れる）震えが止まったのもまた事実。

リフェウルは半身の構えを取る。左手と左足を前へ突き出し、右手と右足は後方へ伸ばすようにして、そうして棍棒を構える。体は右の方向を向いていた。傍から見れば突きを放つ人間の構え。あの男の手から放たれた火球を砕こうとしているような、そんな体勢。

だけど違う。リフェウルは最初の、棍棒の長さを丁度三等分するような握り方はしていない。右手は棍棒の腹を掴んで、左手に至ってはほぼ完全に先端を、こちらは握るといふよりも下に手を添えているといった感じ。

（あの魔術は確かに強い。威力だけを見れば上級。だけど脆すぎるの。対人用の中級止まりなのは、そういった弱点のせい）

だから力の中心点を叩くことが、この魔術に対する攻略方法だった。つまりは火球の、中心。少しの衝撃で、この魔術は崩れる。

勿論、愚直に叩いたりすれば統制を失った力の塊が、たとえ魔術

フェウルが耳にしたのは、棍棒が核に触れた音だった。

そんな一瞬の流動を見逃さず、停滞している火球に刺さった残り数センチしかないそれを握ると、力の限り横へ薙いだ。

なにやら形容し難い音を出して火球は棍棒から外れると、横の民家へぶち当たった。玄関を吹き飛ばして家具を焼き払い、さらには家の壁を破壊して向かい側の通りが見えるようになってしまった。

だがそれよりも驚いたのは、そんなものに数十秒埋まっていたはずなのに、棍棒には欠けた様子すらも見えないこと。

だが驚愕に脳を支配されるよりも早く、横からあの火球を飛ばした通りの方から、凄まじい爆風と轟音が届いた。爆発したのだ、魔力が。恐らく原因はリク라마現象に酷似したものだろう。

(あと少し遅れていたら、棍棒これごともっていかれてた……)
今更ながら心臓に、体に良いものではないとすぐ分かるような圧迫感が押し掛かる。

だがそんなリフェウルよりも心臓に負担が掛かったのは、大の大人の方だった。

『お前、何をした?!』

再び手を前に突き出し絶叫するアイマンに、しかしもう動揺する必要もない。

今の轟音を聞いた後だと全然怖くないわねと苦笑しながら、リフェウル・ハウは異質な形状の矛を構え、そして叫ぶ。

それは宣戦布告。完全を崇拜する者への冒?の言葉。

「アタシを相手に、そんなものありふれた言葉が通用すると思わないで!」

《囁りを聞かせる》

《怒号よ降り注げ》

暗闇に小鳥を模した炎が群れ、それよりも遙か天上に雷で形作られた鷲が羽ばたく。

一羽の鷲は数十羽の小鳥を丸呑みし、数十羽の小鳥達は一羽の鷲の羽根を雀り取る。

多対一の魔術同士のぶつかり合いだが、それから数秒も経たずに勝敗は決する。 何度やっても、炎と雷は同時に消滅していた。

「ハア、ハア……。くどいぞ、アレイチエルド」

「それはこつちの台詞だとお姉さんは思うのだけれど。彼方にそこまでする義理はないって言うのに……」

「僕は無駄なことはしない主義だよ」

「そう」

はい休憩時間終了と言い放った途端、拳が飛んでくる。

カイフィルドは右手の甲で弾くと彼女の腕の内側へ体を捻じ込みそのまま腹部を殴りつけるかと思いきやフェイントを掛け、背後に回り首筋めがけて肘打ちを放つ。

「がっ!？」

首を激しく振り脳が揺れたのか、覚束無い足取り。そこから畳み掛けるように、躊躇なく彼は魔術を右手に燈し、今出せる力の全てを捻じ込んだ。

だが彼女の方が一枚も二枚も上手だ。あの機転による攻撃は成功したが、それ以降の動きはフェマミーの反応速度が余裕でカバー出来る範囲。

結果は、右手は軽くないなされて腹部に膝蹴りをくらい、さらに回し蹴りで民家に飛ばされるといったお釣りが付だった。

「痛い……」

「カイフィルドさん!？」

白髪の少年が寄って来るのが見える。本当なら来るなど叫びたいところだが、もういよいよ疲労やら痛みやらのせいで全く持って余裕がない。

僕は情けないなど、自嘲する気力すら湧かないのだ。

だがそれ以外にも、理由はある。

(エリア君、すまない……) それは若干の後ろめたさ。

彼はもう気付いていた。十分ほど前に一つの大きな魔術が発動されたのを感じ取り、それ以降、移動していた微弱な魔力の全てが消えて去っている。

それは嫌でも脳裏をよぎる、戦場に生きる者の当然の考え。

だからカイフィルドは、ただ自責の念に心の中で謝罪するほかなかつた。

「大丈夫、動けるよ」

ロングコートに付いた砂埃を払い立ち上がる。辺りを見渡すと、彼女は向かいの民家の屋根の上にいるのが分かる。

「今の、本気じゃないからね。五十パーセントだよ」

そういつておどける姿にも、どこか無理が見られる。確信こそないのだが、エリア自身も訝しい気持ちが始めていた。

尤もそれは、いらぬ第三者のつまらない挑発に霧散してしまうのだが。

「あら、私は三十パーセントよ」

「うるさい」

左手に炎を燈し投げつけて、それを追うように自分も跳躍する。

二階建ての民家の屋根に到底届くはずもないが、右手に燈した炎を爆発させて更なる跳躍を凶った。

そこで先に投げつけた炎が彼女に当たり、屋根の一部が吹き飛び煙のせいで視界が制限されてしまう。

（恐らくここで、このままだとカウンターをくらってしまおうから…！！）

なんと彼は、後ろにやっていた手を前へ突き出し、爆発を起こしたのだ。力の働いていた向きも量もでたらめになり、あつという間に彼の体は上昇の力を失う。だがそれでよかった。何故なら眼前を、女性の手が通り過ぎたのだから。

「ええ！？」

唾然とするフェマミーに、しかし今度こそは仕留めて見せると、浮遊感が過ぎ去り落下し始める体をもう一度爆発で浮かせた。

それから次の行動は、殴るのでも蹴るのでも魔術を使うのでもない。

ただ単純に彼は、体当たりをかましてやったのだ。

「なあ　っ?!」

「これだけ接近すれば、何も仕様が無いだろう?」

だがそこでハツとする。

何とか近付こうと意識をそちらばかりに向けていたため追加詠唱を忘れていたのか、最初に手に燈した時に注ぎ込んだ魔力を全て使い果たしたらしい。早く魔術をもう一度発動させなければいけない。だがその時、微かな電流が体中を走った。

「意識の集中を妨害するには、十分すぎる量かもね。私の魔術も、追加詠所無しではこれが限界だったのよ」

「な……:に?」

あの、本当に些細なことのせいで集中が出来ず、ほぼ途中まで作っていた魔力の構築が全て消え失せてしまった。

(まずい、今何かやられたら僕は……!?)

追加詠唱も間に合わない。何も、出来ないのだ。

最良で、落下して全身骨折。最悪で、このまま彼女に死体にされる。「究極の」どころか全力で負の選択肢だなど、彼はまるで他人事のように毒づく。

やがて体が沈み始めた。それは落ちているという事なのだが、この状況を打破できるだけの策が思い浮かばない彼にとってはどうでもいい事だ。

なのに、彼女は一向にこちらを攻撃してこない。

「……趣味の悪いお姉さんだ」

ボクが動けなくなつてから殺すつもりか?

「お互い様でしょ?」

その瞬間、肺と心臓を握りつぶされたように、酸素と血液が不自然に体中を巡つたのが理解できた。落ちたのだ、あの高さから。もう満足に手も動かせない。骨もどこかが折れただろう。痛みと言

う痛みが、凝縮されて骨を叩き続けるようだ。その度に痛みは伝わり、呻きそうになる。

「ぼんやりとする視界は、もう何もまともに映せない。声も聞こえない。」

ああ、これは完全に死んだな。

唯一動く唇で、そう小さく呟いた。

リフェウル・ハウは棒術など習ったことがない。槍術も習ったことがない。大体、これからも習うつもりはない。だったら何故、今彼女が持っている武器は二つの武術に通ずる物なのだと問われたら、苦笑して沈黙するのが正解だろう。

だが得物を扱うその姿は、意外にも悪くないものだった。突くかと思いきや薙ぎ、突き上げると思いきや引く。変則的な動きにアイマンはたじろぐ。

時たま放つ魔術も軽々と避けられて彼は段々、冷静さを欠いていた。つた。

尤もそれは、リフェウルが引き起こしている事なのだが。相手と一定の距離を保つことによって、まず大きな魔術を使わせることを躊躇わせる。自爆することを恐れさせるのだ。そして変族的な動きで惑わせ、全く隙を作らないことで相手の攻撃のチャンスを限りなく少なくさせ、もし攻撃が当たると判断した時に相手は、確実に当たるよう速く発動できる規模の小さい魔術を使うよう仕向ける。

そしてその程度の魔術ならば、彼女の知識をもってすれば避けるなど造作もないことなのだ。

(でもこのままじゃいけない……)

彼女が血で書いた文章　魔術のストックは今手にしている物を

含めて四つ。さらに出血の問題もあるため、時間も無い。お世辞にも多いとは言えない手駒と持ち時間で、彼女はこの殺人鬼に勝たなければいけないのだ。

『くそっ！ 離れる！』

痺れを切らしたのか脚部のホルスターに手を伸ばし、やけに口径が大きいハンドガンを取り出す。すぐに引き金に指を掛けようとしていることから、もうすでにコッキング状態なのだろうか。

「させない！」

だが口径が大きかったのは幸いだった。そこから放たれる弾丸には身震いするが、おかげで前に突き出した棍棒はすんなり銃身の中に入っていく。ガツンツと鈍い音が響き、アイマンがそれに気付く頃にはもう遅かった、彼は引き金を引き、だが弾丸は放たれることなく銃の中で暴れまわり、ハンドガンをただの鉄の塊に変えた。

いよいよ苛立ちを隠すこともなく言葉にならない奇声を発し、今度は両刃のナイフが、それぞれ両手首部分から飛び出す。

『あああああっ！』

「くうっ!？」

手に押し掛かる腕力の重さ。片腕では庇いきれないと咄嗟に左腕を伸ばし、支えに回したのが失敗だった。まるでポンプのように血が噴出し、その分だけ頭痛や目眩が酷くなる。

堪らず彼女は、二つ目の魔術を発動させる。

《愚者の浅知恵》

これまたオリジナルだが、成功だ。

血に染まった左手に仄かに霞が掛かり、彼女は尚も自分の体に重圧を掛け続ける刃にそれを叩き付け。間髪いれずに両手を入れ替えて、左手で触れただの二つの刃を力の限り殴りつける。

だがそれだけで、ほんの少しだがナイフの切っ先が欠けた。

(分解とかそこら辺の理屈は専門じゃないから正直、苦手科目なのよね……)

本来の意味の「分解」ならばナイフごと消えてもおかしくないの

だが、彼女はその間にある「材質を見極めるための魔術」やら、「分解が円滑に進むよう複数の物質に精製するための魔術」などを全て省略したため、効果はこの程度だったのだが……。

「でも、これだけで十分」

欠けたナイフの切っ先を広い、装甲が一番薄いと見られる眼の部分にほうる。しかし当然、傷は付かず、だが尖った部分が引っ掛かってしまう。片方だけとはいえ視界を遮られたことが、焦燥と苛立ちにより磨耗していた彼の精神に大きな不安を植えつけて、アイマンは先のない刃をぶんぶん振り回す。

「はああああ！！」

だがそれすらも無視し、彼女はそこ目掛けて、渾身の突きを放った。

レンズの割れた高い音と、人肉が裂ける低い音とが重なった時に生れる音。

『ぐうああつつつ！？ がああああああああああ！！』

それは怒号と苦痛が入り混じった、醜い絶叫だった。

アイマンは自ら壊した道の上でのた打ち回り、目を抑えようとする度にガシャンガシャンとナイフ同士がぶつかり合う。

だがそれでも、彼女は止まらない。

彼が暴れるせいで手元から抜けてしまった棍棒を、取り戻さなければいけないのだから。

それはつまり。

『ひいつ！？』

自分がこの棒を握ったのが分かったのだろうか。止める止めるんだ止めてくれ、そう震える声音で訴える男の目から、しかしリフェウルは躊躇なく自身の武器を抜き取った。

『あぎ がっ！？』

激痛への抵抗を唱えるのは最早、声ではない。

「なんであれを……皆を、逃がしてくれなかったの」
冷たい瞳に、仄かに憂いがうつる。

『よくも！？ よくも！！』

「なんでつて訊いてんのよ！」

聞く耳を持たない男の行動に苛立ちを隠す事無く、もう一つの欠片を残った眼にあて、その上に棍棒を乗せた。そこで引きつった声が聞こえて、なにやら急にブツブツと呟き始めたと思うと、どういう仕組みなのか両手の部分だけ鎧が外される。

そこには眼を背けたくなるような、もう殆ど手の造形が変わってしまっているんじゃないだろうか、酷い火傷の光景。

『か、カイフィルドの奴が、やった。軽く触れた程度だったから、装甲は耐えたが、熱までは処理し切れなかったんだ……』

「まさかそれだけで！」

『ち、違う！ まだこれだけなら良い。問題は他のデインが全滅したということだ。多分カイフィルドだろう、町に残しておいた三機とも連絡が取れない。』

いいか！ これを一機作るだけでどれだけ金がいると思っている？！ そんな代物をあんなに壊されて、私の立場が危くなるだろう！』

「そんなことで？……そんなことなの？！」

彼女は奥歯を噛み締め、棍棒を強く握り。対してアイマンは、怯えながらも声を荒げる。

『そんな事と、どうして言える！ 国一つ滅ぼせる金額の、その数倍だぞ！！』

クソツ！？ 元々この騒動は、あのアレイチエルドが私に持ちかけてきたんだ！ 必ず成功する、だから協力しろと！ 上の許可も取ってないんだぞ。ただ絶対に秘密にしろといわれて……。私は関係ない！ 関係ないんだ』

説明する気などサラサラないのだろうか、言葉の最後は最早自分への言い訳にしかなくなっておらず、その後も支離滅裂な文章の言葉を並べて、急に発狂したと思えば怒鳴りだしたりと、人の神経を逆撫でするような言動ばかり。

だがそれをリフェウルは聞いていない。

「……………」
やはり訊くのは止めておけばよかったと、彼女の心に微粒子ほどの大きさを残る理性が言う。コイツをボコボコにして気絶させたら、すぐにあの二人の所へ行けばよかったと。

聞いてしまえば、もう立ち止まれないじゃないか。

怒りから理性を護ってくれる、精神を安定させるためのある種の装置は、とつくの昔に許容量を超えていた。

でもこうなつて初めてだなんて。アタシもエリイのこと言えない、中々の甘ちゃんよね……………。

「エリイ、アンタだつたらきつと殺しはしないでしょうね、あの時みたいに…………。でもゴメン、今回ばかりは無理だわ。もうアタシ、コイツの体をぐちゃぐちゃにしたいとか、そんなレベルの怒りを超えちゃっているもん」

スツと棍棒を甲冑からどける。圧迫される感覚が消え失せて楽になったのか、彼女のあの呟きを聞いていなかったアイマンは何にも怯える事無く、先程までとはまるで別人のように素早く立ち上がり、（大型の動物を一分で殺せる毒入りの、仕込針だ……………！）

そうして手の平を彼女に向ける。もしリフェウル・ハウの言葉が届いていて、こんなこと思わなければ、助かったかもしれないのに。彼は最後のチャンスを、自らの行動で棒に振つたのだ。

「……………」

針は 手の平から飛び出す伸縮式の仕込針は作動しない。

そもそもアイマンが、動けないのだから。

「な……………何なんだ、お前は……………」

眼前の少女の瞳に宿る禍々しさが、殺気が、狂気が、溢れんばかりのどす黒い雰囲気だ。

大の大人が動けなくなるほどの怒り、逆鱗に触れたことを知った時にはもう遅い。

リフェウル・ハウという存在から滲み出るもの全てが、規格外だ

った。

《永久処刑》

二人を囲むように正方形の黒い線が引かれ、その部分の地面がぐくとせり上がってゆく。黒い線に犯された地面は気味の悪い音を立てて膨張し、泡立っているようにも見える。そしてアイマンとりフェウルをその中に残したまま変形、結果、二人を閉じ込める箱へと変貌した。

「今のアタシに出来る、最高の造形魔術。『有形空間境界線』。エリーの『空間呼応』に似ているところはあるわね」

唯一つ違つとすれば、これは「有形」。

「ここがアンタの、処刑場よ」

血がこびり付いた棍棒を捨てる。代わりに、右の拳にいつも異常に力を注ぎ、全てを終わらせると誓いを込める。

暗闇の空間の中で、少女は両手を掲げた。

右手には、患者の浅はかな知恵を宿し。

左手には。

『ふざけるなああつ！』

激昂した男の右腕が猛威を振るう。だが彼女の冷徹な視線はそれを見切り、患者の力が宿つた右手で甲冑の腹部に触れる。

パリンッ

白銀の装甲にヒビが入った。だからなんだとアイマンは、今度は左腕を動かそうとするが、その瞬間彼の脳に違和感が駆け巡り思わず視線落とす。

「ここは私の場所。公式文章ホームにもあるでしょ、境界線を定めて、その範囲に特殊な事象を規定化する魔術。

この空間の規定は、重複。一回の分解魔術じゃ、私の実力なんかではあのナイフぐらいをせいぜい欠けさせる位しかできない。その鏡に至っては、ヒビを入れるのが精一杯よ。

でも、その壊す魔術を何回も　そう、重複すれば！」

バギッガッ！！

『装甲が、崩れていく……?!』

この空間では、起こる事の全てが重複される。だから一回しか行われなかった分解魔術が何百回も繰り返され、装甲を砕いたのだ。ただこれは、彼女自身にも危険が及ぶ。起こったことが全て重複されるといことは、彼女がアイマンの攻撃をし、それを少しでも喰らえば例え軽傷であろうと関係ないのだから。

それが彼女の、あまりにも危険な賭け。

それに彼女は、見事かつて見せたのだ。

「おばさん、ユウリ、町の皆……ありがとう」

痛みも、怒りも、憎しみも、全てかなぐり捨てて残った悲しみに、今彼女は向き合う。

『や、止める！ 止めてくれ!』

左手を後ろへ引く。彼女が残した、最後の魔術^{言葉}。死者を弔うために最後まで使わなかった、彼女の物語、その第一幕終焉の幕引きの言葉。

それは、

《 》

『やめ……。へ?』

それは、リクRAM現象。魔術の失敗時に起こる、傍迷惑な現象。男の顔が歪む。助かったと、殺してやると、心の中で様々な感情がひしめき合い、混沌となっている。とにかく今は、この喜びを表現しなければ。このクソ餓鬼を殺さなければ。油断は出来ない、いつカイフィールドのクソが帰ってくるのか分からないのだ。

『しっ……ぱい、した? 失敗? 失敗!? 失敗なのか!』

彼は火傷の傷の痛々しさが残る手で少女の頭を鷲?みにすると、人間の頭を破裂させるための魔術を起動する。

思い出したのだ、あの、人を殺した時の感覚を。あの、快感を。だから彼は湧き上がる高揚感を包み隠さず、どんな魔術にしようかと狂う。

『は、はは、アハハあっつ!? 俺の勝ち! 俺の勝ちだ!!!』

完全に壊れたアイマンは、醜い罵声を次々に言い放つ。だがそれすらもリフェウルは、汚物を見るような視線で見詰め続けて溜息を吐いた。

「リクラーマ現象。魔術の失敗時に起こる、要約すれば爆発現象ね」

『ああ？』

「分からないの？ この空間は、『事象』を重複するの」

『な、え、は？ いや、そんなまさか……』

男の顔が、再び恐怖に歪み始める。涙を滲ませ、また、あの惨めな救いを懇願する声をあげるのだ。

もういい加減うんざりだと、リフェウルは苦笑を浮かべた。

「アンタの魔術と、アタシの手。どっちが速くお互いを傷つけるか、勝負する？」

ああ、あの仕込針は無駄よ。分解魔術で触れておいたから」

暗闇のせいで相手の表情が見えないのがいけない、ただ恐怖を増幅させ、焦燥の度合いを加速させる。彼はどうかしようともがくが、しかし彼女の方が一枚も二枚も上手。

次第に、脂汗に塗れた体中に寒気を感じ、全身の震えが止まらなくなる。いや、果たしてこれは、寒さから来る震えなのだろうか。違う。これは……。

だがその思考を巡らせる事も、彼女は許してはくれない。

「アタシの物語に手を出したことを、後悔すればいいわ!!」

『や、やめ ツツツ!？』

そうして、

隔離された暗闇の世界で、重複が始まった。

早く、あの馬鹿とアイツの所、行かなきゃ……。

一人の少女が、全身に傷を負いながら、それ以上に悲惨な傷跡が残る道を這っていた。

やったからね。おばさんの仇、アンタの代わりに、やっといたからね。

人の死体の上を這って、彼女はただ前を見詰め続けた。

……………んね。

ぼたぼたと流れる液体は、血だろうか。腐臭を放つ人体を濡らし、ボロボロの道を濡らし、傷だらけの自身の腕をも濡らす。

ごめんね！ ごめんね！……………アタシ、馬鹿だからさ。馬鹿だから、全然分らないよ、皆の気持ち！ 嫌いな？ 蔑みたいの？ なんて心配してくれる人や、話しかけてくる人がいるの？ 何でアタシなんかを、好きでいてくれる人がいるの？

前が見えない。滲んでしまっただけで見えない。きつと血が出すぎて、意識が朦朧としているんだ。早くどうにかしないと。そう思い辺りを見渡してみると、月明かりにさらされて何かが光ったのが見えた。

ごめ……………つ。うあ、うあああ。ひぐうつ。ひつぐ。うう、ああああ！

それを見た時の謝罪の言葉はしかし、嗚咽に掻き消される。

それはユウリの髪飾り。もう二度と会えない、一人の少女が大切に抱えて行った物。

泣きながら彼女はそれを掴むと、制服のスカートを少し引き裂き、千切った布地を腕に縛り付ける。結ぶほど長くはなかったので、髪飾りで留める。

ユウリ、本当にごめんね。アタシ、何も出来なかった！ ごめん！ ごめんなさい！

次第に体が動かなくなってきた。頭がぼうつとし、何故か体が震えて仕方がない。もう彼女は、全身が麻痺してしまい、体温すらも感じられなくなっていた。

”どういたしまして”

だからそれは、きつと幻聴。自分の頭が都合の良い幻聴を作っているのだと、彼女は思う。だってその言葉を告げる事の意味は、彼女意外には知らないのだから。

だがユウリの声は、鮮明に聞こえた。

少女は膝を抱え込んで、愛おしそうに左腕に触れる。そこに付いている髪留めを撫でて、それだけで十分よと、瞳に水滴を浮かべたまま彼女は静かに笑った。

「エリイ、アタシちよつと休むわ……」

そうして、大事に大事に握り締める髪留めが留める布には、最後の、リクランマ現象を起こした魔術文章が。

彼女が、自分にとってのこの騒動に終止符を打った、全てを込めた言葉が。

そこに込めた想いは、

今まで、^{笑顔}素適な言葉を、ありがとう。

第十七話 弔い（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

またしばらく更新が滞るかもしれません。すみません。

第十八話 英雄の負債

カイフィルドは善良な青年ではない。数年前は口調も違つたし、リフェウル・ハウには悪いが、性格も彼女のように捻くれていた。彼にとつての大切な二人の人間だけを信用し、それ以上の何もかもを、たとえ幸福であつても拒絶する。自分の世界は、自分にとつて完璧であれば良いと思う青年、それがカイフィルド・ランスだつたのだ。

そんな彼が何故、アクデイの王室の人間　しかも次期女王である者の、護衛をやっているのか。

それは偶然と必然が混ざり合い、歪んだ現実となつた為の結果。

彼は偶然にも、手元から大切な物が全て消え失せ、絶望の淵に落ちた。

彼は必然にも、真紅の鱗を持つ竜と契りを交わし、絶大な力を手に入れた。

そんな複雑な運命が絡み合い、今彼はここに居る。ここで、この町で、この通りで、彼は自分の選択が間違つていなかったのかを考へる。考えても仕方ない事を、それでも後悔せずにはいられない。

何故なら青年は、また見つけてしまったから。

昔手の中にあつた大切なモノ　それに酷似した、二人の人間を。だからまた、あえてこう言おう。

彼は善良な人間じゃあ、ないと。

彼はただ、我が侷な人間であると。

運命に逆らい、今まさに再び大切なモノを失おうとしている彼は、そう思うのだつた。

「なん、で……」

フェマミー・アレイチエルドは震えていた。こんなはずではなかったと、おしよせる罪悪の波に理性が乱れたのだ。いかに元帥並の肉体と精神力を持つ彼女といっても、若干二十の女性の心は完璧な無心など会得していない。驚愕に心が彩られることは、そうおかしくないことだった。

しかし カイフィールドに放った魔術が、彼を庇ったエリア・フイーリンツに当たり、そのせいで彼の意識が途絶えたままであるといった状況でも、彼女の心は許さない。

彼女のプライドが、弱さを人に見せることを許さない。

(……………っ！)

唇を噛み締め、思考を逸らす。痛みが悶々とした心情を真っ白にし、彼女はその空白を他の事で必死に埋めた。

幸いにも、自分の戸惑いの表れは、あの魔術師の耳には届いていなかったようだ。表情の陰りを仮面で覆い、フェマミーは笑みを浮かべる。そうして、少々芝居じみていたが、わざとカイフィールドに聞こえるような声を出す。

「あら？ 当たっちゃった？……まあいいか、これで連れてく時とか手間取らないし」

「っ！！」

反応した。これでいいのよと、いまだざわつく胸の内に浮かぶ想いを、無理矢理押さえつける。第一、自分には何も出来ないのだ。壊すことは出来ても、治癒のための魔術なんて学んだことがない。せいぜいどこかの資料で、微かに視界が捉えた程度。そんな人間が誰かを救おうと望むのは、うまく言えないが、何か違うのだ。

「ぐうああ!？」

そこで唐突に、自嘲に繋がりそうだった彼女の思考を、苦痛に染まった男の声が絶つ。

カイフィールドが立った訳ではない。ただ、仰向けの状態から、立ち上がるとうつつ伏せになり腕に力を込めているのだ。たったそれだけなのに、断末魔の叫びが通りに響く。つまりはそれほどまでに、

彼の体は深刻な状況にあるのだ。

しかし。

「ふざ……ける、な」

しかし時として怒りは、その限界点を越えた時、体中の感覚を全て麻痺させる毒薬にもなりうるのだ。

どこか虚ろな瞳はフェマミーを映さず、空を見詰めたまま。指先を動かすこともなく、呼吸をするのもどこか躊躇われる様子。それでもカイフィールドは、顔を泥だらけにしながら、血反吐と一緒に言葉をつき吐く。

「少しの我が侬ぐらい、通させろよ！ いつつもいつつも、肝心な時に体は動かないなんて、そんな言い訳もう御免だ！！」

一体誰に叫んでいるのだろう。少なくとも、自分にその言葉の矛先が向いていないのだけは、理解できる。そしてその言葉の意味も、彼女は同じ境遇の人間として理解できる。

だから彼女は考えた。

今から自分が掛けようとする言葉は、果たして弱さなのだろうか。

私の弱さは、そこにあるのだろうか。

「ぐおおっ！？ …… はあ、はあ ……」

(そんな問いへの答え、ある訳無いわよ)

何度も立ち上がるうとし、その度に悲鳴に近い声をあげる彼に対して、彼女は心を動かす。ただそれは、決して優しさ 弱さなんかではない。この言葉を向けられたのは自分ではないが、それでもこの言葉には、誰かが答えなければいけないと分かっているから。だから彼女は、今この場に居る人間として、この言葉を耳にした唯一の人間として、答える義務がある。

「…………… なら、立ちなさい。半端な覚悟じゃあ、フェマミー・アレイチエルドを止められないわよ」

それは、彼女なりの敬意の表れだ。

(意識も肉体も限界……か)

気を抜くと視界が全て白に覆い尽くされる状態、死んでいるのとなんら変わりないうつ伏せの体制。心臓だけが脈を打ち続け、血液と、そして今は痛みを全身に届けていた。

暗闇に染まった通りを照らす物は、何も無い。それは、先ほどまで町を覆わんと光を撒き散らしていた、二人の魔術が発動していないことを意味する。処刑を待つ者の気持ちが悪く嫌というほど分かった。「立てないのかしら。そうよね、所詮ただの他人だもの。どれだけ見た目が似ていようが、護る価値までは反映されないのよ」

違う、と叫ぼうとしても、もう言葉すら　声すらその口から出てこない。

「もう何も出来ない？」

そう問い掛ける女性の姿が、酷くぼやけて見える。

可視光線の波長を無視して、彼の目は視界の景色を全て灰色に染めていた。出血、内出血と全身打撲、疲労困憊、さらに第二魔力の異常なほどの消費。死んでも不思議に感じない、平均的な肉体の限界を、彼の体は迎えていたのだ。

「お姉さんは待ったわよ。彼方が立つのを、待った……」
ならもう少し待ってもいいじゃないかと、唇だけが動く。

声の出し方を忘れてしまったかのように、もどかしさが胸に募った。さらにそれだけじゃない、どうすれば筋肉が動くのか、今まで自分がどうやって立っていたのか、心身のダメージは忘却を引き寄せた。

「……………っ」
だが。

月明かりが照らす、所々を抉られた凹凸の激しい地面。主柱を担っていた木材が燃えて全壊した、あるいは爆発などのせいで鉄骨が露出している建物。翼がありながら、籠から出られずに焼け死んだ小鳥。町が燃えてもただひたすらに、主を待ち続け死んだ犬。

彼の目に映る灰色の悲劇が、忘却の彼方から誓いを呼び覚ます。

「はあああああつっ！！」

がむしゃらに声を張り上げ、今出せる力の全てを体中の筋肉に供給する。

拳を地面に突きたて、右足を立てる。よろめき倒れそうになるが、すぐさま左の足でバランスをとり、膝立ちの状態でカイフィールドは天を仰いだ。

懐から魔術文字が記された紙を抜き取り、息を吐くような微かな声を絞り出す。そうして紙に記された一部の文字が、発光した。

恐らくは、カイフィールド・ランスが放つ最後の魔術。

逡巡も葛藤も、激痛も疲労さえも捨て去り、まるで意識だけの存在となったカイフィールドは、誇りと誓いを胸に叫ぶ。

「染め上げるおおおおツツツ！！！」

それはさながら、英雄の雄叫びだった。

刹那の間に、彼の世界は灰色から紅蓮に変わる。いや、彼一人の世界だけではない。それはフェマミーの世界すらも、竜の世界すらも、そして祭日への最終参加者の世界すらも、真っ赤に染め上げるほど。

それは巨大な炎の柱。これに類似した魔術をカイフィールドは使っていたが、そんなものは比にならないほどの規模だった。死んだモノを更に焼き尽くし無に帰すそれは、破壊の領域を確かに超えているのだ。

「ぐう！？」

だがそれでもフェマミーは耐える。彼女もまたでたらめに力を放出し、炎に染まった空間から、雷撃を用いて自身を隔離する。

佳境となり、勝負は純粋な力比べとなっていた。

だが幾分、カイフィールドの方が分が悪い。もう既に、左半身の感覚がないのだ。

それでも……！

おしよせる嘔吐感に片膝を付いても、爆発的に消費されてゆく第二魔力に、意識を根こそぎ持っていかれても、

（ エリア・フィーンツに頼まれただろ！

リフェウル・ハウに誓っただろ！

それに、アスと約束しただろうが！！）

この大きすぎる代償に見合うだけの、結果を残さなければ。この、血が流れすぎた戦いに勝たなければ。

全てが無駄になってから悔やんでは、遅いのだ。悲しみも虚しさも苛立ちも恐れも、全てが遅くなってしまう。

一を失って十を護るために戦ってきたわけではない。一を護り十を失うために戦ったわけでもない。一も十も救いたいと、立ち上がったはずだ。

たしかに、十は消え失せてしまっている。だが、だからこそ残った一を、カイフィルドは必ず護り切らなければならないのだ。

大地が溶け出す業火の中で、彼はそう鼓舞する。

そうして両足にずっしりと体重をかけ、無差別に放熱を続ける紅い柱の中心で、再び全身に力を込めた。第二魔力の放出量が限界に近付きつつある中で、しかしその消費速度はさらに飛び抜け、加速度的に大量の生命エネルギーが彼の体内から消え失せる。

「……一体何なのよ、彼方は！？」

この自殺とも見て取れる行為の前に、アレイチエルドはとうとう戸惑いを顕にした。

「いい加減、消え失せなさい！！」

雷という現象に変換した魔力を一点に集中させる彼女は、それと並行して磁界を生成し、電磁石の効果を生み出すことで鉄筋などの金属を呼び寄せる。

集う鉄は、だがしかし彼女を取り巻く雷撃に触れた途端、融解し。だがそれを考えていない彼女ではなかった、それらを手際よく纏めるとすぐさま造形し、瞬く間に巨大な槍と化する。

「ぐっ!？」

だが、何処か様子がおかしい。巨大な得物を持つていながら、彼女は一向にその鉄を放とうとしない。むしろ、自分からその槍が動くのを拒んでいるような。少なくともカイフィルドの視界には、そんな風に映っていた。

それは強ち、間違いではない。

彼女自身の第二魔力も、もう限界に近いのだ。そう何度も魔術を使つては、いくら無謀な戦い方をする人間が相手だと言っても、万が一の可能性は捨てきれない。だからこそフェマミーは、彼を一撃で静める可能性がある。

そう分かつてはいるが、限界に近い体はそのような都合を理解しにくれるはずもなく。

思わず、自分を業火から隔離するための魔術を、解きそうになつてしまった。

(予想以上に反動が……?! いくら私でもこれはっ!!)

彼女がやっているのは、磁石で言うところの、同極同士の反発だ。金属の塊と、それを統制している右手を同じ極にし、反発させる

つまりは鉄の槍を、飛ばすのだ。

強い同極同士が反発すれば、それは反発する物の運動エネルギーにそのまま繋がる。魔術で右腕を補強しておけば、鉄だけが飛ぶ鋭利な砲弾の完成だ。

だが少々……いや、かなり無茶があるようだ。何分、魔術においての細かい作業は、アイシャにまかせていたので、彼女は今までただ単純に力を放出することしかしてこなかったのだ。いくら魔術分野において天才的な感性と技術を持つ彼女といっても、なれない作業には苦勞もする。

そしてそれを、カイフィルドは見逃さなかった。これが最後のチャンスだと、彼の双眸に輝きが戻る。

ただ真つ直ぐ天に向かつて放出していた炎の流れを変え、ドーム状になつたその空間は急激に温度が上昇する。さらにそこから炎を

捻るようにして段々と範囲を狭めていくことで、余分な力を使う事無く、必要最低限の精神力だけで力の一点集中を成し遂げた。

その光景に、フェマミーはただ啞然とするだけで、やはり手元の槍が動く気配がない。

やはり今がチャンスだと……これが、最後の一撃だと、カイフィルドは念には念をともう一度だけ命を削り。

しかし、それがいけなかった。

頭の中で何かが弾け飛ぶ音がしたと認識した時には、彼の視界は地面を捉え、舌は土の味を頭に伝えていたのだ。

声を張り上げて踏ん張ることすら出来ず、呆気なく彼は倒れてしまった。

指一本動かせないなんて甘い状況ではない。最早カイフィルドは意識だけがそこに留まっている、辛うじて気絶をしていないだけの何も感じなくなってしまった人間なのだ。

「……結局、お姉さんの言った通りね」

安堵というものが如実に伝わる声音が、焼き尽くされた大地に響く。

あれほど倒したがっていた相手が眼前にいても、もうカイフィルドは何も思うことがなかった。何も、思えなかった。思考を広げる度に痛みや辛みが刺激されて、本能がそれを絶ってしまう。

「私を乱さないで、もういい加減消してあげるわ」

フェマミーは右手を前方へかざし、それにくっつくように金属の槍も動く。やはり才能に恵まれた人間は違った。この一分にも満たない時間の中で、鉄の極の力と右手の極の力を釣り合わせてしまうのだから。恐らく今は互いの極が違うのだろう、僅かな拳動にも動きを合わせる鉄が、磁界と力の安定を物語っている。

さらに、右手の指先が不自然に曲がっているところを見ると、恐らくこの攻撃の起動の要を指の動きに同調させたのだろうか。つまり指一つ動かすだけで、カイフィルド・ランスという青年の命は、

雑草を刈る事よりも容易く摘めるのだ。

笑えない冗談だなと……しかし、彼がそう思うことも無かった。彼の本能が堕ちてはいけなさと拒み、必死でしがみ付いて離れなかつた現実から、とうとうその意識が暗闇へ進んでしまう。

彼女はそれを見て幾分、穏やかな気持ちになり、だがカイフィルドの表情に僅かな戸惑いも抱く。

混濁した世界に歩を進めた青年の顔は、現実の悲しみ、痛み、辛み、苦しみから解放されたのにも拘らず陰り、目を覆う目蓋の端を水滴が濡らしているのだ。

それを見たフェマミーは歩を進め、意識を落とした青年のもとへ行く。

だが何をするでもなく、月明かりだけが照らす中で、しかし鮮明に見える水滴を眺めるばかり。ただただ、何も宿らぬ瞳を向けるだけ。

しかし、何度目かの、雲が月明かりを閉ざした時。そのとき彼女は身を屈め、不自然に曲げた右手の指を動かさぬまま、陰り続ける青年の顔から水滴を拭った。

「こんな出会い方じゃなかったら、彼方とは仲良くやれた気がするわ」

その言葉を皮切りに、彼女はピンと指を弾く。それが、力の変換の合図。磁石で言う、N極とN極、S極とS極の反発が働くきっかけ。

指先から舞った涙は一瞬で水素と酸素に変わり、彼の最後の訴えは瞬く間に気化した。

そうして、強力すぎる同極同士の反発が槍の運動エネルギーに加算され、フェマミー・アレイチエルドはこの戦いに終止符を打った。

『これは……』

所々が破壊されているとはいえ、月明かりの恩恵を受けた通りは、一定の美しさを持っている。

風化した遺跡や、崩れかけた洞窟に神秘的などという言葉を使つて賞賛するように、ある程度の崩壊は逆に美的感覚を刺激するものだ。

ただ、何事にも例外は付き物だが。

疎らに見える大き目の肉塊が目立つが、通り一面に広がる、赤黒い世界を構築している液体の量も悲惨なものだった。豪雨の後の水溜りのように残った血液は、崩れ落ちる建物の残骸を赤く染め上げてしまう。

さらにはそれに比例するように、人肉の焼け爛れた腐臭　死臭も酷すぎる。

嗅覚を麻痺させるような、一種の猛毒のようなガス。死の臭いと言つのは、日常と非日常を分割するものなのだと、改めて痛感させられる。

そうして。何度見ても見慣れない……見慣れたくない光景だと、アスは通りに降り立った。

『たしかこの辺りで……』

リフェウルがいるような、と呟こうとした時、彼女の足が何かを踏みつけた。一瞬、血の気が引いたが、足の裏から伝わる感触がどうにも硬い。安堵の吐息を漏らしてから足をどかすと、そこにはアクデイの最新型の兵器デインが転がっていた。

(……?)

その異様な格好に違和感を抱くのは、当然だろう。

鎧の一部だけは、たしかに直径十センチ程の穴が空いているが、他に傷は見当たらない。見つからないはずなのに、そこに入っていた肉体の損傷が滅茶苦茶なのだ。まるで内側から爆発したみたいに、臓器の配置がでたらめになっている。

これは……と戸惑いを顕にしふと目を逸らした時、乾いた血の上に、まだ乾き切っていない鮮血が見えた。

ただの血なら気にも留めない。だがそれは、いつまでもいつまでも延びていて、這って移動でもしなければそんな跡は残らないだろう。

もしかやと血痕を目で追い始めたアスが、やはりと溜息をつくのはそう長い間のことではなかった。

彼女は、自らの腕を抱き愛おしそうに髪留めに触れる少女へ羽ばたく。

僅かに血渋きや瓦礫が舞ったが、アスは特に気に留めることもなくリフェウルだけを見詰める。

近付くと、大切に抱きかかえて、なるべく振動が伝わらないよう細心の注意を払いながら、両翼の運動を開始した。飛び立つ瞬間、僅かに彼女の眉が動いたが、それは意識が覚醒するほどの事ではなかったようだ。アスはそのまま、なるべくあの通りから離れて、清々しい気持ちになる夜風を彼女に浴びせた。

『リフェウルは可愛いんですから、あんな所、似合わないですよ』
そう柔和な声で、アスは指先で彼女を撫でながら呟く。その顔はあまりに静か。穏やかで、幸せに満ち溢れた、普段のあの不機嫌そうな顔からは想像できない、素適な顔。

だから、だろうか。

「誰が可愛いですって？」

彼女がまた、何事もなくあの無愛想な表情を浮かべていることに、素直に驚いた。

『起こしてしまいましたか……』

「アンタが飛ぶからでしょう。アタシ結構、大きな怪我とかしてて、疲れてるっていうのに……。意外とこの風も、怪我に響くのよ」

『それはそれは』

余計なことでしたかと、緩みそうになる頬の筋肉に注意しながら、アスは徐々に高度を下げていく。怪我に響くというのは本当のようなので、極力、振動も抑えておいた。

『私は気持ち良いと思うんですけどね。あんな、人の死が蔓延る空

間にいるより、こちらの方がよっぽど清々しいですから。

いいですか。たとえ同じ様に壊れた場所でも、同じ風景が見れるとは限らないですよ。』

その言葉を向けられた少女は、視線を逸らして地上を見やる。彼女は耳をほんのり朱色に染めて、消え入るような声で呟いた。

「まあ……悪くは、ないわね」

『でしよう?』

「でもさ、いいのかな。アタシがこんな所にいても」

『ん?』

理解が出来ず彼女の顔を覗き込もうとする自分に、前を見てと怒鳴りつけた彼女が何やら必死だったので、しぶしぶ前方を見詰めたまま口を動かす。

「アタシも人を殺したから。意識を奪うだけでも良かったのに、泣いたり叫んだりしながらわけ分かんない事言つて、結局止まれなかった」

震える声音は、しかし風に吞まれる。夜空に響くのは鼻を嚙る音だけだった。

竜は何を言うでもなく、ただその涙を受け止めて、自責の念に押しつぶされそうな弱い体を抱き寄せる。

『でもリフェウルは、人の側に寄り添って温もりを分けることが出来るでしよう?』

アスの方が得意っぽいけどね　彼女は相変わらず、卑屈な態度を取り続ける。そこが可愛いですよと呟きそうになったが、今は他に言う事がある。

『私は魔力の塊ですよ。私の中にある喜怒哀楽は全て偽りか、あるいは借り物なのですよ。だから人に温もりを与える道具にはなれても、人の心を温めることは出来ない』

自嘲にも聞こえる台詞に、竜の胸の内で吐息を吐く少女は暫く黙考し、やがて自問への自答を放棄した。

「分かんないわよ、そんなの何が違つていうの………」

トントンと、リフェウルはアスの胸を　魔力で形作られた強固な体を叩き、頬を寄せ、

「こんな暖かい場所、アタシには無理だよ」

今は分からなくてもいい。いつかそれを理解すれば、まだ間に合うのだから。

だがそれを言葉にせず、アスはただ抱き締めながら指先で彼女を撫でる。

リフェウルは沈黙にも優しさがあることを知り、それからフツと体が軽くなる。張り詰めた糸が千切れ、だがそれは心地の良いものではない。疲れがどつと押し寄せ、彼女は泣き疲れた赤子のように混濁した意識に身を任せた。

その瞬間、視界の端で炎が舞った。聞き覚えのある青年の声。肌で何度も感じたことのある、魔力の　第二魔力の質。

「カイフィルド……」

その名を呼ぶことの意味と込められた想いは、誰も知る由はない。

気付けばエリアは、空を見上げていた。

体中が、切り傷のような火傷のような、あるいはそのどちらでもない類の怪我で埋め尽くされて、胸が、首が、手首が脈打つたびに痛みに顔を歪める。

だから彼は、暗すぎる天上を見詰めて意識を逸らす。

深い深い、深淵の中に導かれるように、星や月の装飾がない夜空は何もかもを吸い込むようだった。

それは決して、大げさな表現ではない。本当に全てを。少年の意識の中から綺麗に、痛みだけを。その体に刻まれた痛みに関する事だけを抽出し、吸い込んでいった。

もうここが普通の場所でない事など、少年には分かっている。ただ、夢だと断定することが躊躇われる。痛みや景色に浸る心が、あ

まりにもはつきりとしすぎているのだ。

消えた苦しみに気味の悪さを感じながら、ただなんとなく立ち上がり、なんとなく辺りを見渡す。

「……………なにこれ……………」

その目に映るのは、瓦礫でも死体でも、そもそもアルフィンの町ですらない。

見覚えのない荒野が地平線まで続き、両脇に聳え立つ崖は遙か天空の雲を突き抜けている。

そこに光と言うものは、そればかりか、人の気配や生物がいたという痕跡すらも残っていない、まるで未開拓の地。

何度辺りを見渡しても、何度目を擦つても、そんなはずはないといくら否定しようとも。双眸が脳に伝える情報は、どこまでも続く暗がりと寂寥だけ。

「とりあえず、歩いてみよう……………かな」

不安に押しつぶされるのを恐れて、わざわざ独り言を呟くことが子供っぽいなどと、気にする余裕も無い。

本当にこの場所は……………というよりこの空間は、自分を拒んでいるような気がしてならないのだ。底知れぬ疎外感にエリアは落ち着くことなど出来ず、まるで首元にナイフをあてがわれたような緊張感が付き纏う。

胸の鼓動が早くなっていることに気付き、それらを紛らわすために慌てて駆け出す足取りは、どこか 覚束無い。じわじわと得体の知れない恐怖が、確実に少年の精神や肉体を支配していく。

そんな、止まることを知らない気味の悪さを振り払うように、エリアは駆けた。

足に力を入れて干乾びた大地を蹴る度に、僅かだがそれらが消え失せるように感じたからだ。

だから彼は、痩せこけた砂を踏みにじって、ひたすらに前へ前へと進み、肺を大きく広げて苦しさに耐える。人の気配と言うものがどれだけ自分を支えていたのか、本当の孤独と言うものの、その意

味を改めて認識させられる。

だから尚更、エリアは止まることを拒んだ。

いくら進んでも何一つ変わらぬ空を恐れても、いつまでも続く大地に疲れても、どこまでも聳え立つ崖に圧倒されても。この不快感に押しつぶされるよりはマシだと、運動を続けるのだ。

その甲斐あつて、なのだろうか。

段々と下へ沈みかけた視界の端に、何か小さな物が移りこんだ。見間違えかと思つたが、そうではない。大地の黄土色に紛れる事無く、暗闇の夜空にもくつきりと存在を表している。

真っ白な何かが、そこにはあつた。

(あれは……)

そう思考が働き出すのと、体が動き出すのでは、どちらが早かつたのだろうか。

とにもかくにも、何かがあるという事実は、彼の心情を嬉々とした物に変える。

走っている最中に何度も、「あれは自分の髪の毛だったんじゃないか」と不安になり、自分の前髪を掻き揚げて、前方を見ては安心するといったことを繰り返す。ただそんなことをしても、不毛ねと口を挟む幼馴染の姿は居なかつた。

どこか物足りなさを感じながらも、そう遠くなかつたのか、エリアは白い物体の正体　白い石碑の前まで辿り着く。あまりに綺麗に残りすぎていて、まったく周りに馴染めていない、随分と浮いている石だつた。

雰囲気だけで言うと、そういう類の話に出てくるような、よくある「絶対に見てはいけない」と前置詞がついた代物。リフェウルがそういう系統に興味があるため、必然彼もある程度の知識を持っているのだ。

「でもこれって……」

だからその疑問を抱くのは、時間の問題だつた。

それは石碑と言うよりは、慰霊碑に近い。人の名前らしきものが

ただひたすらに列記されていて、「安らかに眠れ」などという常套句こそ記されていないが、どう考えてもそれが妥当な線だ。ただ、いくつか不思議な点もあった。

まるでその後も、名を連ねる者が増えるのを暗示しているかのようには、不自然にあいた空白。最後に書かれた文字を見ても、まだ半分ほど余白が余っているのだ。

慰霊碑とは本来、事故や戦争でなくなった人のために建てる物であって、そういったことは考え難いのだが。

他に何か書かれていないかと、エリアは慰霊碑近づく。そこで、今まで単なる線ぐらいにしか見えなかった文字が鮮明に一文字一文字見え始め、

「……………」

そこで彼は、固まった。

絶句し、呆然とし。

恐る恐る、その白い艶やかな輝きを放つ石に触れて、なぞり、何度も何度も名前を確認する。スペルを口ずさみ、指でなぞり、口ずさみ、なぞり、口ずさみ。

だが何度やっても変わらない、そこに刻まれた名。

エミリエ・フィーンツ

確かに刻まれた、母親の名。

彼の知らない所で世界は廻っていて。また、これからも廻り続ける。

それは運命の悪戯か何かと間違えそうになる、だが疑いのような事実。

だからこれから彼の身に起こることもまた、疑問の対象になることのない真実。広がり続ける騒動の波は、あらゆる者の人生に波紋を生む。

「やつと来た」

遙か頭上から響く、冷たい声音。

見上げれば一面に広がる、どこか見覚えのある氷壁のような、透

明な壁で覆われた正六面体と、その中心で翼を広げる、これまた見覚えのある姿。違いを言えと言われれば、それは炎のような紅い体ではなく、汚れから乖離され何者にも染められることを望まない、白銀の体。

その生物はこちらを睨め付け、夜空に映える両翼を開いて呟いた。

『私の……器』

第十八話 英雄の負債（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

三月で無事受験も終わり、また小説を載せていくことが出来ると思
います。

長い間更新が滞ってしまい、すみませんでした。

第十九話 空結昇華（クウケツシヨウカ）

キ　　ツンと、竜の咆哮とはまた別種の、耳を劈くような音が響いた。

フェマミー・アレイチエルドはすぐにその違和感に気付く。肉を裂く、骨を絶つ、人に死を与える行動から派生する音が、このような音である訳が無い。

磁場を生成し磁極を利用した、超高速の反発現象が、この程度の音で収まる訳が無い。

溶解して作成した槍は、いまだ巻き上がる煙に呑まれたまま。彼女は違和感に対する警戒心で身を固め、あらゆる状況に対応する術の為の魔力を精製する。

ほどなくして、夜風は徐々に、彼女の視界を回復させていった。

「……………あなた達、そんなにお姉さんのこと大好きなの？」

忌々しそうに見詰める瞳の先には、巨大な槍を模した鉄と、人影。ただし人影は一つではない。内側と外側の両方の意味で傷付き過ぎたカイフィールド・ランスその者の影と、もう一つの影。

風により、煙をとおして見えていたシルエットは、より具体的なものへと変わる。

黒のパンツ、左胸部分にウイクジブスの紋章が入った、元帥のみが着用を許される軍服。ただし軍服は彼女のセンスなのか、袖は切られていて肩辺りまでしかなく、そして何故か左足だけにベルトのような物が巻きつけられている。

その影の正体である女性の名は、ウイクジブス・アイナ・ロマ。国の名前を冠する元帥の、史上初の女性。同時に史上最年少でもある彼女は、幼い頃から武術、魔術に秀でてている。

釣り目気味の、常に相手を嘲笑しているような目。口元には、フェマミーとはまた違う類の笑みを絶えず浮かばせている。そして何より、長身でスタイルが良く美しい。

彼女から発せられる異常なほどの殺気が無ければ、世の男性は誰しも、彼女に声を掛けることだろう。

そんな女性が、唐突に口を開いた。

「どこに行ってたんだ？ あんたのことをずっと探してたんだ……。てつきり、とつくの昔にその少年を捕まえて、この町を出ていると思った。だから私もここを出たのに、アクデイの奴が抵抗したせいで無駄骨、戻ってくるのにすっかり遅れてしまった」

まあ一般人の少年も助かってるようだし、良しとするかと、彼女は片腕で持っていた巨大な鉄の槍を、その辺りに適当に放る。

鈍重な音を響かせ地に落ちた槍に、一滴の血も付着してはいなかった。エリアやカイフィルドの体にも、元から負っていた傷以外、目新しい外傷は見られない。

つまりは、だ。

アイナが、彼女の攻撃から、二つの命を護ったことになる。

ウイクジブスの人間が、アクデイと中立連合の人間を護った。

彼女は自分を裏切ったと言っておきながら、これではどちらが背信行為を行ったかなんて、分かったものではない。

「敵の命を救うなんて、ふざけているのかしら……?!」

「ふざけていないさ」

「っ……!!」

今度はフェマミーが苛立つ番だった。何もかもがうまくいかなさすぎる、そんな状況に加えてのこれだ。沸点が高いとか低いとかそんな問題ではなく、達して当たり前の領域だ。

フェマミーは次第に、気持ちだけでは収まらず、言動までもが昂りを見せ始めていた。

「冷戦とも見て取れる現状で、ウイクジブスの人間が中立連合ならまだしも、アクデイの人間を救うことが国への裏切り行為になる事も、もう既に貴女は分らないのかしら?!」

声を荒げるフェマミーに、しかしアイナは冷静に……。いや、彼女はいいつも通りだろう。むしろ異常なのはフェマミーの興奮振りであ

り、だからこそアイナが異様に冷静だと思われる。

ともかくアイナは、その双眸をもつて睨み続けたまま、言葉を返す。

「何を勘違いしているかは分からないが、ただ私は『戦争が起こらない為の最善の方法』の中から、ある方法を択一しただけさ。

あんたの言っている通り、今は殆ど冷戦状態さ。だからこそ私はこの二人、特にアクデイの方を助ける義務が発生する。考えてもみる、この場所に人間は四人。中立連合の少年がこいつを殺せる訳も無いし、あんたは証拠も残さず消え失せる。私だけが疑われてしまふんだよ」

理解できる？ と挑発する彼女に対し、思わず唇を噛み締めるのはフェマミー。

彼女は、勿論そんなものは建前だとすぐに看破した。概ね、フェマミー・アレイチエルドという人間が計画している全てを妨害して捕まえるのだろう。自国が抱える唯一の爆弾の起爆装置を一つずつ解体していき、爆薬だけとなったところで処分する。

そこで彼女は睨み付けた。

アイナではなく、カイフィールドを。

何故なら、彼はフェマミーのプライドを傷つけたからだ。本当に、たとえ自分の力ではないとしても、少年の身を彼女の手から護ってしまった青年に。

そこにフェマミーは、純粋な悔しさを抱く。

「お姉さんご機嫌斜めよ……」

そうおどけるような台詞にも、一種の真面目さが宿る程には。

「……………はあ」

彼女は内心、運の良い子ねと毒づき、同時にこの辺りが潮時かとも悟る。あまりに長い時間、ここに留まり続けてしまった。ウィクジブスの追っ手が彼女一人とは限らないし、今はもう国の方に命令されて撤退したアクデイの正規軍も、他の部隊が何かの任務の帰りにこの辺りに近付けば、来てしまう可能性だつてある。

エリア・フィーリンツという頼りない命の灯など、いつでも容易く消せる。だが自分がここで捕まってしまつては元も子もないのだ。それは拳を力強く握り締めて、敵意を剥き出しにしても変わらない事実。

「アイ、散々探してもらつて申し訳ないけど、追いかけてこはまだ終わりそうもないわね」

だから戦闘から逃走に思考を組み替えると、彼女はアイナに背を向け手を振りながら言う。

「私がここで、あんたを逃がすとも？」

対してこちらは、殺意を包み隠そうともせず（その理由が無いので当たり前だが）、にじり寄る様にして今にも殴り掛かつて行きそつだ。

だが本気の殺意を浴びせても、それでも元ウイクジブスの軍人は動揺一つ見せはしない。

そしてその行動は、時としてとある種の人間を酷く侮辱する事となる。

「いつもいつも……、あんたって人はっ！！」

堪えきれなくなった憤りを今すぐぶつきたいと、アイナは足のベルトに手を伸ばし、竜すらも凌ぐ破壊力を生み出す術の機動を開始する。

そして彼女が行動を起こすのとほぼ同時に、フェマミーは電流を操作し磁場を形成、あの巨大な槍を手元に手繰り寄せた。

大地を蹴る音は寸分違わず重なり、最初から自身の最高速度を叩き出す二つの影が交差するのに、一秒とかがからない。

しかし。

それは通常という単語を当てはめた時の事象であり、異常という単語が無理矢理入れ込まれた場合には、全く異なる事象が世界を覆うのだ。

「っ！！」「なっ！？」

ドンツ！！ と唐突に、凄まじいほどの重圧が胸に押し掛かる。

心臓を驚？みにされたような圧力は、今まで搔いたことの無い類の汗を全身から噴き出させる。

ただ息苦しいのではない。ただ怖いというだけではない。

そんなものよりも、まるで死神が側に居るような、圧倒的死の存在が付き纏っているような、得体の知れない不気味さの方が強かった。

何なんだこれは！ とアイナは不安を如実に表すように叫び、この現象の解決方法が丸で見えないことに齒痒さを覚える。

(これは……)

そうしてそんな中で。巨大な鉄の槍を握り締めながら、フェマミ

ーは この状況を最も畏怖していた女性は、

(ついに始まった……!?)

自らが体感する世界の変化に、ただ呆然とするしかなかった。

『エリア、明日は父さんとどこかへ行こうか』

それは記憶だった。

紙を裂くようにして壊れていく、脆い記憶だった。

『エリア、今日からリフェウルも一緒に住むんだ。仲良くするんだ』

『よ』

それは曖昧な回想だった。

地面に叩きつけたガラスのように破碎していく、曖昧な回想だった。

『今日からアンタは、エリアじゃなくてエリィ。アンタが嫌がってもアタシは勝手にそう呼ぶから、よろしく』

それは思い出だった。

砲撃を受けた建物のように崩れ落ちていく、脆弱な思い出だった。

『じゃあね、エリア』

ならこれは。。。

……………これは、一体何なのだろうか。この精神のわだかまりは、
どういった理由で心に留まり続けているのだろうか。

「やめる……………」

気泡のようにあまりに容易く破裂してしまう、その度に頭の中からポツカリ消え失せる何かを、エリアは手探りに求める。水平線の果てまで陸が見えない状態で、溺れた時に自分を助けしてくれる物を探すように。

いやそれどころか、もしかしたら問題はもう、「砂漠の中から一粒の砂を見つけた」という事ではないのかもしれない。彼は今、そこに自分の求める物があると、確信を持って言える問題に取り組んでいるのではなく、そこにあるものが答えだと、絶対に確信できない状況に立たされていた。

それもそのはず、記憶は、常に消え失せ消去され続けているのだ。たとえ本当に自らが求めていた物を思い返したとしても、それを自分が求めていたと覚えていなければ意味が無い。

それはとても恐ろしいことだ。なにせ自分の存在意義を、丸ごと喰われてしまうような出来事なのだから。もしかしたらそれは、生きる事の源を略奪する行為なのかもしれない。

絶望や悲しみや怒りや辱め。様々な負の感情から立ち直る為の、その存在意義を喰われてしまえば。そんなことになってしまえば、人は果たして何を抛り所にすればいい。

胸の内から沸く虚無感、理不尽な悲劇、やり場の無い憤り、徐々に蓄えられてゆく屈辱。それらを吐き出すための感情を、末端まで消去されてしまう事に、エリアはとてつもなく莫大な『恐怖』というものを抱いた。

「やめる……………!? 僕の中を、いじく、る……………な……………あつ!!」

痛みは無い。むしろついさっきまで負っていた大怪我が何故か全快し、体調をすこぶる良いはずだった。だが頭を押さえて地面に蹲る彼の表情は、今まで誰にも見せたことの無いほど、しわくちやに歪んでいた。

そんな呻き声を上げる少年を見ても、その頭上　透明な正六面体の中で両翼を広げる、何者にも染められることを望まない白銀の、汚れから乖離された体の持ち主である竜は声音一つ変らない。

『貴方が望んだ事』

そう、ただ淡泊に、自業自得だと突き放す。

『貴方は心の奥底から痛みを拒絶した。だから私は、その痛みに関する出来事全てを消去したまで』

鋭い眼光を放ちながら、白銀の竜の台詞は止まらない。

『私はただ、貴方の精神、肉体に堆積してきた全ての傷の、それに関わる出来事を消しただけです』

「っ！？」

いくらなんでも極端すぎる。それではナイフで指先を切っただけで、人生がりセットされてしまうのではないか。不満は募るが、しかしとても声を出せる状態ではなかった。

だがそれは、自発的に声が出せないということ。

少しずつ、ポツカリと空き始めた記憶の空洞は、時間を重ねるごとに大きな穴となっていく。頭の中に存在する言葉が理解不能となり、やがてその言葉自体、頭の中から消え失せる。エリアはこのもどかしさや苛立ちを、一体どこにぶつけていいのかも分からず。それらは全て内側に内側にと集束され、膨張する。

……するのだが、内容と容器の大きさは常に比例する訳ではなかった。

「やめろおおおおおおおつっつっ！？」

本能的な想いに、爆発的な勢いで放出される拒絶心。さらには加速度的に広がってゆく未知への恐怖が、歴とした子供である少年の焦燥を駆り立てるのは、言うまでもない。

そして精神の暴走は、この不可解な世界にも影響を与え始める。

まずエリアの眼前の大地から、氷壁に近い透明な物質が氷柱に近い形状で生えてくる。無骨で異質な形状のそれはエリアの身の丈を超え、だが正六面体に触れる事無く成長は止まった。

「これは……？」

微かな怯えを抱きながら、震える手先で彼は触れようとする。一刻も早く何かを取り戻すためには、行動するしかないのだ。

しかしこれは氷山の一角。世界の変化は、これで終わりではなかった。

次々と大地の表面を貫通し、外界へと存在を表す氷柱状の物質。それらは広大な荒野を埋め尽くす勢いで拡散するばかりではなく、両脇に聳え立つ崖からも突出を始め。仕舞いには透明な物質が円盤状で空中に出現し、そこから地面に向かって伸長する。

「ごほごほっ！？」

砕け散る大地の片鱗、遙か天空から降り注ぐ崖の一部が砂埃を撒きたて、エリアが視認するのは、世界の終わりを招くような破壊だけを抽出した現象。

この現象の一因たるエリアとて当然、無事では済まなかった。

制服の所々は突出した物質の先端に裂かれ、血が滲んでいるところもある。

「……………」

だがそんなことは瑣末、瑣事である。

それよりも不可解だったのは、その痛みを感じ少しでも嫌だと思つた途端、たちまち傷が癒えた事だった。そしてその瞬間、大地を貫いてあれが姿を見せる。

この現象の根本的な部分を、彼は否応にも理解させられてしまった。

たしかに、あの空に浮かぶ竜の言っている通り、これはただ傷を消し去ろうとしているだけ……。本当にただ、それだけだった。

ふざけるなど、少年は奥歯を噛み締める。

今この瞬間も人の中を覗いておいて。人の心に穴を空けておいて。たとえ、その穴の空いていた場所に入る何かを忘れたとしても、憤りだけは感じる。不満もある。それこそ拒絶だってするのだ。

「それを貴女は、僕のせいだと……僕の為だと言い張るんですか！

！

エリアは叫んだ。何故だと問うこともせず、怒りをぶつけた。けれども白銀の竜は微動だにしない。脳に記述された文章を実行している様な、不気味なほど透明な双眸でこちらを見詰めるだけで、ただ口も開かず浮遊していた。

このままでは埒が明かないと、どうにかして元の場所へ戻るため、その理由となる記憶が消去される前に彼は動き出す。

そこで、エリアは石碑に向かって飛びついた。

何故か傷一つ付いていない石碑の周りが、この場所で唯一安全だと瞬時に断定した結果だ。

石碑に体を密着させ、なるべくあの氷柱状の物質から距離をとる。

ふと、自分がもといた場所を見やると、もうそこには平らな地面は存在せず、エリアは体中からさっと血の気が引いていくのを感じた。

だが今は、止まっただけだ。

(どうすればいい……!?)

必死に頭の中を整理し、今自分に何が出来るのかを考察する。魔術は使えるのだ、文字は地面に記せばいい。後は、自らが唯一使用できる『空間呼応魔術』に、新しい可能性と突破口を見出すだけ。

だがそれが一番の問題だった。ヒントは皆無、与えられた時間も少ない。それらは焦燥を生み、焦燥は正しい判断能力を奪う。

酷い悪循環に陥ったエリアは、ただ拳を強く握るだけだ。

(一体、僕はどうすればいいんだよ!?)

試しに魔術を使い、空間の入り口を作って側にあつた小石を入れてみた。

そうすると空間は壊れ、小石は自分が認知している世界には摘要されない速度を叩き出して、刹那の間に真上の正六面体へ衝突した。

だが、あの甲冑を行動不能に陥れた一撃でも貫くことは いや、
それどころか、その表面に欠けを与えることすらできない。

やっぱりこれも駄目かと、そうして他の案を模索しようとした時、
また頭の中で何か弾け、空洞が大きくなる。

キツと、白銀の竜を睨み付けるが、そんなことをしても弾けた「
何か」が戻ってくる訳ではない。突出する物質の危険性に、唯一脅
かされることの無い場所である石碑で、彼はなるべく小さくならう
と身を丸めながら黙考する。

どうすれば元の場所へ戻れるのか。どうすればこの不可思議な現
象を止められるのか。

おおよそ現在の大きな問題はこの二つだ。そして、回答に辿り着
く兆しすら見えないのも、同じくこの二つである。

(これ、完全に詰まっちゃってるよね……)

まずこの現象を止めようにも、恐らくは元凶である竜はあの正六
面体が囲んでいるのだ。果たして物理的接触に効果があるのかは分
からないが、まずはあの氷壁のような物質をどうにかしなければな
らない。

「どうすれば元の場所へ戻れるのか」という事に関しても、解決
しない理由はおおよそそこにあった。

(魔的エネルギー欠陥症……か)

立ちはだかる巨大な壁の前に、前へ進めなくなってしまうたエリ
アは、自分の体質を呪った。

非常に少ない量の魔力で形成される魔術では、あの物質に傷を付
けることはできない。そもそもあの魔術は攻撃用に作られたもので
はないし、あんな使い方は本来間違っているのだ。

それを無理に変化させたとして、望むだけの破壊力を引き出すこ
となどできないに決まっている。やはり普通の魔術　それもかな
りの第二魔力を消費する意気込みで挑まなければ、この状況は打破
できない。

「……………」

知らぬ間に震えていた右手を、左手で押さえつける。

普通の魔術を使う事がどれだけ危険なのかを、彼は知っている。自身の体に魔的エネルギー欠陥症と呼ばれる致命的な欠点を知る羽目になった日、それを嫌というほど実感しているのだから。

だがどちらにしろ、このままでは安全とは言えない。あの竜が何らかの目的によって直接、自分に手を下す可能性だってあるし、そうじゃなくても餓死してしまうかもしれない。

悩む理由は、ないよね。

制服のポケットから、紙とペンを取り出す。調印式準備の為に持ち合わせていたそれは、今日一日彼の命を護った物だ。

そこに彼は、教科書に載っているような、しかし決して使う事の無かった公式文章を記す。

「ぐうっ!？」

だがそれだけで、心臓を圧迫されるような苦しみが生じ、エリアを襲う。ただ、普通の魔術に使う一般的な量の魔力を精製しようとしただけで。

ただ、一般的な魔術を起動させるために、文章を声に出したただで。

魔的エネルギー欠陥症とは、第二魔力が常人と比べて少ないという特徴以外に、体内に入れることができる第一魔力の許容量キャパシティの少なさ、というものがある。

これを無視した時、人体へは今のエリアのような、時に凄まじいほどの負荷が掛かってしまうのだ。

周りの人間が普通に使っている魔術ですら、彼には消費する第二魔力の値が命取りになるかもしれない。

周りの人間が普通に使っている魔術文章ですら、そこから得られる第一魔力の膨大さが命取りになるかもしれない。

内側から締め付けられるような苦痛が、少年の、十六歳の男の子の割には小さな体に響き渡る。

息が詰まりそうになり、慣れない痛みで彼の精神は意識を投げ出

しそうになった。

「あ ああつー！」

だが放さない。決して。絶対に。

リフェウルに任されてここへ足を運んだ。その記憶がまだ残っていたのは、不幸中の幸いだったのだろう。千切れかけた導線に落雷を流すような、そんな体の使い方をしてるエリアの精神は、最早その義務感だけで動き続けていた。

一秒にも満たない行動で、既に朦朧としている視界のエリアは、小さな火球をその手に生み出す。街灯の灯よりも小さな火種は、そのまま投げつけても火傷すらないだろう。

ここからだ。

ここから、本当の激痛と苦痛が始まるのだ。

ぐらついた足元のせいで、エリアは上半身を石碑のあった場所からただの地面に曝してしまふ。

その時だった。

氷柱状に地面から生えた物質が、彼の腕に掠り傷を与えた。この年の割には細い腕に線が引かれ、氷柱状の物質には鮮血が付着している。

だが問題はそこではない。その傷による痛みと共に脳裏に浮かんだ、すくなくとも記憶に無い映像の方だ。

それは温かくて、懐かしい。心に心地の良い灯が浮かぶ、そんな光景だった。

「これ……」

仄かに感じた感覚を手繰り寄せるように、もう一度氷柱へ触れる。

『エリア、明日は父さんとどこかへ行こうか』

「 あつー!？」

その瞬間、肥大化していた穴の一部が微かに再生を始めて、少しだけ空洞が小さくなったような気がした。そして、風船が空気を抜かれた時のように氷柱は「核」を失い、鼓膜を突き通ってゆく綺麗な破砕音を奏でる。

「そんな、これは……この全部が……」

驚愕で目を見開くエリアを見て、白銀の竜はようやく表情と言つものを顕にした。

何か興味を惹かれるものでも見つけた時のような、好奇心の塊のような顔色。ただその度合いは酷薄で、あの淡白な表情に慣れていたエリアだからこそ見抜けたと言つても過言ではないだろう。

地平線まで何も見えない荒野も、遙か天空の雲を突き抜けて聳え立っている両脇の崖さえも。それどころか、最低限己の身を護るための「石碑に体を寄せる」という行動でさえも。

「僕の きお、く……?!」

少年の脳は度重なる異常を前に、情報の処理が追い付かなくなつてきていた。

それは昇華のような現象だった。

気体から固体へ、または液体から固体へ。どちらも液体と言う状態を飛ばして状態変化する現象だ。

氷柱のような形状の、だが絶対に氷ではない物質。この不可解な現象が魔術であることは分かっているのだが、新しい物質を何も無いところから生み出す魔術と言うものは存在しない。いつでも何かを変化させたり、混ぜ合わせたりするのが魔術である。

自然型や干渉型だつて、突き詰めてしまえば結局は、魔力を変化させただけにすぎない。魔術とは常に変化するための術であり、何かを生み出すための術ではないのだ。

だからその理論で考えるならば、この現象には何か「元」があるはずなのだ。

ウィクジブス・アイナ・ロマはその現象の始まりから、伸長が止まるまでの全てを目視しているはずだが、少なくとも自分が納得できるだけの答えの、欠片すらも手に入れる事は叶わなかった。

「おい、あんたはこれの正体が分かってるんだろ！ 一体どうなってるんだ!？」

左足に巻いたベルトを自分を囲むように展開し、口早に記された文章を 第一魔力を体内に取り込むための詠唱を開始。アイナは魔力を変質させ、不可視の結界を作成する。

ガンガンと氷柱状の物質が結界を叩く中、尚も叫び続ける彼女だが、肝心のフェマミーはただ呆然とするだけで防御の素振りも見せていない。物質が突出する予兆すらも伺えないこの状況において、奇跡と言っても差し支えない状態だった。

「そんな……私は何の為に……」

掻き消えそうな声で呟き、彼女は膝立ちで虚ろな瞳を天に向ける。焦点の合わない双眸、今にも発狂しそうな精神状態。どう考えても、会話が成立するとは思えない状況だった。

そんな彼女の頭上に、透明な円盤が出現する。刹那、そこから真下へ歪な形状が伸びた。

「っ！」

だがそれが彼女の体を貫くことは無い。雷を右手に帯電させ、それを夜空に向けてかざすだけで、降り注ぐ未知の物質はガラスのように粉々に砕け散る。

そうして天上から地上へと戻る視線。そこには怒りや憎しみといった甘い物ではなく、向けられれば肌をも焦がすような明確ではつきりとした殺気。

「……カイフィルド・ランス。彼方つて子は……!!」

まずいと、アイナは思う。アクデイの兵士はいいとして、あの男のすぐ側には少年が倒れたままだ。ウィクジブスの軍人のせい一般人が死んだとなれば、色々と面倒なことも起こり、アクデイからの糾弾は避けられないだろう。

これを機に理不尽な協定を結ばされる可能性だってある。中立連合とアクデイが繋がっているのは、かなり前から有名な事だった。

「くそ!!」

結界を維持したまま、彼女も倒れている二人の人間のもとへ駆ける。緩い弧を描くように回り込み、彼らの前に、そして彼女の前に佇立する。

結界の範囲を可能な限り拡大し、カイフィールドとエリアの身が安全だと確認した後、そのまま力を維持しなければならぬアイナは念の為、常備している短刀を腰から抜いた。

「止まれ！」

「どきなさい！！」

激しい音を響かせて、雷を帯びた手刀と元帥の短刀が衝突する。

それだけで莫大な力の波紋は広がって、辺りの氷柱状の物質を全て薙いだ。

力は拮抗していた。

向けるべき場所の違う憎悪が、正面から互いを睨め付ける。

「あんたはこれを知っているんだろ？！ 止める方法を吐いてもらおうか！」

「これを止めるのは私にもアイ、貴女にも無理！ 彼が中途半端に護るなんて口にするものだから……人が折角築き上げてきたものを！！」

一度フェマミーは短刀を弾いて前へ踏み出すが、流石は元帥と言ったところか、見事にアイナは喰らい付いた。

「あんたはただ奪おうとしただけだろう？ それもあまり褒められた行為じゃあないと思うが！」

「なんですって！？」

今度はアイナが踏み込む番だった。逆手に握った短剣の柄で鳩尾を狙い、かわされれば手首を動かして刃先を相手に向け、切り上げる。

それを紙一重で避けたフェマミーの、後ろで纏め上げていた金の長髪のいくつかが舞った。

「貴女に何が分かるっていうの！？」

足を使った接近戦を基盤に、ここぞという時に手刀の一撃を放つ

戦闘スタイルのフェマミーに対して、アイナは防御と回避を優先し、重いカウンターを狙った姿勢だった。

フェマミーにとってはやり難い事この上ない。攻めれば返され、引いても近付くことはない。長時間の戦闘における限界か、必然的に劣勢を呼ぶ。

そしていつのまにか彼女は、結界の外に居た。慌てて魔力を精製し放電。突出したそれらが四方八方からフェマミーを囲む空間を叩き、危うく串刺しになるところだった。

だがアイナは、疲れなどないとも言うのだろうか、短剣を手の平でくるくると回している。逆手で握っていた得物を、今度は順手に変えた。

「そんなもの分かりたくもないし……大体、分かる訳ないだろう。

あんたはいつも、誰にも本当のことを話してこなかったんだから！」

悲痛な声音を吐きながら、アイナは腰を落として脚部に力を込める。

元から半壊していた地面を彼女は蹴りつけて跳躍した為に、舗装されているはずの地面は木っ端微塵に弾け飛んだ。

短剣を握る手へさらに力を供給し、彼女は単純に剣を振りぬく。

それにはフェマミーも、余裕綽々といった様子で右手をかざすだけ。

だがアイナの起こした行動はそれだけではない。振りぬいた剣は手刀と接触することはなく、彼女はそのままの勢いで前転すると、強引に踵落としへもっていった。

黒のブーツがずっしりとフェマミーの肩へ押し掛かり、回転と元々の蹴りの衝撃を叩きつけた。

「わざわざ自分から感電しに?！」

戸惑いと嘲笑が混ぜ合わさった、酷く形容し難い表情。

「悪いな、もう対策は済んでる」

その酷く不安定な精神の天秤は、その一言で一気に傾いた。

アイナは肩に乗せた足を離し、重力に体が従う前にフェマミーの右腕に絡ませる。当然、上半身は吊るされたようにぶらぶらと揺れるが、そんな無様な姿など見せる彼女ではない。仰け反るようにして、今度こそ彼女は、刃で眼前の肉体を切り裂こうと振りぬいた。

だが何度も言うが、相手は元帥に匹敵する力量の持ち主である。刃は彼女の胸元を通過したが、避けたのは肉ではなく服だ。

フェマミーは慌てて足が絡む右腕を振り回し、互いの立ち位置が逆になった。その時の挙動でさらに胸元が大きく裂けるが、本人も今の攻撃には肝を冷やしたのか、気にしていられないといった様子。そもその体勢がいけなかったのか、アイナはフェマミーの腕力をもろに受けて吹き飛ばされ、瓦礫の山に突っ込んだ。

撒きあがる砂煙を晴らすには月明かりだけでは頼りなく、フェマミーがその筋肉の強張りを解くことは決してない。

だがそんな彼女よりも焦っている人間がいた。

数多の瓦礫に埋もれて、その表情に焦燥を浮かべる彼女は冷や汗が止まらない。

何故なら。まず彼女は、こちら側へ飛ばされるつもりなど毛頭なかった。フェマミー・アレイチエルドという化物相手でも十分に通じる奇襲を仕掛けたのだし、万が一カウンターを喰らったとしても、ただ単に吹き飛ばされるだけだと推測していたのだ。

（まさかこっちへ投げるだなんて！ 最悪だ、これで結界の効果範囲から外れてしまったじゃないか！？）

そう。彼女は考えて行動していたのだ、自分から踏み込んでも、ギリギリのラインで二人が結界から出ないように。あの不可解な物質が、二人の体を貫かないように。

慌てて瓦礫から片腕を突き出し、視界を確保する。

だが今更行動を起こしたとして、間に合う訳もない。むしろ彼女が結界で覆う前、あの時に傷一つ負わなかったのが奇跡なのだ。

そこには当然のように、あの円盤が存在していた。

（間に合わない！？）

至つては瓦礫と共にどこかへ吹き飛ばされてしまっている。

そこに、破壊と言う単語は、もう使えない。

これは死滅だ。大地を焼き尽くし、全てを気化させる一撃。果たしてこの場所で、もう一度植物が育つことは可能なのだろうか。

それほどまでにこれは、そこにあつた生物の安否が心配される事象だった。

だが驚くべきことに、その場所に生物は存在する。

天上から降り注いだ竜に抱かれて。それでも重傷なのだが、あれの直撃を喰らっているはずの肉体の割には比較的軽傷のまま。

カイフィールドとエリアの体に、少しも傷は付いていなかった。

アス、リフェウル・ハウ、エリア・フィーリンツ、カイフィールド・ランス、フェマミー・アレイチエルド、ウイクジブス・アイナ・ロマ　三つ巴の戦いの中で、しかし決して全てが交わることの無かつた力。

それらはようやく、何もかもを飲み込む夜空の下、少年の想いに惹かれることで互いに向き合うことになる。

第十九話 空結昇華（クウケツシヨウカ）（後書き）

見てくださった方、ありがとうございます。

第二十話 白銀の翼が示す場所へ

「僕の記憶……」

少しだけ石碑から体を浮かせて、先ほどとはまた別の、かなり大き目の氷柱状に伸びた結晶に手を触れてみる。

「君達は、死なせちゃ駄目だ」

「なん、で……」

「そうだ。僕はカイフィールドさんを庇って……それで、こんな所に？」

いまいちよく分からない現状でさらに謎が深まってしまい、エリアは余計に頭を抱えたくなった。が、それでも結晶に触れることだけは止めない。

大分落ち着き始めた世界の異変。ゆっくりと歩を進めながら指先で記憶に触れていき、空洞を確実に埋め始める。

そしてある程度の記憶を埋めなおした後で、

「僕は……」

帰らなければいけないの？ そう頭上に問いかける少年の顔は、僅かに不安に彩られていた。

これはごく自然なことなのかもしれない。いやそうに決まっている。あれだけの重傷を彼は負っていたのだ。あの恐怖へ再び向き合う意味など、ただの学生であるエリアに見出せるわけが無い。

……がしかし。

「僕は……！？」

それでも彼は、自身の胸に燻り続ける感情に戸惑いを隠せなかった。けれどもその感情の正体が分からず、一向に埋められない空白に苛立ち、だからこそ少年はこの広大な荒野に突き出す結晶に触れるため走り出す。

自分のすべき事を 存在意義を認識するために、エリアは全力を尽くすのだ。

けれども結晶は無数にある。それもそのはず、地平線の向こうまで際限なく広がる大地や、天上に聳^{そび}える崖にまで存在していて。それらを砕くのに、一体どれほど時間が掛かるのだろうか。そしてその中から、自分の中にある感情の、その謎を解き明かす種となる記憶を探し当てるのにも、どれだけの苦勞を費やす羽目になるのだろうか。

「くそっ!?!? くそっっ!?!? くそおおおっっ!?!?!」

いくら砕いても、悶々とした心情が晴れることはなかった。

「教えてくれよ! 僕は一体、どうすればいいんだよ!?!?」

懇願に近い叫び。鉄の味が喉の奥で広がるほど、彼は答えを渴望する。

『知りません』

けれども白銀は、彼の望むモノを与えることが出来ない。出来ないのではなく、出来^きないのだ。

『私は貴方が望んだことを、具現化しただけです。そこに私の自由はなく、また意思の介入も許されない』

ふざけるな、それじゃあまるで僕が、全てを忘れ去ることを望んだようじゃないか。睨み付けるエリアはすぐ側にあった氷柱を殴りつけ、壊し、記憶を吸収する。

『だからこそ私は貴方を導きません。ただ行き先が定められた時、道を照らす役割を果たすだけ。』

故に私は何者でもなく、また何者にでもなれる。貴方が望めば天地を引き裂き、貴方が望めば救済者となり、貴方が望めば自身の命すら摘み取る。 白銀の生き方はそこにある』

「そんな……!?!?」

きつとこんな所に来てしまったのも、あいつのせいなのに。尚且つ記憶まで奪われて、それで僕に何をしたいのかを言えだつて?

「ふざけるなよッッ!?!?!?!」

ありつただけの第二魔力を使い切り、彼だけのために作られた魔術を発動させる。共存するはずのない運動が無理矢理、交わつた為に

起きる規格外。自分たちの世界には適用されるはずもない速度を叩き出し、エリアが空間の入り口に投げ放つ石は、真っ直ぐ竜のもとへ飛来する。

だがやはり、正六面体には傷一つ付かなかった。

それを見てエリアは地面に手をつき、乾ききつた大地の砂粒を握る。

「……何をしなきゃいけないのかなんて、分からないよ……！」

震える声音を、果たして竜は耳にしたのだろうか。少年は自分の情けなさに苛立ち、非力さに絶望する。

肉体も精神も誇示できるものは何一つなく、魔力にいたっては常人と比べると大きく劣っている。そんな人間がすべきことなんてあるはずがないと、誰よりもその当人であるエリア・フィーリント自身が思っているのだ。

これは偏見ではない。この現状、町一つ壊されかねない、魔術が飛び交う状況の中、一体自分に何が出来るといえるのか。この小さな手で一体、何をしろというのか。

「何も出来ないじゃないかっ」

そうだ。たとえ記憶を探し当てたとしても、それはここから出るヒントになるのだろうか。ただ単に不安に駆られて今までやってきただけで、保証はどこにもない。それに万が一ここから出られたとして、自分は必ず足手まといになる。カイフィールド・ランスは自分を守るために戦って倒れたのだ。ここでまたあそこに戻れば、もう一度彼が傷付く羽目になるだろう。

そうやって自責の念に囚われ始めたエリアの瞳は光を失い、地面に膝から崩れ落ちる。

「……何もしないことが、僕をするべきことなんだ」

干乾びた世界の中で、彼はうずくまる。空を見上げればあの竜がこちらを、感情がないガラス球のような双眸をもって見詰めてくるのが見えた。

そして、まるで失望しているようにも見える無表情のまま、白銀

の竜は口を開く。

『それは違います』

耳に届いた予想外の言葉に、エリアは思わず目を見開いた。

『貴方が望んだことに、私は従う。するべきことではなく、したいことを……』

もう一度だけ問います。貴方は何を 望むのですか？』

声音は今までとんなら変わらない淡泊なもの。だがしかし今回は発せられる言葉、一言一言に意味を含み声に出している。それはさながら、魔術のようだった。

そんな風に投げかけられた言葉に対し、少年はただ呆然とする。

干乾び枯れ果てた大地の上で必死に記憶の潤いを求め、けれども彼の思い出は枯渴したままだ。

だからこそ彼は葛藤し、自身の中の理由を模索する。そしてすぐさま、視線を持ち上げた。

そこには記憶が 氷柱のように結晶化した、透き通るような物質が無数に広がっている。

「僕は……」

僕は、何がしたいんだろうか。

「わーお、紅蓮の竜のおでました」

ウィクジブス・アイナ・ロマが発した第一声は、そんなふざけた台詞だった。

更地と化した大地に驚愕することもなく、さらにそこまでの破壊が行われた場所の中心にいた二人が、無傷だったことにも眉一つ動かさない。

純然たる事実として受け止め、そしてそれをどう処理していくかということに脳の思考を回す。この順応速度の速さは流石、元帥と言ったところだろう。

一方、フェマミーの方は未だ呆然として空を見上げるだけだ。

『……………』

だがアスはそれすらも気に留める事無く、ただその腕に抱いた少年と青年を見詰める。

「大分、無茶をしましたね……」

腕の中で意識を落としたまま眠る相棒に労いの言葉を掛けて、竜は彼らを庇うように前に立った。

「それで……貴女たちは、まだやる気ですか？」

その言葉と同時に、ガラス片で皮膚を切り裂かれたような鋭い敵意、戦意、殺気が撒き散らされた。アスの両翼から陽炎のように炎が揺らめき、手足の先は既に紅蓮と化している。

そしてその背後で、何かが地面を叩く音が響く。

「こいつらは、私にまかせて……あいつら軽く、焼いちゃいなさい」
いつ目覚めたのか、謎の物質で構成された棒で体重を支えるリフェウル・ハウは、真っ青な顔でそう言った。

出血多量で满身創痕の彼女は、指先で突っつけば倒れてしまうほど衰弱しており、きつと体が言うことを聞かない状態のはずなのだ。
「リフェウルは意外と過激なんですな」

それでも立ち続ける彼女にアスはおどけて、大丈夫だと目で語る。
だから竜は青年の思いを継ぎ、少女の意思を汲み取り、少年の身を守る為に爪牙を振るうのだ。

まず最初に狙われたのはアイナだった。周囲を炎で覆われて身動きが取れなくなったところに、いつの間にか飛び上がったのかアスがその火炎の中心　アイナのもとへ垂直に落下する。

「喧嘩っ早いな……っ！」

大して彼女の起こした行動は実にシンプルだった。ただ単に左足のベルトを展開し、二十四の文字から最も最適な魔術文章を組み立てる。ベルトの発光に瞳を焼かれながらもアイナが発動した魔術は、三重に構築されたドーム状の防御壁のようなものだ。

「っ！！」

が、アスもまた反応する。僅かに機動を右へずらすと、側にあった奇跡的にまだ形を保っている建物を尾で薙ぎ払う。大小様々な瓦

礫が豪雨のように降りしきり、彼女らを隔てる壁に直撃した。

巻き上がった砂煙に、アイナは視界を奪われる。自分が立っている地面に亀裂が入っているのを見て舌打ちし、まずいなと身構える。アイナが発動したのはあくまで、上空から攻撃してきた敵に対する魔術なのだ。その防壁の効果は働くのは全方位ではなく、視認しているドーム状の部分だけ。

そして彼女のそんな反応を、アスは見逃さなかった。

彼女の周囲に撒き散らしていた炎を集束させ、今まで手足の先だけに留めていた『魔力の変換』を解き放つ。今の彼女は「竜が炎を纏っている」のではなく、「炎が竜の形を模している」状態だった。そして、ようやく視界が晴れたアイナの目もそれを認識する。尋常ではない第二魔力の排出量と魔力の作成量。竜が全力でこちらに攻撃を仕掛けるという事実が、彼女の背筋に嫌な汗を流させる。

(　　こんなを受けてられないぞ……！？)

必死に思考を巡らすウイクジブスの元帥。だがしかし、解決策を思いつくにはそれはあまりに遅すぎる。

『はあああああああッッッ！！！！』

膨大な力の塊は、容赦なく地面に向かって解き放たれた。三重構造の防壁は捲れ上がった地面のせいで跡形もなく吹き飛び、瓦礫の雨さえも防いだそれはあつという間に消え失せる。

背後の三人に怪我一つ無いのが不思議に思える衝撃。アイナはそれを真正面から受けたせいで体が宙に浮き、周囲の残骸と共に吹き飛ばされる。彼女自身も途中でどうにかしようともがくが、それでも両足が地面を踏みしめることはない。

ドゴツッ！！　という鈍重な音を響かせ、アイナは飛ばされた先の民家さえ突き破って通りの向こうへ消えた。

「凄いわね……」

矛　　と言っても、実質の形状は棍棒に近いのだが　　を支えにしてやっと立っていられるリフェウルは、女性を吹き飛ばした一撃

の余波により今にも倒れそうだった。

こめかみにじわじわと響いていく鈍痛に顔をしかめながら、それでも彼女は感嘆の声を漏らす。だがその思考も、すぐに別のものに変えられた。

今はただアスを待とう、そう思わせるほどの実力をあの竜は持っているのだ。巻き上がる砂煙に咽返りながら、そこでリフェウルは視線を地面で横になっっている二人の方へ移す。

まず両者共に息をしていることを確認して、それから目に見える範囲で怪我の具合を確認する。

「何これ、酷い……」

そして驚くべきことに、最初に手当てを受け始めたのはカイフィールドだった。家族とも言える少年の方ではない、彼女は躊躇なく他人を選び助けようとしているのだ。

そしてその判断は正解といえる。彼の体はエリアと比べると外傷が酷く、中でも脇腹の傷は今にも血液が噴き出しそうなほど危険な状況下にあった。

それにそういった目立つ怪我にはかり気が向いてしまうが、彼の呼吸にも異常は見られた。恐らくは骨も何本かやられているはずだ、息苦しそうな表情を見れば大体、想像はつく。

エリアの学生服を借りるとそれを引き裂き、怪我が酷い箇所から順に止血していく。止血剤が何かを先に使っていたのか、幸いにも手当ては順調に進んだ。もっともこれは、記録係としての冷静さや状況判断能力を養ってきた故に出来たことだろう。

だが問題はエリアである。外傷はせいぜい打撲ぐらいで皆無と言っているほどだ。それなのに意識が一向に戻らず、比較的穏やかな表情のまま眠り続けている。何らかの魔術が原因だとも考えられるが、そうだとするといよいよリフェウルは打つ手がない。彼女が対応できるのは公式文章ホームの魔術だけで、そしてこれは確実に独創型オリジナルなのだ。

「エリイ……起きなさいよ、ねえ」

ユノの家で寝ている彼を起こしていたように、リフェウルは肩を掴んで揺さぶる。頬も軽くだが何度か叩き、それから名前を耳元で呼んでもみた。だがそれでも、少年の目蓋が開くことはない。

先ほどの戦闘、その一部始終を見ていた彼女は、早くこの場所を離れようと焦燥に駆られ始める。それもそのはず、身動きの取れない人間二人をあの魔術の余波から守りきるなど、満身創痍でなくとも難しいことなのだ。だからこそリフェウルは必死にエリアを目覚めさせようとするが、しかしそれは何度試しても同じ結果に終わってしまう。

完全に詰んだわね　激しく脈打つ鼓動に息苦しさを覚えながら、リフェウルは奥歯を噛み締める。他に何かないかと考えを巡らすのが、彼女の思考回路にその答えは存在せず、ただ単に苛立ちが募るだけ。(どうすればいいのよ……っ!?)

ガツ、と握り拳を地面に叩きつけた。ガラス片や瓦礫が混ざった土は彼女の手を傷付け、けれども流れ出る血液をリフェウルは気に留めない。

「お願いだから起きてよ……！　ねえ、エリイってば……っ」
彼女はただ、大切な人間を助けたいだけなのだ。十六歳の少女に残された唯一の家族である、その少年の命を。

摘み取らせたくはないのだ。時に弟のように守り、時に兄のように慕った男の子の命を。

ユノが死んだ時、自分はどれほど後悔しただろうか。もっと周囲を気に掛けていれば、もっと綿密に計画を立てていれば、もっと自分に力があれば。

だからあんなのは一回だけで十分だ。二度と死なせなせてたまるか。血みどろの中に、コイツだけは沈めさせやしない。

唐突に呼吸を止め、次の瞬間、彼女は肺の中を空気で満たす。

「エリイイイイツツッ……!!」

だからもう一度だけ。闇へと誘われたエリアの意識を呼び戻す為、リフェウル・ハウは全身全霊をもって彼の名を叫ぶのだった。

エリイ　そう呼ぶ声が、どこからか聞こえた気がする。

荒れ果てた大地が地平線の彼方まで続き、遙か天空まで突き抜ける崖が両脇で壁のように聳え、星明りの装飾すらない深淵のような夜空が展開される場所。

そこに存在する無数の結晶に囲まれて、エリアは頭の中で響く声の残滓に意識を集中させていた。

「……何なんだ」

それはどこかで聞いたことのある、懐かしい声だった。ただここで聞いたのかは分からない。思い出せないのではなく、まるで頭の中に最初から存在しないかのような感覚に、少年は齒噛みする。

その時だった。脱力し切った彼の手が、偶然にも近くにあった氷柱状の結晶に触れたのは……。

『エリア、今日から　　も一緒に住むんだ。仲良くするんだよ』
ガラスの破砕音よりもう一段階高い音が響くと同時に、妙にもやのかかった映像が浮かび上がる。だがしかしユノの隣にいる誰かの顔は、黄昏時の逆光に吞まれてしまっって見えなかった。

誰なのだろう、この映像の中にいる人間は。まるで昔から一緒にいるような懐かしさがあつて、きつとそれは大切だったはずの人間なのに。

隣にいるユノと同じくらい、大切だったはずなのに……。

あそこにいた人は友達だったのだろうか。不思議とそんな感じがする。ゆっくりと立ち上がったエリアは、静かに歩き出し　　そうしてもう一度、結晶に触れだす。

『ん、おはよう。アンタもさっさと着替えてアタシの朝食作りなさいよ』

『清々しいくらいにふてぶてしさだ!?!』
きつとその人は、ずつと自分と一緒にいた。誰よりも、両親よりも長い時間を、僕は彼女と過ごしていた。

『今日からアンタは、エリアじゃなくてエリイ。アンタが嫌がつて』

もアタシは勝手にそう呼ぶから、よろしく』

僕のことを『エリイ』と呼ぶ女の子。いつも隣にいて、一緒に魔術を学んで、そして失敗ばかりして。

ユノのお店を手伝っていた。一緒にお祭にも行ったし、その後だつて二人で遊ぶつもりでいた。でもアクデイから訳の分からない集団が来て、町を壊して……。

僕たちは必死に逃げていたけど、でも戻ってきてしまった。だから……。

(だから……!?)

「リフェウルが、来ちゃったんじゃないか……!!」

自分に残された家族を、エリアは危険に曝してしまったのだ。彼女が自分の意志で行ったんだと主張しようとも、彼はそう考えるだろう。

きっと彼女はまだ逃げている。カイフィールドが倒れた今、彼女を守ってくれる人は誰もいないのだ。最悪、今この瞬間も命の危機に瀕しているかもしれない。

「……戻らなくちゃ」

たとえ戻れたとしても、何が出来るかは分からない。そんなこと、エリアはとくに理解している。それでも彼は人なのだ。無謀だと、無茶だと呆れられても、じつとしていられるわけがない。そのことに理由はいらず、動機は単純明快。だからこそ少年は、あの深い傷跡に抉られた大地へ戻ることを望むのだった。

『あそこに戻ることが、貴方のしたいことですか?』

首をぐぐつと伸ばしてこちらを向いた竜は、静かな声音でそう問い掛ける。

そして同時に、竜を覆っている正六面体の結晶が、ゆっくりと降りてきた。僅かにエリアの体が強張るが、それでも臆せず。ただやってくる白銀の双眸を見詰めながら静かに吐息をこぼすだけ。

ぎゅつと握る手の中は汗ばみ、膝は小刻みに震えている。それでもエリアは堂々とその場に立ち続け、決して離れようとはしなかつ

た。側にあつた結晶を叩くことで記憶を戻し、それが怯える少年の体を奮い立たせる糧となる。

そうしてエリアはジツと空を見詰め

「違います」

宙を見上げていた首を、横に振った。

「家族を、助けに行きたいんです」

その声、言葉には少年の確固たる意志が含まれており、彼自身まったく動じている様子はない。記憶は確かに彼の心を強くして、何度折れようともその意志を修復してきていた。

エリアは目前に迫った結晶を見上げて、何を思ったのかふと手をかざす。

「……………」

エリアの中に渦巻く映像。それは結晶化という形で奪われた過去のものではなく、この場所に加えられた新しいものだ。

記憶の結晶化。その持ち主が直に触れることでそれは解除される。魔術的攻撃は一切受け付けられない。見たこともない透き通るような、透明な物質。

唯一、相違点を挙げるとすればそれは形状のみ。

「返して、くれますか？」

その言葉に対し、竜は声を発さない。ただ目を瞑り、すると正六面体はさらにこちらへ近付いてくる。それを肯定として受け取ったエリアは、かざした手の指先をまるで赤子でも撫でるようにそっと触れた。

『元より、これは貴方のもの』

言い終えるのが早かったか触れるのが早かったのか。突如として正六面体に螺旋状の亀裂が走り、幾重もの線が重なる。パキパキパキツツ、と形を保っていること自体が不思議に思えるほどの音を響かせ、そしてそれはいつからかこの世界全体を震わす轟音となっていた。

眼前の正六面体だけではない。この荒廃した場所に広がる氷柱状

の結晶全てに、螺旋状の細かい亀裂が走っているのだ。指先が触れるどころか、風が少し靡くだけでも砕け散ってしまうだろう。

だがエリアはそれに目もくれず、指先だけで触れていた結晶に今度は手の平をあてる。

そうしてぐつと腕に力を込めた途端、完璧な形状を保っていた結晶に、初めて歪みが生れた。欠けた物質の一つは内部へ落ちていき、刹那。

カ キ イイ ツツンツッ！！！！

刃物で鼓膜を裂かれたような、鋭利な破砕音が鳴った。

しかし結晶の破片は地面に触れる事無く、周りにあった氷柱状の結晶と同じで、溶けるようにして消える。

困いの無くなった白銀の体はその両翼を展開し、今にも飛び去ってしまいそうだった。

だがまだ終わりではない。白銀の鱗、両翼、頭部の角を持った竜は何を思ったのか真上を向き　そうして吠えた。

何の脈絡もなく、まるで何かの合図のように。少なくともこの場所に、今起こっている出来事を知らしめるようにして、それでも竜は咆哮を止めない。耳を劈くちんような声は怒号なのか何なのか。空気を振動させるそれはたちまち周囲の結晶を砕かせていき、竜を中心とした破壊は拡散していく。

そしてその度に、エリアの中で芽生え始めた意志がより一層、強くなっていった。記憶が戻ってきているのだ。頭の中の知識を取り出そうとすれば、簡単に引き出すことが出来る。少し昔のことを思い出そうとしてみると、実にスムーズに事は済んだ。

轟音に耳を塞ぎながらも、エリアの口元は僅かに緩む。全てを知らない少年は、それでも自分の知る世界を守ろうと立ち上がることに意味を見出す。そうして彼は無知にも意味を見出し、しかしだからこそ立ってもいられた。

(父さん、母さん……)

カイフィールドに、行方不明だと告げられた両親。ユノはこの事を

知っていたのだろうか。子どもを預けられているのだから、もしかしたら人伝いに聞いているかもしれない。

そしてそれを知っていたとして、エリアに言わなかったのはある意味、正しいのだろう。真実を知ってしまったからといって、彼の数年が不幸なものに変わったわけではないのだ。エリア・フィリッツという少年は、十分に満足して日々を送っていた。

それが仮に真実を知ったとして、当然彼は塞ぎこんでしまうし、絶望に染まってしまっただろう。そうなれば彼の人生は全く違うものになったはずだ。

だからそれに関してエリアは何も言うつもりはない。もしかしたら知らなかったということもある、今考えてもそれはしょうがないことなのだ。

ただ。

(……リフェウル)

ただ、あの感覚だけは　自分の中から親しい人たちが消えていく、あの喪失感だけはもう二度と味わいたくはなかった。

「戻れますか？」

少し急かすように、焦ったような声色でエリアは言う。

『貴方が望むのなら』そう竜が口にした瞬間、突如として眼前の光景が見えなくなる。

辺りが暗くなったせいで視認出来なくなったのではない。むしろその逆、瞳を焼かれそうなほど強烈な眩い閃光のせいで、まったくと言っていいほど視覚がその役割を果たさなくなってしまったのだ。

「え、ちよ、これええ……っ!？」

目が開けられないせいでジタバタと手を振るしかないエリアは、如実に不安を表す。だが竜はそれすらも無視してしまい、さらに彼は声を張り上げるのだがやはりそれも無視される　と、まともに話し合う気ないだと疑問を通り越して確信に至ってしまうような対応っぷり。

いい加減この訳の分からなさに辟易し始めていたエリアを、今度

はさらに訳の分からない浮遊感が襲う。

ふらつく体はいつ地面に落ちるのか気が気でなく、原因不明という恐怖が体を徐々に硬直させている。

そして極めつけは、突如として眼前に現れた白銀の竜だった。

閃光に包まれたはずの視界に、生えるようにして現れた存在。その眼光に睨み付けられていると理解した時、彼の体はさらに縮こまる。こんなことでは戻ってもすぐに怯むだけだと誰しも思うところだが、それでも恐怖には敵わない。

『少しの間ですが』

突如として口を開いた竜の言葉などに耳は傾けず、ほぼ発狂しているに近いエリアはただ必死に地面を踏みしめようと暴れ続け、

『さようならです』

何故か、竜の腕力によって遙か上空へと投げつけられるのだった。

第二十話 白銀の翼が示す場所へ（後書き）

大分間が空いてしまい、すみませんでした。

勉強やらなんやらで中々、時間がとれず、執筆もまったく言っていないほどです……。

おかげで文章力が下がってしまい、また元に戻るのが難しいかもしれませんが、頑張らせてもらいます。

読んでくださった方、ありがとうございます。

第二十一話 幕引きの時

いつまで経っても、眼前の少年は目覚めなかった。

処置の方法が悪いんじゃない。そもそも処置の仕方が分からないのだ。

だとすれば、祈る以外に私に出来ることは無いじゃないか。

傷口をジリジリと焦がす熱に包まれながらリフェウルは懇願する。エリア・フィーリンツが目覚ますようにと。何事も無かったかのように再び話しかけて欲しい、と……。

「いやだよ、アタシ。アンタがいないとまた一人じゃん……」

両親は私をこの街の孤児院で見つけた。あの馬鹿に最初、「自分が亜人から生まれた」と言ったのは皮肉だ。記録係の娘としてのリフェウル・ハウを生み出す為に、あの人たちはただそれだけの為に私を選んだ。それが本当の事実なのだ。

愛情なんてありやしない、まるで道具と同じだ。

だから私は一人だった。例えば三人でご飯を食べていても、実質的には一人で食べているような気分だった。

そんな時に救ってくれたのが、エリイなのに。

「アタシ、なんも出来ないじゃん!!」

溢れるように目から流れる水滴は、いくら拭おうとも絶えることは無い。彼女は嗚咽を漏らし、ひたすら少年の体を揺さぶる。

「起きなさいよ……」

返ってこない返事に、とうとう彼女は項垂れた。いつしか祈ることも止めて、ただただ泣いた。

どうしてこうなってしまったのだろう、どうして助けられなかったのだろう、どうしてコイツが狙われたのだろう。尽きることの無かった疑問は、今となってはもうどうでもいいものとなっていく。

だが、そんな時だった。

項垂れる彼女の頭に、撫でるように手が添えられたのは……。

「泣いちや駄目だよ」

土埃にまみれ汚れてしまった黒のパンツを手で払い、血に染まった唾液を吐く。苛立ちの垣間見える彼女の表情はしかし、傍から見ると非常に穏やかで、けれどもそれが逆に恐怖心を煽られるようだ。肉体のダメージを確かめるように二、三度関節を鳴らし、アイナは息をついた。

そうして特に肉体の違和感を覚えることもなく、すぐさま神経を前方へと向ける。自分が今、飛ばされてきた場所へと。

「生身の人間相手にふざけてないか……」

腰まで伸びている黒髪を乱雑に掻き毟りながら、やつれた声音はそう言葉を紡ぐ。そしてほぼ全身が炎と化している竜が遠めに見えて、今度はただ吐息だけが漏れた。

「……まずいな」

瓦礫に体を叩きつけた時、頭に昇っていた血はどこへ流れたのだろうか。随分と淡白な声で、真面目なのかふざけているのか、彼女はそんな台詞を呟くのだった。

「そんなことして、ただで済むと思っっているの？」

「……………」

空を漂う陽炎。闇夜の中を踊り、蹂躪するその火炎が形作っているのは、両翼を広げた巨大な竜だ。既存のその上をいく四行文章式魔術の、さらにその上の状態。

だが彼女がこの状態に至るためには本来、カイフィールドの力が必要不可欠なはずだった。

それを、アスは無理矢理、力技だけで押し切ることでも可能にしまっている。故にその魔術の効果は未完全で、今も紅色の鱗が所々、炎の中から垣間見えるのだ。

半身は竜、もう半身は炎。

歪んだ力の使い方により生れた、歪んだ魔術^{結果}。対峙するフェマミ

「はまるで自分の事を示唆されているように思えて、無意識の内に奥歯を噛み締める。

「いっそ全てを壊してしまおうか。突発的にそんな思考が頭をよぎるほど、今の彼女は苛立っていた。

「……っ！」

そんな彼女の心情など露知らず。陽炎はその流動的な動きを唐突に停止させたかと思えば、次の瞬間にはフェマミーを覆わんと広域にわたって展開する。

霧散する炎に舌打ちしながら、フェマミーは右腕を振るった。いっつ底を突いてもおかしくない量の第二魔力を体中から絞り出し、そうして生れた魔力がそこから解き放たれる。

雷の性質に変換された魔力は独自の磁場を形成し、瓦礫の中から鉄骨などの金属を呼び寄せる。

ガツ、と殴りつけるような勢いで衝突した炎は、容赦なくその防御壁ごとフェマミーを飲み込んだ。

刹那の間に金属は融点を迎え、その表面は沸騰した水みたく凹凸が目立つ。一息つくだけで肺が炎に犯されたのかと錯覚するほどの圧倒的な熱量を前に、彼女はとうとう策を講じて脱出することもなく、煌々とした輝きに包まれる。

「そんなことして……も、元の姿に、戻れなくなるわよっ……？」

「そうしていつものように、再びおどけてみせた。

「今更ですね」

だが、そんなことで彼女は止まらない。

「確かにこの魔術は本来、彼がいなければ発動すら出来ませんよ。でもね、それは私の魔力だけでは足りないのではなく、私が形を取り戻す為の魔力をセーブする為に、彼の魔力を換わりに使っているにすぎないのですよ」

完全に炎と化した右腕を鞭のように振るう。瓦礫や鉄骨などを巻き込んだ一撃は完全にフェマミーの姿を捉え、防御する間も無く焼き焦がそうとその身を包み込んだ。

「デメリットはそれだけ。ただ、私が形を取り戻せなくなるかもしれないだけ。それだけで貴女方を彼から遠ざける事が出来るのなら、私は喜んでこの身を燃やします……！」

更に畳み掛けるようにして、彼女は炎の質を上げる。

より高温に。より高密度に。より膨大な力を、と。

既に半分以上の体が無くなっていた。魔力を絞り出すほどに肉体が削られ、液体が気化するようにその存在はあっさりと消え失せる。だがそれでも彼女は止めない。攻撃の手を緩めない。自分が動いていられる今という機会にしがみ付こうと、黒煙で視界の遮られた箇所にこれでもかというほど炎を撒き散らす。

「あ、が、あああああツツツ……！！！！！」

咆哮と絶叫を織り交ぜたような轟音を吐き出し、とうとう竜の形は跡形も無く消えた。肉を燃やして血を熱に変え、アスは魔力魔術となつてフェマミーに降り注ぐ。

「私は！ 彼は！ どう謝ればいい!?」

小鳥の形を模した炎が四方八方から敵へと向かう。巨木のような炎で形作られた柱は垂直に降下する。炎の槍は大地を抉りながら突き進む。

「あの子が目覚めた時に、私たちはどうやって謝ればいいんですか?!」

なりふり構わず全身を炎に変え、作り出した二つの火球を投げつけた。常人ならば既に骨すら残っていない熱量だが、相手はあのフェマミーだ。

だからこそアスは、今まで放ってきた炎を全て自身の元に戻し、町全体を照らさんばかりの業火を生み出した。

の、だが。

「う、あ………」

そんな声と共に、先ほどまで煌々と燃えていた炎は突然、霧散し始めた。力を維持できなくなり、巨大な炎はその一部から徐々に魔力へと戻っていく。

思い出したように吹いた風が黒煙を晴らした時、そこにフェマミ
ー・アレイチエルドの姿はどこにも見当たらない。

「まったく、あの人は」

奥歯を噛み締めながら、けれども声音はどこか淡泊な台詞。諦め
にも似た表情で炎の向こう側を覗く瞳は、どこか最初から分かつて
いたような風だった。

「あの人が通った道は、いつつも焼け野原だな」

いまだ燃え続ける木材を手にとつて、握りつぶす。すると砂粒の
ように、さらさらと手の平から流れ落ちた。

また、止められなかった。いつもと同じで、私はあの人に勝てな
い。

左足に巻いてあるベルトを手にし、魔術文字を見つめる。列記さ
れた二十四のその内、一部が発行を始めた。

「……………クソッ」

アイナは軽く足に力を込めて跳躍する。

魔術の恩恵を受けたその体は、暗闇の中に吸い込まれていった。

第二十一話 幕引きの時（後書き）

久しぶりの投稿です。遅れてすみませんでした……。

気付けば6000P?突破してました。本当にありがとうございます
す!!!

これからはなるべく更新していきたいと思いますので、コメなどよろしく願います^^

では、読んでくださった方、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8070n/>

羽と言葉が示す場所

2012年1月15日01時46分発行